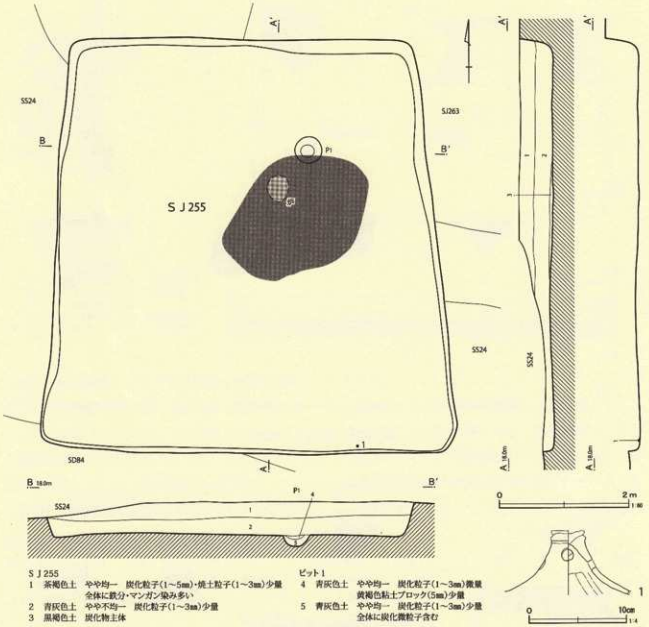
第255号住居跡（第270図）

調査区の北側西寄り、N－58・59グリッドに位置する。第263号住居跡、第24号墳、第84号溝跡と重複する。東２ｍに第248号住居跡、南１ｍに第257号住居跡がある。

平面形は南辺が北辺に比べやや長く歪んだ長方形であるが、整然と掘り込まれ、壁は垂直に立ち上がる。主軸方向はN－０°を指す。規模は長軸6.36ｍ、短軸5.65ｍ、深さ51.0㎝を測る。炉跡の周囲に炭化物層が見られた。床面は平坦である。

施設は炉跡、ピットを検出した。炉跡は中央よりやや北側に位置し、楕円形と推定される。推定径36.0×39.0㎝を測る。ピットは径42.0㎝、深さ15.0㎝を測る。

遺物は、少量検出し、図示したものは１の四方透かしの高坏である。南壁際で検出した。



第270図　第255号住居跡・出土遺物

第111表　第255号住居跡出土遺物観察表（第270図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	－	6.5	－	ACEHIK	60	普通	橙	四孔　風化　No.1	

第256号住居跡（第271・272図）

調査区の北側西寄り、P－58グリッドに位置する。第241号住居跡と重複する。

平面形は南北方向に非常に長い長方形である。主軸方向はN－6°－Eを指す。規模は長軸6.12m、短軸3.48m、深さ21.0cmを測る。

施設は貯蔵穴のみ検出した。南東コーナーに位置し、径60.0cm、深さ27.0cmを測る。

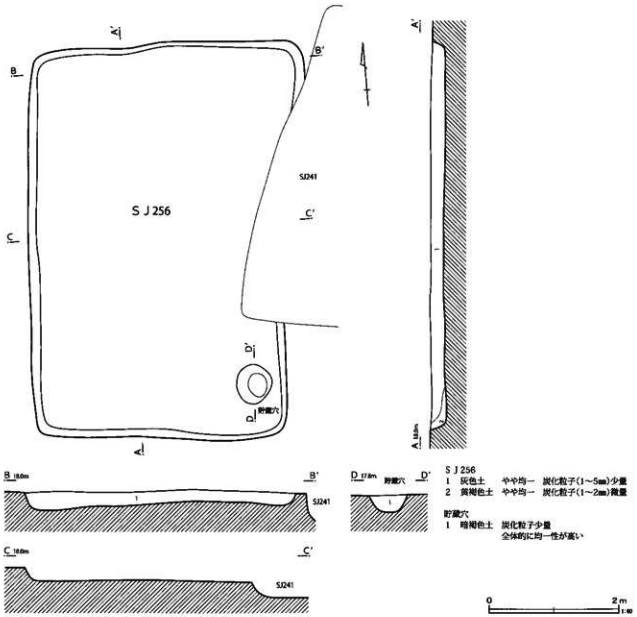
遺物は、1・2が壺である。1は折り返し口縁である。3・5は叩き甕である。3は口縁部が上方に立ち上がる。6～9は高坏である。9は坏部非常に大きく開く。10は敲石。1は砥石である。

第257号住居跡（第273～275図）

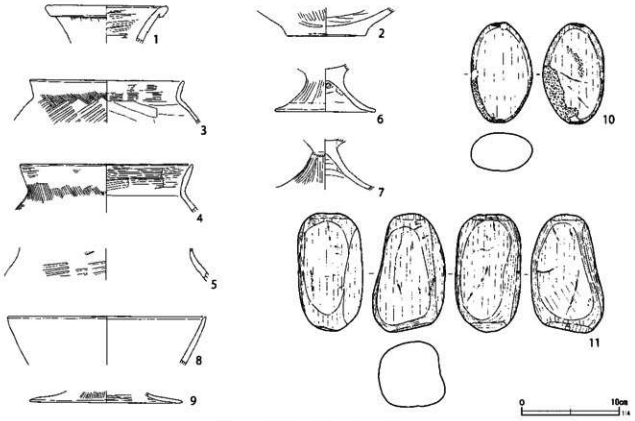
調査区の北側西寄り、O－59グリッドに位置する。第242号住居跡、第84・85号溝跡と重複する。南東2mに第270号住居跡、第22号墳がある。

平面形は歪んだ方形と推定される。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸4.77m、短軸4.25m、深さ48.0cmを測る。

施設は貯蔵穴のみの検出であった。南東側に位



第271図　第256号住居跡



第272図　第256号住居跡出土遺物

第112表　第256号住居跡出土遺物観察表（第272図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　考	図版
1	土師器	壺	(12.2)	3.9	－	ABEHI	10	普通	褐		
2	土師器	壺	－	2.9	(8.0)	ACEHJ	30	普通	にぶい橙		
3	土師器	甕	(15.8)	4.3	－	GHIJ	10	普通	橙	叩き甕	107-3
4	土師器	甕	(17.8)	4.9	－	AEHIJ	15	普通	にぶい橙		
5	土師器	甕	－	3.2	－	BEHI	5	普通	橙	叩き甕	107-3
6	土師器	高坏	－	4.9	10.3	EHJ	55	普通	浅黄橙		
7	土師器	高坏	－	5.2	－	ACHI	30	普通	橙	器面磨滅	
8	土師器	高坏	(20.3)	5.0	－	EHI	5	普通	明赤褐		
9	土師器	高坏	－	1.2	(15.5)	CEIK	10	普通	にぶい橙		
10	石製品	敲石	長さ10.4	幅6.3	厚さ4.0	重さ383.6	石材	砂岩			153-1
11	石製品	砥石	長さ11.5	幅7.5	厚さ6.8	重さ1041.4	石材	砂岩			

置し、ほぼ円形を呈している。径66.6cm、深さ43.5cmを測る。

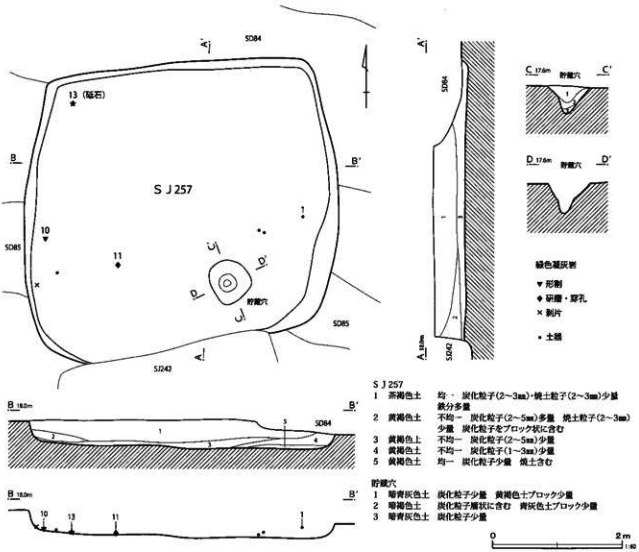
遺物の出土状況は、床面上に破片が検出された。1の小型壺は東壁際の中央付近から検出された。

遺物は、1は小型壺で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。2は複合口縁壺、3は台付甕、4・5は甕の口縁部である。6は壺の胴部である。RL単節縄文を施文しその下にS字状結節文を2段施文している。7は壺の胴部である。6と同一個体の可能性が高い。RL単節縄文を施文しその下にS字状結節文を2段施文している。

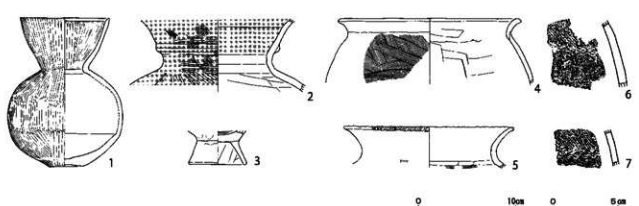
8～12は玉作りに関連する石製品である。いずれも石材は、緑色凝灰岩である。

8～11は管玉未製品である。

8は荒削工程の未製品である。部分的に原礫面が残存している。形状を板状に作りだしている工



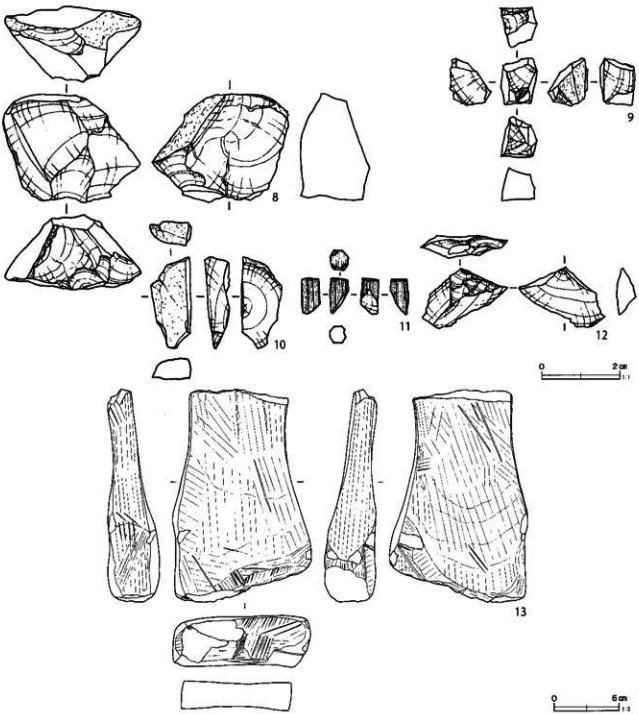
第273図　第257号住居跡



第274図　第257号住居跡出土遺物（1）

程途中であると考えられる。

9・10は、形割工程の未製品である。9は形割の破損品で、破損面に再加工の痕跡が認められる。右側面には風化面が残存している。10は、表面に



第275図　第257号住居跡出土遺物（2）

原礫面を大きく残すもので、荒割の板状に加工したものの端部分を割り取ったものと考えられるが、厚みが足りず放棄されたと推定される。

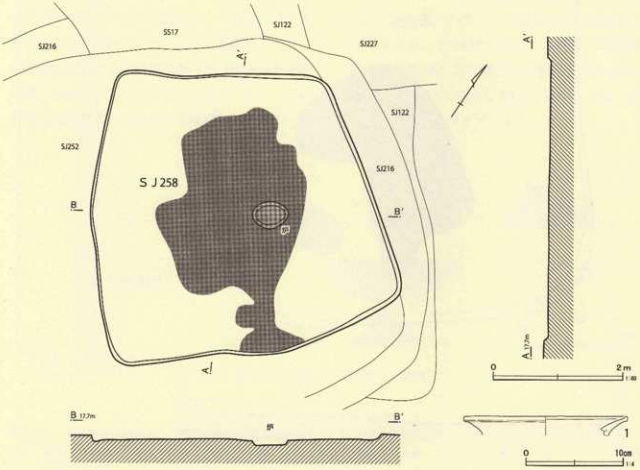
11は研磨工程の未製品である。下半分を右側面から斜め方向に欠損している。調整工程後、四角柱の6面に研磨を行った後、多角柱状に研磨を行う工程のものである。四角柱の角部分を研磨して潰し、八角柱状に加工している。上面には穿孔の痕跡は認められなかった。

12は剥片である。大型で、表面には細かな調整が認められる。扇状となる横長の剥片である。

13は緑泥片岩の砥石である。

第113表　第257号住居跡出土遺物観察表（第274・275図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	小型壺	9.2	15.1	3.5	ADGHIK	95	普通	橙	№2	
2	土師器	壺	—	7.5	—	EHIK	20	普通	にぶい橙	赤彩	
3	土師器	台付甕	—	3.4	5.8	AEHIK	70	普通	明赤褐		
4	土師器	甕	(18.0)	6.8	—	AJM	45	普通	明赤褐		
5	土師器	甕	17.6	4.1	—	ACEHIJ	20	普通	明赤褐		
6	弥生	壺	—	5.0	—	AHI	5	普通	橙		
7	弥生	壺	—	2.8	—	EHI	5	普通	にぶい黄橙		
8	石製品	管玉未製品	長さ2.7	幅3.5	厚さ1.9	重さ15.7　石材　緑色凝灰岩				荒割	150-2
9	石製品	管玉未製品	長さ1.2	幅0.9	厚さ1.0	重さ1.0　石材　緑色凝灰岩				形割	
10	石製品	管玉未製品	長さ2.4	幅1.0	厚さ0.6	重さ1.1　石材　緑色凝灰岩				№6　形割	
11	石製品	管玉未製品	長さ0.9	幅0.5	厚さ0.6	重さ0.2　石材　緑色凝灰岩				№8　研磨	150-2
12	石製品	剥片	長さ1.5	幅2.2	厚さ0.6	重さ1.0　石材　緑色凝灰岩					150-2
13	石製品	砥石	長さ16.3	幅10.7	厚さ4.0	重さ877.3　石材　緑泥片岩				№1	150-4



第276図　第258号住居跡・出土遺物

第114表　第258号住居跡出土遺物観察表（第276図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	甕	(16.8)	1.9	—	ACEHIK	5	普通	橙	風化　二重口縁か	

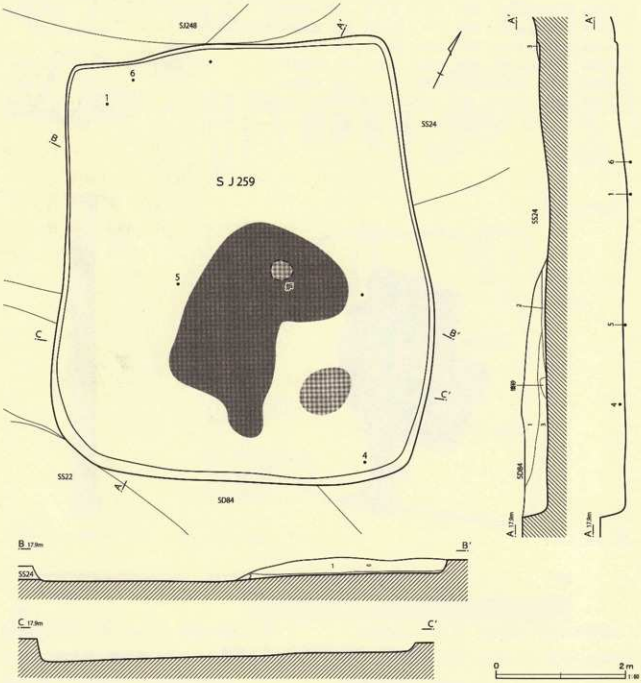
第258号住居跡（第276図）

調査区の南側西寄りX－54グリッドに位置する。第122・216・252号住居跡、第17号墳と重複する。

重複する住居の第216・252号住居跡は弥生時代の住居跡である。

平面形は歪んだ台形である。主軸方向はN－35°－Wを指す。規模は長軸4.29m、短軸3.78m、深さ5.2cmを測る。

施設は炉跡のみの検出であった。中央よりやや東側に位置し、楕円形を呈している。径42.0×51.6cm、深さ2.0cmを測る。炉跡の周辺の床直上には炭化物が堆積していた。床面は平坦である。



SJ259
1　青灰色土　不均一　炭化粒子(1～3mm)・焼土粒子(1～10mm)少量
炭化物と焼土が部分的にブロック状(10～20mm)に含まれる
黄褐色粘土ブロック(2～5mm)少量
2　青灰色粘土　やや均一　炭化粒子(2～3mm)・黄褐色土ブロック(1～5mm)少量
ブロック量は1層より若干少ない
3　青灰色粘土　やや均一　炭化粒子(2～5mm)・黄褐色ブロック(2～10mm)少量

第277図　第259号住居跡

遺物は、ほとんど検出されなかった。

第259号住居跡（第277・278図）

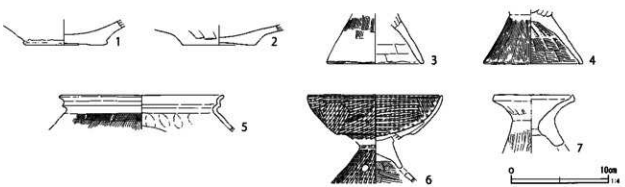
調査区の北側東寄り、N・O－60グリッドに位置する。第248号住居跡、第84号溝跡、第22号墳と重複する。東1mに第298号住居跡、第25号墳がある。

平面形は長方形である。主軸方向はN－27°－Wを指す。規模は長軸6.78m、短軸5.27m、深さ39.0cmを測る。覆土は、第24号墳によって住居跡中央部分が削平されていたため検出が難しかった。床面はやや西側に傾斜をもち低くなっている。また、北東寄りの床面がわずかに窪み、全体的に凹凸が見られた。東壁は南側でやや膨らみ、西壁もも南側でやや膨らむ。住居跡コーナーは、ほぼ方形となるが、南西コーナーは少し丸味をもつ。

施設は炉跡のみの検出であった。中央よりやや東側に位置している。推定径33.0cmを測る。炉跡の周辺の床直上には炭化物が堆積し、床面の一部は焼土化していた。炉跡周辺の床面は平坦であった。

遺物の出土状況は、北西コーナー部分から高坏と壺底部を検出し、南東コーナー部分から台付甕、炉跡と東壁の中間から碧玉のコアが検出された。

遺物は、1・2が壺底部である。いずれもわずかに上げ底気味である。胴部は外方に大きく開いて立ち上がる。3・4が台付甕の台部である。5はS字状口縁甕である。頸部外面には縦方向にハケメに加え、横線が一段施されている。内面には指頭圧痕が残る。6は埦形の坏部をもつ高坏である。坏部内外面は丁寧なミガキが施されている。脚部は「ハ」の字状に開き、外面はミガキ、内面はハケメが施されている。脚部中位に四方透かしが見られる。7は器台である。坏部はハの字状に開く。口唇部上方に突出し断面三角形を呈する。脚部は欠損しているが、透かし孔が見られ、対の位置に付く二孔タイプである。



第278図　第259号住居跡出土遺物

第115表　第259号住居跡出土遺物観察表（第278図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	2.6	8.7	AEJ	65	普通	灰黄	№4	
2	土師器	壺	－	2.1	7.6	HM	25	普通	褐灰		
3	土師器	台付甕	－	5.1	(9.8)	AEHI	25	普通	浅黄橙		
4	土師器	台付甕	－	5.5	10.2	AHJM	100	普通	にぶい褐	№1	
5	土師器	台付甕	(16.8)	3.7	－	AEHI	10	良好	明赤褐	S字甕	107-6
6	土師器	高坏	(13.8)	9.4	－	HIK	60	普通	橙	赤彩　四孔　№3	
7	土師器	器台	(8.2)	5.9	－	AEHIK	50	普通	明赤褐	二孔	

第260号住居跡（第279・280図）

調査区の北側東寄り、M・N－61グリッドに位置する。第303号住居跡と重複している。西1ｍ内に第297号住居跡がある。

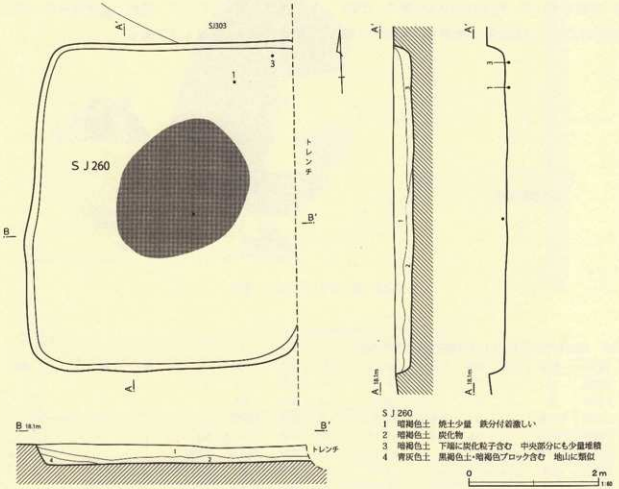
平面形は、東側に入れたトレンチにより確認できなかったが、長方形と思われる。主軸方向はN－0°を指す。ほぼ真北を向く住居跡である。規模は残存する部分で、長軸5.05ｍ、短軸3.96ｍ、深さ30.0cmを測る。南東コーナー部分がわずかに検出された。

断面観察によると、第2層は炭化物層で、床直上に炭化物層が見られた。床面は平坦である。

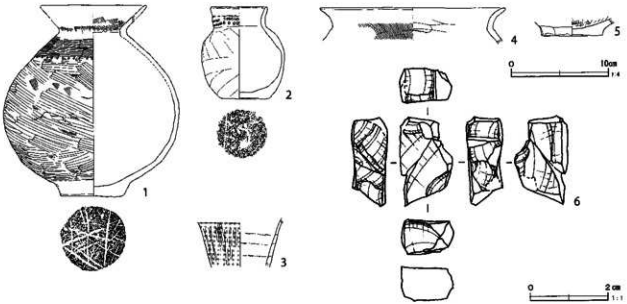
遺物の出土状況は、北東壁際に壺を検出した。

遺物は、1が壺である。体部外面ミガキ、頸部にはハケメを施す。その境には刺突文をめぐらす。口縁部内面には櫛描波状文を1段めぐらす。底部外面には木葉痕が残る。2は小型壺である。粗雑な作りであるが口縁部外面に二条の刺突文をめぐらす。3は口縁部が外形に長く伸びる小型壺の口縁である。外面はミガキが施され、赤彩されている。内面は粘土紐の輪積み痕が明瞭に残る。4は甕の口縁部破片である。口縁部は頸部から緩やかに開いて口縁部に立ち上がる。外面は縦方向のハケメの後、横ナデが施されている。5は壺で平底の底部破片である。

6は、管玉未製品である。調整工程の未製品である。石材は緑色凝灰岩である。右側面の一部と下方部分が破損しており、不定形となっている。形割工程の後、調整工程で破損したものと考えられる。風化のためか、脆く割れ易くなっている。



第279図　第260号住居跡



第280図　第260号住居跡出土遺物

第116表　第260号住居跡出土遺物観察表（第280図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	(8.8)	18.5	6.5	ACEIKM	95	普通	橙	木葉痕　№1	89-4
2	土師器	小型壺	5.8	9.4	4.7	AEHI	80	普通	にぶい黄橙	木葉痕	94-6
3	土師器	小型壺	―	5.0	―	AHIK	20	普通	にぶい橙	赤彩　№2	
4	土師器	甕	(19.0)	3.4	―	ACEIK	10	普通	にぶい橙		
5	土師器	壺	―	1.8	6.4	AEHIK	95	普通	にぶい赤褐		
6	石製品	管玉未製品	長さ2.2	幅1.4	厚さ0.9	重さ3.1　石材　緑色凝灰岩				№3　形割	151-3

第261号住居跡（第281・282図）

調査区の北側東寄り、L－60・61グリッドに位置する。第134・251・253・300号住居跡と重複する。

平面形は歪んだ長方形と推定される。主軸方向はN－45°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸5.88m、短軸5.22m、深さ42.0cmを測る。断面観察によると、第3層の直下に炭化物の堆積層が見られた。住居跡中央の床直上には炭化物層がやや厚く堆積する。さらに、第5層下面の床直上にも若干の炭化層が認められた。床面は平坦である。

施設は炉跡のみの検出であった。中央に位置し、楕円形を呈している。径37.0×53.0cm、深さ1.5cmを測る。

遺物の出土状況は、小片を少量検出した。

遺物は、1が大型壺の底部、2は小型の壺底部、3は壺の胴上半部である。RL単節縄文を連続施文している。無文部を赤彩している。4は壺の胴上半部である。LR単節縄文を施文している。無文部を赤彩している。

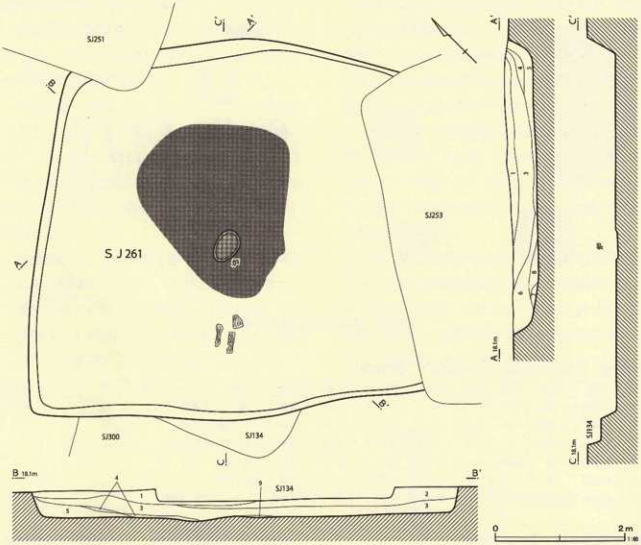
第262号住居跡（第283・284図）

調査区の北側東寄り、K－60グリッドに位置する。第251・299号住居跡と重複する。

平面形は方形と推定される。主軸方向はN－47°－Eを指す。規模は長軸5.03m、短軸4.74m、深さ47.4cmを測る。住居跡の掘り込みはやや深く第3層下面の床直上に炭化物層が見られた。床面は平坦である。

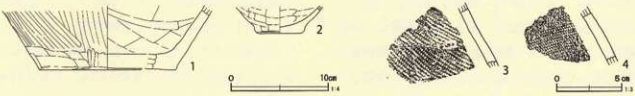
施設は炉跡のみの検出であった。ほぼ中央に位置し、楕円形と推定される。推定径45.0×60.0cmを測る。

遺物は、破片のみの検出である。1は折り返し



SJ261
1 茶褐色土 不均一 炭化粒子(2～5mm)・焼土粒子(1～2mm)少量
2 茶褐色土 不均一 炭化粒子(2～3mm)少量
3 茶褐色土 不均一 炭化粒子(2～5mm)・焼土粒子(2～10mm)少量
4 黄褐色土 不均一 炭化粒子(2～5mm)少量
5 黄褐色土 不均一 炭化粒子(2～3mm)少量
6 茶褐色土 不均一 炭化粒子(2～3mm)少量
7 黄褐色土 不均一 炭化粒子(1～2mm)少量
8 茶褐色土 不均一 炭化粒子(1～2mm)少量
9 赤褐色土 焼土主体

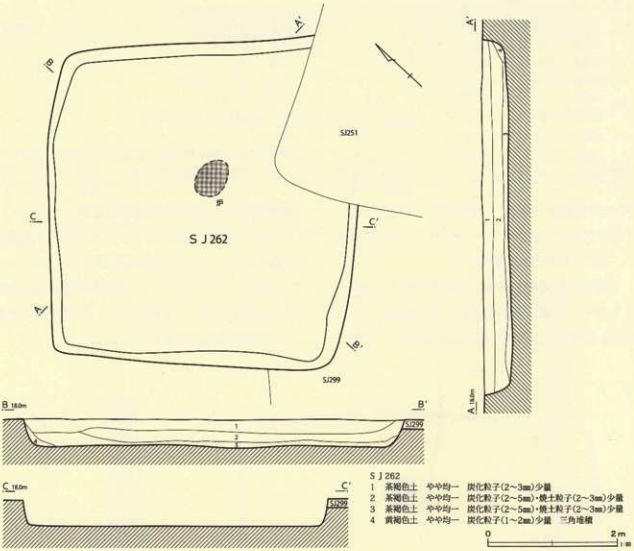
第281図　第261号住居跡



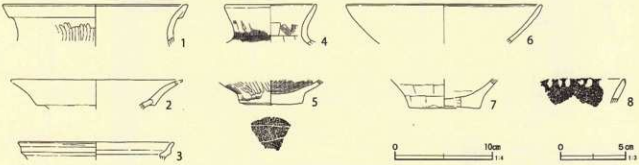
第282図　第261号住居跡出土遺物

第117表　第261号住居跡出土遺物観察表（第282図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	6.6	(14.0)	ACEHIK	25	普通	にぶい橙		
2	土師器	小型壺	－	2.8	(4.9)	AEHIJK	25	普通	にぶい褐		
3	弥生	壺	－	4.8	－	AEIJ	5	普通	灰白	雲母多　赤彩	
4	弥生	壺	－	4.2	－	AHIJ	5	普通	橙	赤彩	



第283図　第262号住居跡



第284図　第262号住居跡出土遺物

口縁壺の口唇端部破片、2は複合口縁壺、3はS字状口縁甕の破片である。

4・5は壺、6は高坏の坏部破片である。口径が大きく外傾に開くが、口唇部がわずかに内傾する。7は甕底部、8は口唇部にキザミをもつ甕口縁の破片である。

第118表　第262号住居跡出土遺物観察表（第284図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	(19.0)	4.3	—	AHJ	15	普通	にぶい褐		
2	土師器	壺	—	3.0	—	EHIK	10	普通	浅黄橙		
3	土師器	台付甕	(15.8)	1.8	—	AHI	5	良好	橙	S字甕	
4	土師器	壺	(9.3)	3.9	—	AHI	10	普通	にぶい黄橙		
5	土師器	壺	—	2.5	(6.4)	J	25	普通	にぶい黄橙	赤彩　木葉痕	
6	土師器	高坏	(20.0)	4.0	—	HIJK	10	普通	橙		
7	土師器	甕	—	3.0	(7.4)	EHIJK	30	普通	にぶい黄褐		
8	土師器	甕	—	1.9	—	CEHIK	5	普通	橙	口唇キザミ	

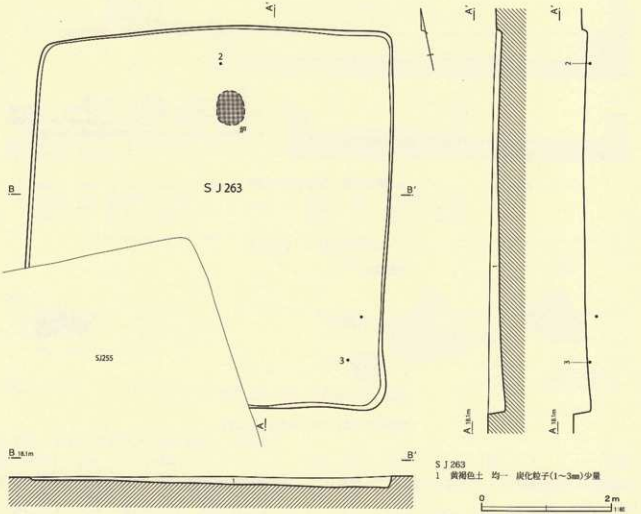
第263号住居跡（第285・286図）

調査区の北側西寄り、N－59グリッドに位置する。第255号住居跡と重複する。

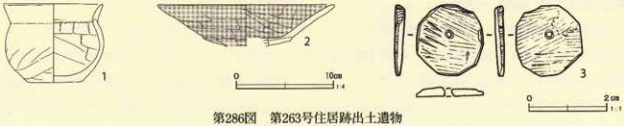
平面形は長方形である。主軸方向はN－13°－Eを指す。規模は長軸5.88m、短軸5.58m、深さ21.0cmを測る。住居跡の掘り込みは浅く、西側で床面を確認、西壁の確認はできなかった。

施設は炉跡のみの検出であった。炉跡は住居跡北側に位置し、推定径60.0cmを測る。

遺物は、1が小型鉢、2は炉跡の北側から検出された赤彩を施した有稜高坏で、坏部は外反する。3は石製模造品の有孔円板である。



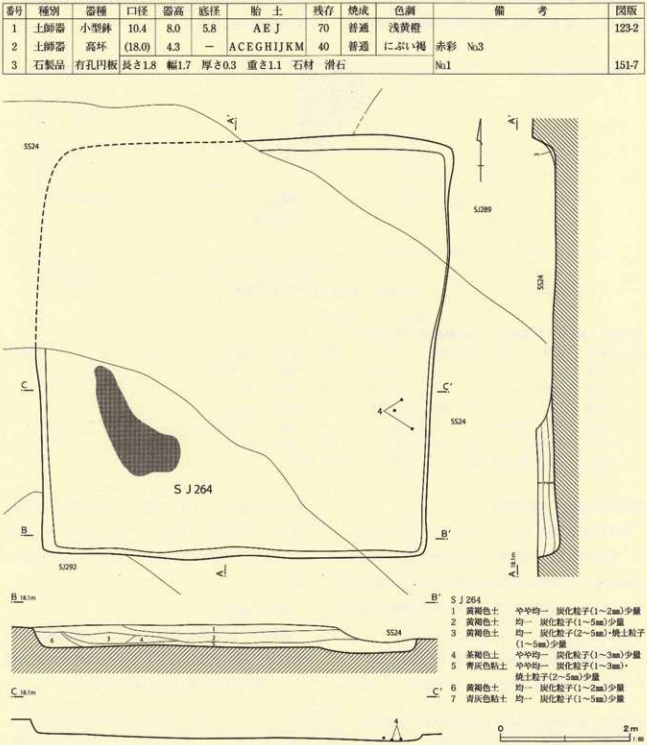
第285図　第263号住居跡



第286図　第263号住居跡出土遺物

第119表　第263号住居跡出土遺物観察表（第286図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型鉢	10.4	8.0	5.8	AEJ	70	普通	浅黄橙		123-2
2	土師器	高坏	(18.0)	4.3	—	ACEGHIJKM	40	普通	にぶい褐	赤彩　No3	
3	石製品	有孔円板	長さ1.8　幅1.7　厚さ0.3　重さ1.1　石材　滑石							No1	151-7



SJ264
1　黄褐色土　やや均一　炭化粒子(1～2mm)少量
2　黄褐色土　均一　炭化粒子(1～5mm)少量
3　黄褐色土　均一　炭化粒子(2～5mm)・焼土粒子(1～5mm)少量
4　茶褐色土　やや均一　炭化粒子(1～3mm)
5　青灰色粘土　やや均一　炭化粒子(1～3mm)・焼土粒子(2～5mm)少量
6　黄褐色土　均一　炭化粒子(1～2mm)少量
7　青灰色粘土　均一　炭化粒子(1～5mm)少量

第287図　第264号住居跡

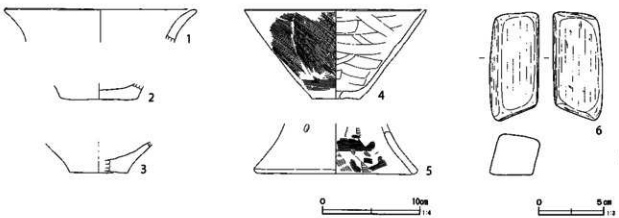
第264号住居跡（第287・288図）

調査区の北側東寄り、L・M－59・60グリッドに位置する。第289・292号住居跡、第24号墳と重複する。南西1mに第254号住居跡がある。

平面形は方形である。主軸方向はN－2°－Eを指す。規模は長軸6.36m、短軸6.30m、深さ36.0cmを測る。第5層の下面、床直上には炭化物層が見られた。床面は不安定で北側の周溝部分が下がっている。

施設は検出できなかった。

遺物は、1・2が甕、3が壺の破片である。4の甑は東壁やや南寄りから検出された。甑は逆「ハ」の字状に直線的に体部が立ち上がる。底部には中央に一ヵ所孔が開いている。5は「ハ」の字状に開く高坏脚部である。6は砥石で断面形が四角い直方体である。



第288図　第264号住居跡出土遺物

第120表　第264号住居跡出土遺物観察表（第288図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(19.7)	3.4	－	EHIK	5	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	甕	－	1.6	(8.0)	EHIK	25	普通	灰黄		
3	土師器	壺	－	3.2	(6.0)	HIK	15	普通	灰白		
4	土師器	甑	(18.4)	9.1	5.0	DEH	70	普通	にぶい黄橙	No1・3	
5	土師器	高坏	－	5.1	(16.0)	EHIK	20	普通	灰白		
6	石製品	砥石	長さ8.3	幅3.9	厚さ3.3	重さ197.2	石材	砂岩			

第265号住居跡（第289図）

調査区の北側西寄り、L－59グリッドに位置する。第100号溝跡と重複する。南側1mに第24号墳がある。住居跡は第48号溝跡と並行して検出された。また、住居跡の下から第100号溝跡を確認した。

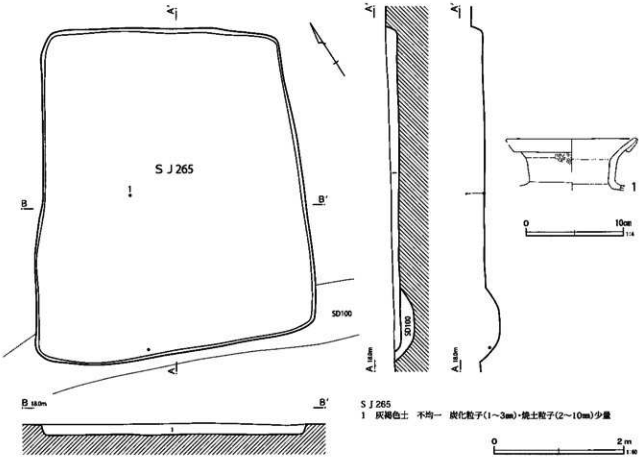
平面形は長方形である。主軸方向はN－35°－Eを指す。規模は長軸5.04m、短軸4.02m、深さ18.0cmを測る。住居跡の掘り込みは浅く、覆土は地山の灰褐色粘土がブロック状に混在する。床直上には炭化物層が見られた。床面はやや不安定である。

施設は検出できなかった。

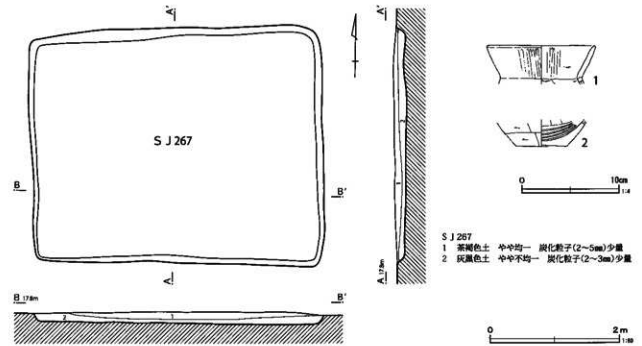
遺物は、住居跡中央付近から1の壺口縁部を検出した。頸部が柱状に立ち上がり口縁が外側に開く。口唇部外面に粘土紐を貼り付け厚くする。

第121表　第265号住居跡出土遺物観察表（第289図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	5.3	－	CEHIK	40	普通	橙	器面磨滅　No2	80-5



第289図　第265号住居跡・出土遺物



第290図　第267号住居跡・出土遺物

第267号住居跡（第290・291図）

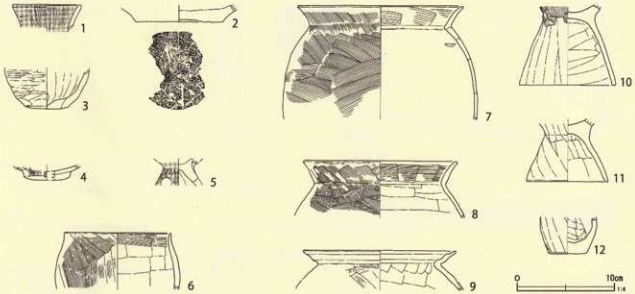
調査区の中央西寄り、Q・R－59・60に位置する。第21号墳内にある。北西1ｍに第282号住居跡がある。

平面形は長方形である。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は長軸4.47ｍ、短軸3.63ｍ、深さ18.0cmを測る。掘り込みが浅い。

施設は検出できなかった。

遺物は、覆土中から少量検出された。1は小型壺の口縁部破片である。2は壺の底部である。

また、本住居跡の周辺遺構外から壺・甕・台付甕・甑などの遺物を検出し、主なものを1～12に図示した。1～4は壺である。5は高坏、6は鉢、7・8は甕、9～11は台付甕である。9はS字状口縁甕であるが、口縁が外側に開いている。12はミニチュア土器である。



第291図　第267号住居跡（周辺）出土遺物

第122表　第267号住居跡出土遺物観察表（第290図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	小型壺	(11.0)	4.0	－	AEHIK	25	普通	橙		
2	土師器	壺	－	2.8	5.2	AEHIK	80	普通	にぶい黄橙	雲母多	

第123表　第267号住居跡（周辺）出土遺物観察表（第291図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(6.9)	2.8	－	AEHIK	20	普通	赤褐	赤彩	
2	土師器	壺	－	1.7	(9.0)	AEHIK	45	普通	にぶい橙	本葉痕　輪台状か	
3	土師器	壺	－	4.2	4.4	ACEHIK	30	良好	橙		
4	土師器	壺	－	1.6	(4.8)	AEGHIK	45	普通	にぶい黄橙	底部外面二次被熱	
5	土師器	高坏	－	2.7	－	AHIJK	70	普通	にぶい橙	赤彩	
6	土師器	鉢	(11.0)	5.8	－	EHIJKM	25	普通	にぶい褐		
7	土師器	甕	(17.0)	11.7	－	ADHIJ	20	普通	灰褐		
8	土師器	甕	(15.8)	5.8	－	AEHIJK	25	普通	にぶい黄褐		
9	土師器	台付甕	(15.6)	4.0	－	AEHIJK	20	普通	にぶい黄橙	S字甕	
10	土師器	台付甕	－	8.0	(9.9)	AEHIJ	30	普通	にぶい橙	外面二次被熱	
11	土師器	台付甕	－	6.4	8.3	ABEIJ	90	普通	にぶい赤褐	外面煤付着	
12	土師器	ミニチュア	－	3.7	3.7	AEHIJK	60	普通	にぶい赤褐		

第268号住居跡（第292～299図）

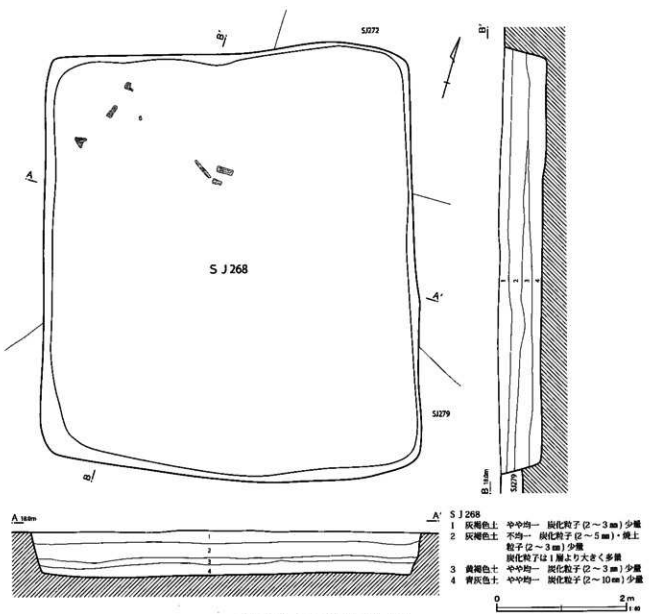
調査区の北側東寄り、K・L－61・62グリッドに位置する。第272・279号住居跡と重複する。

平面形は長方形である。主軸方向はN－15°－Wを指す。規模は、長軸5.88m、短軸5.22m、深さ42.0cmを測る。本集落の中でもかなり大型の住居跡である。主軸は第48号溝跡に並行する。

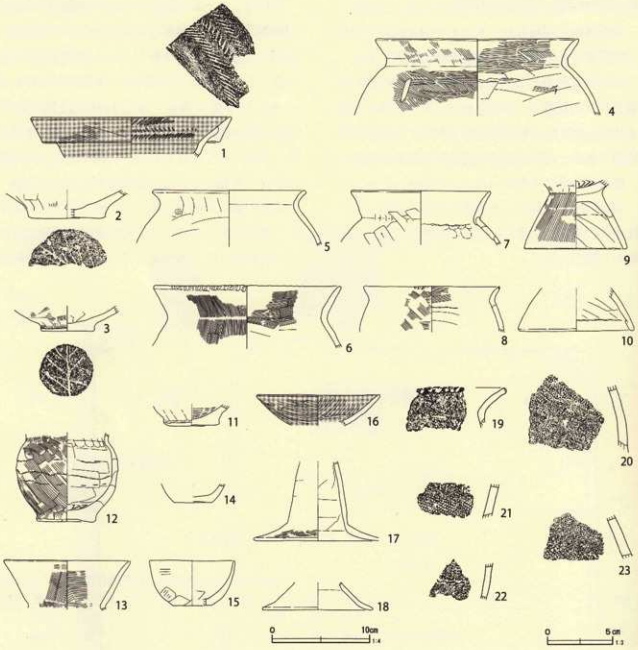
施設は検出できなかった。

遺物の出土状況は、土器破片を多く検出したが、住居跡の東寄りを中心に床面から碧玉のチップを数多く検出した。

遺物は、1～23を図示した。1は壺の口縁部で、口縁端部が断面三角形になる。内面には綾杉状にキザミが巡る。装飾されたパレス壺の破片とみられる。2・3は壺で底部外面に木葉痕が付く。4～8・11は甕である。9・10は台付甕の台部、12・13は小型壺、14・15は鉢、16～18は高坏である。19は大きく外反する甕の口縁である。口端部にキザミを施している。器面は無文である。20・21が壺の胴上半部である。RL縄文を帯状に施文し、他を無文としている。22は壺胴上半部である。S字状結節文を2段施文している。23は壺の胴部



第292図　第268号住居跡（1）



第293図　第268号住居跡出土遺物（1）

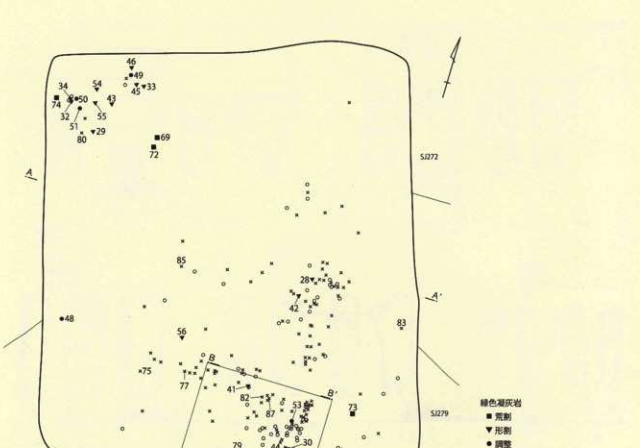
である。ＲＬ単節縄文を施文している。無文部を赤彩している。

24～90は、玉作に関連する遺物である。

住居跡内からは、緑色凝灰岩を石材とする管玉未製品の他、その製作に伴って発生した剥片・砕片類が2000点以上出土した。また、水晶の勾玉未製品１点が出土した。他に、図示はしなかったが、少量の水晶の破片・砕片、黒曜石の剥片・砕片、微量のメノウの剥片が出土した。黒曜石を石材とする玉類は検出されていないが、第295号住居跡第341図47の剥片など、玉作関連遺物が出土する遺構内から黒曜石の剥片などが検出されることから、玉作に関連する遺物とした。

24～88は、管玉の玉作に関連する遺物である。第268号住居跡から出土した玉作に関連する遺物のほとんどを、緑色凝灰岩の管玉の未製品や、剥片・砕片が占めている。

24～68は、管玉未製品である。管玉の製作工程

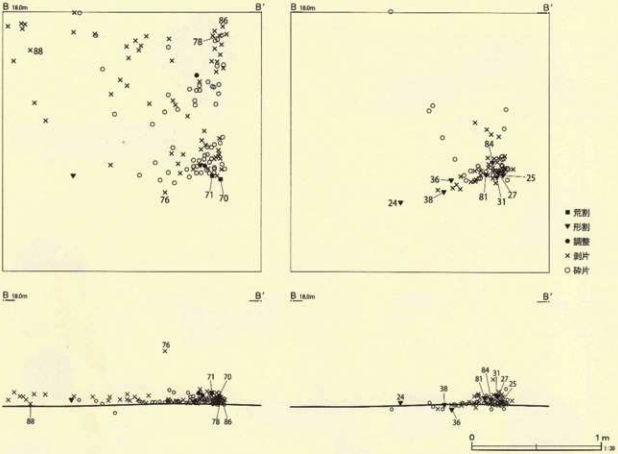


第294図　第268号住居跡（2）

は、大きく荒割工程、形割工程、調整工程、研磨・穿孔工程の4つに分類される。荒割工程は、採集した原石を荒く打ち割り、板状に加工する工程である。形割工程は、荒割工程で作り出された板状の未製品を分割して角柱状の未製品を作り出す工程である。調整工程は、形割に細かい調整や敲打を加え、形状を整える工程である。研磨・穿孔工程は、調整後、角柱体の6面を研磨し、その後多角柱状に研磨し、穿孔を行い、最後に仕上げの研磨を加える工程である。以上の工程ごとに、管玉未製品を分類していくこととする。

第268号住居跡からは、荒割工程の未製品は出土しなかった。

25～34、37～39、41～43、45、46、51、54、56は形割工程の管玉未製品である。器面の一部に、風化面や節理面を持つものが多い。節理面は平坦なため、そのまま角柱体の一面として利用している。また、短く破損したものも多く、形割工程の割り取りで破損したものと考えられるが、大きさを揃えるため端部を割り取った可能性も考えられ



第295図　第268号住居跡（3）

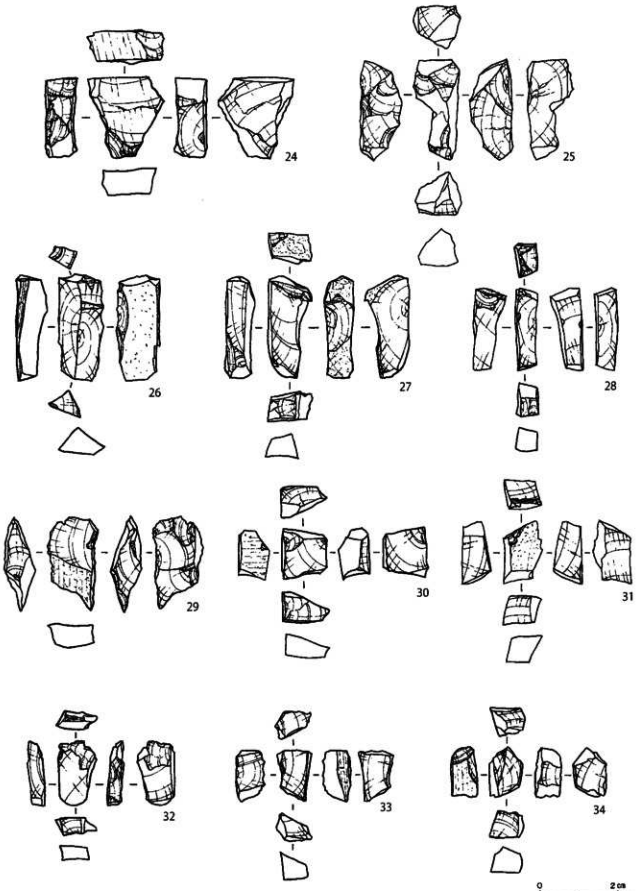
る。また、角柱状に割れ取られなかったため、廃棄したと考えられるものも出土した。25・26は横断面形が、三角形状に近いもので角柱状に形割ができなかったものと考えられる。また29・30・32は、薄く割り取られたため、使用できなかったものと考えられる。

また、28の裏面の剥離面には、打点の反対側に割り取り時に押さえた痕跡が認められた。

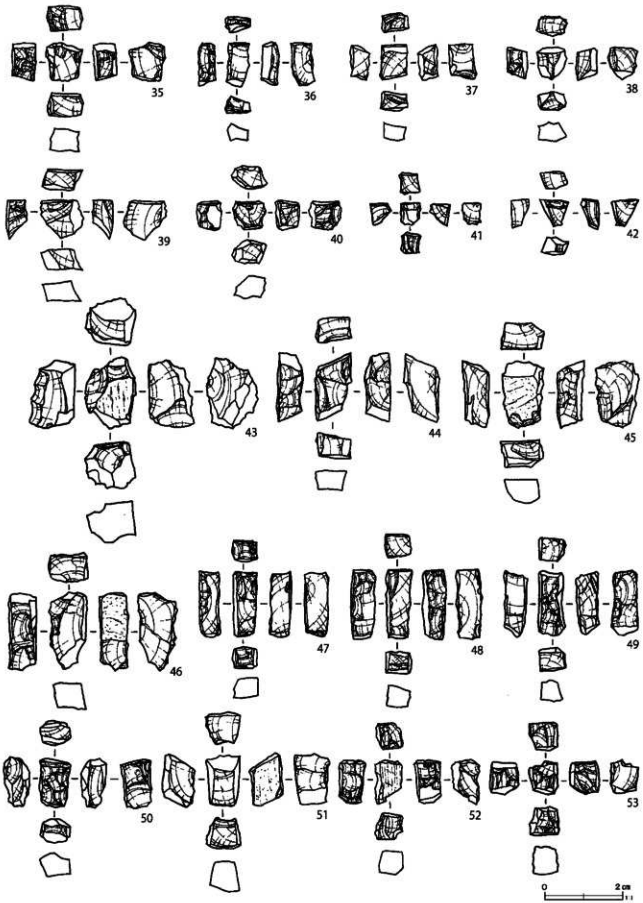
24、35、36、40、44、47～50、52、53、55は調整工程の未製品である。1面のみに細かい調整を加えるもの、2面以上から全面に細かい調整を加えているものなどがある。形割工程時に割り取った裏面の剥離面は平坦に近いため、側面部から調整を加える始めるものが多い。

47～49は形状の整った調整工程の管玉未製品であるが、他は形状が整ってないものや、短く破損したものである。36は角柱体の厚みが薄いため、調整時に廃棄されたと考えられる。短く破損したものは、調整の工程中に破損したものと考えられるが、形割と同様に端部を割り取って形状を整えたため発生した剥片である可能性も考えられる。しかしながら、ここでは器面に細かい調整が認められるものを、調整工程として分類した。

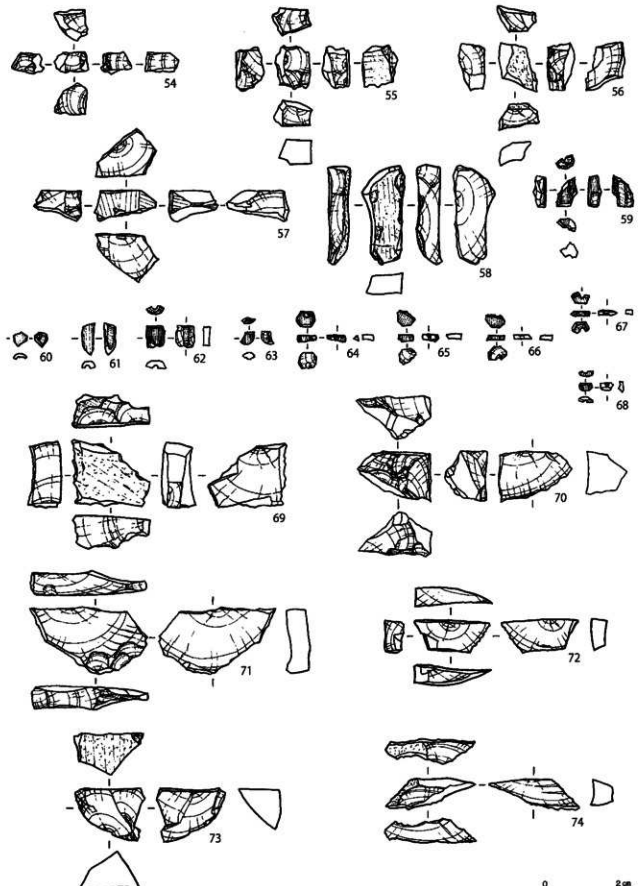
57～68は、研磨・穿孔工程の管玉未製品である。57・58は、角柱体のまま器面を荒く研磨する工程の未製品である。57は大型の未製品と考えられる。59・62～68は、多角柱状に研磨した後、穿孔を加える工程の未製品である。64・65は穿孔の位置が中心から大きくずれているものである。64～68は薄く破損したもので、上面には研磨面が残存するため、端部に位置していたと考えられる。穿孔位置を修正するために、端部を割り取った可能性も



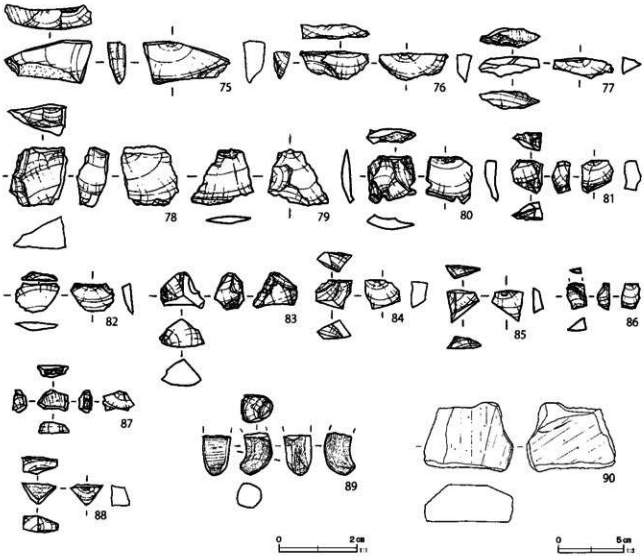
第296図　第268号住居跡出土遺物（2）



第297図　第268号住居跡出土遺物（3）



第298図　第268号住居跡出土遺物（4）



第299図　第268号住居跡出土遺物（5）

考えられる。60・61の器面は丸みを帯び完成品に近いもので、仕上げの研磨工程において破損したものと考えられる。60の穿孔部分には段差が認められ、両面穿孔の接点部分の破片と考えられる。

69～88は管玉の製作時に発生した、緑色凝灰岩を石材とする剥片である。大量の剥片や砕片が住居跡内から検出されたが、そのほとんどは図示が困難な微細なものであった。69～75は比較的大形の剥片で、荒割工程で発生したものと考えられる。住居跡内からは、荒割工程途中までの、原石や未製品は検出されていないが、剥片からすると、荒割工程が行われていた可能性が高いと考えられる。

89は水晶を石材とする勾玉の未製品である。下半分、腹から尾にかけての部分で、上半分は破損している。尾部の稜線の角が立っており、仕上げの研磨段階の未製品と考えられる。住居跡内からは、水晶の剥片・砕片が少量出土しているが、勾玉の未製品は他には出土していない。

90は砥石である。破片のため、全体の形状は不明である。玉作に関連する道具であった可能性は高いが、住居跡内から他に関連する道具類は検出されなかった。

第124表　第268号住居跡出土遺物観察表（第293・296～299図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(20.4)	4.2	—	EHIK	20	普通	にぶい褐	赤彩　縄目	
2	土師器	壺	—	2.9	(6.0)	EHI	45	普通	にぶい黄橙	木葉痕	
3	土師器	壺	—	2.6	5.4	ACEIK	70	普通	浅黄橙	木葉痕	
4	土師器	甕	(11.0)	7.9	—	AEHIK	10	普通	明黄褐		
5	土師器	甕	(15.4)	5.7	—	EGHIK	10	普通	にぶい黄橙	砂利　内外面荒れている	
6	土師器	甕	(19.2)	6.4	—	AEHI	10	普通	灰褐	口縁キザミ　金雲母	
7	土師器	甕	(14.2)	5.5	—	EHI	10	普通	黒褐		
8	土師器	甕	(14.0)	4.7	—	ACEHK	10	普通	灰褐	口縁キザミ	
9	土師器	台付甕	—	6.4	(10.6)	ADEHI	25	普通	浅黄橙		
10	土師器	台付甕	—	4.4	(11.6)	EHIK	20	普通	にぶい黄橙		
11	土師器	甕	—	2.2	5.8	CEGHIK	90	普通	橙	砂利　褐系	
12	土師器	小型壺	—	9.1	6.0	AEHJ	70	普通	浅黄橙	No.51	
13	土師器	小型壺	(13.0)	5.1	—	EGHIJ	5	普通	灰褐		
14	土師器	鉢	—	1.9	(3.8)	ABCEHIJ	25	普通	にぶい橙		
15	土師器	鉢	(4.8)	4.6	(4.0)	ACEHIJK	25	普通	灰褐		
16	土師器	高坏	(12.4)	3.2	—	AEGIJ	20	普通	にぶい褐	赤彩	
17	土師器	高坏	—	8.1	13.4	CEHI	90	普通	橙		
18	土師器	高坏	—	2.8	(11.2)	EHIK	30	普通	橙		
19	土師器	甕	—	3.1	—	CEHIK	5	良好	橙		
20	弥生	壺	—	5.1	—	EHIK	5	良好	にぶい黄橙	透明石英　赤彩	
21	弥生	壺	—	2.5	—	EHIK	5	良好	にぶい橙	赤彩	
22	弥生	壺	—	2.8	—	EHIK	5	普通	にぶい橙		
23	弥生	壺	—	3.5	—	CI	5	普通	褐灰	赤彩	
24	石製品	管玉未製品	長さ2.1	幅2.0	厚さ0.9	重さ3.3	石材	緑色凝灰岩		No.260　調整	150-1
25	石製品	管玉未製品	長さ2.6	幅1.2	厚さ1.1	重さ2.5	石材	緑色凝灰岩		No.312　形割	150-1
26	石製品	管玉未製品	長さ2.7	幅1.2	厚さ0.8	重さ2.1	石材	緑色凝灰岩		No.139　形割	150-1
27	石製品	管玉未製品	長さ2.6	幅1.2	厚さ0.8	重さ2.1	石材	緑色凝灰岩		No.294　形割	150-1
28	石製品	管玉未製品	長さ2.1	幅0.6	厚さ0.9	重さ1.2	石材	緑色凝灰岩		No.348　形割	150-1
29	石製品	管玉未製品	長さ2.4	幅1.2	厚さ0.8	重さ1.7	石材	緑色凝灰岩		No.182　形割	
30	石製品	管玉未製品	長さ1.3	幅1.2	厚さ0.8	重さ1.3	石材	緑色凝灰岩		No.127　形割	150-1
31	石製品	管玉未製品	長さ1.6	幅1.0	厚さ0.8	重さ1.2	石材	緑色凝灰岩		No.295　形割	150-1
32	石製品	管玉未製品	長さ1.6	幅1.0	厚さ0.4	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		No.177　形割	
33	石製品	管玉未製品	長さ1.3	幅0.9	厚さ0.7	重さ0.8	石材	緑色凝灰岩		No.164　形割	
34	石製品	管玉未製品	長さ1.3	幅0.9	厚さ0.7	重さ0.8	石材	緑色凝灰岩		No.176　形割	
35	石製品	管玉未製品	長さ1.0	幅0.9	厚さ0.6	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		調整	150-1
36	石製品	管玉未製品	長さ1.1	幅0.6	厚さ0.5	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		No.356　調整	
37	石製品	管玉未製品	長さ0.9	幅0.7	厚さ0.5	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		形割	150-1
38	石製品	管玉未製品	長さ0.8	幅0.8	厚さ0.5	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		No.315　形割	
39	石製品	管玉未製品	長さ1.0	幅1.1	厚さ0.5	重さ0.5	石材	緑色凝灰岩		形割	
40	石製品	管玉未製品	長さ0.7	幅0.9	厚さ0.6	重さ0.4	石材	緑色凝灰岩		調整	
41	石製品	管玉未製品	長さ0.5	幅0.5	厚さ0.5	重さ0.1	石材	緑色凝灰岩		No.41　形割	
42	石製品	管玉未製品	長さ0.7	幅0.8	厚さ0.5	重さ0.2	石材	緑色凝灰岩		No.57　形割	
43	石製品	管玉未製品	長さ1.9	幅1.3	厚さ1.2	重さ2.5	石材	緑色凝灰岩		No.169　形割	
44	石製品	管玉未製品	長さ1.8	幅1.0	厚さ0.7	重さ1.1	石材	緑色凝灰岩		No.140　調整	150-1
45	石製品	管玉未製品	長さ1.7	幅1.1	厚さ0.7	重さ1.5	石材	緑色凝灰岩		No.165　形割	
46	石製品	管玉未製品	長さ2.0	幅1.0	厚さ0.7	重さ1.6	石材	緑色凝灰岩		No.167　形割	150-1
47	石製品	管玉未製品	長さ1.7	幅0.6	厚さ0.6	重さ0.8	石材	緑色凝灰岩		調整	150-1
48	石製品	管玉未製品	長さ1.8	幅0.6	厚さ0.6	重さ0.9	石材	緑色凝灰岩		No.357　調整	150-1
49	石製品	管玉未製品	長さ1.7	幅0.7	厚さ0.7	重さ0.9	石材	緑色凝灰岩		No.166　調整	150-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
50	石製品	管玉未製品	長さ1.3	幅0.8	厚さ0.7	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		№175 調整	150-1
51	石製品	管玉未製品	長さ1.3	幅0.9	厚さ0.9	重さ1.2	石材	緑色凝灰岩		№179 形制	
52	石製品	管玉未製品	長さ1.1	幅0.7	厚さ0.7	重さ0.5	石材	緑色凝灰岩		調整	
53	石製品	管玉未製品	長さ0.9	幅0.8	厚さ0.8	重さ0.6	石材	緑色凝灰岩		№106 調整	
54	石製品	管玉未製品	長さ0.6	幅0.9	厚さ0.8	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		№170 形制	
55	石製品	管玉未製品	長さ1.1	幅1.0	厚さ0.7	重さ0.8	石材	緑色凝灰岩		№171 調整	
56	石製品	管玉未製品	長さ1.3	幅1.0	厚さ0.7	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		№12 形制	
57	石製品	管玉未製品	長さ0.8	幅1.6	厚さ1.2	重さ1.2	石材	緑色凝灰岩		№143 研磨	
58	石製品	管玉未製品	長さ2.5	幅1.1	厚さ0.7	重さ1.8	石材	緑色凝灰岩		№32 研磨	150-1
59	石製品	管玉未製品	長さ0.8	幅0.6	厚さ0.4	重さ0.1	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	150-1
60	石製品	管玉未製品	長さ0.4	幅0.3	厚さ0.2	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	
61	石製品	管玉未製品	長さ0.8	幅0.3	厚さ0.2	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	150-1
62	石製品	管玉未製品	長さ0.6	幅0.5	厚さ0.2	重さ0.1	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	
63	石製品	管玉未製品	長さ0.3	幅0.4	厚さ0.2	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	
64	石製品	管玉未製品	長さ0.2	幅0.5	厚さ0.2	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	150-1
65	石製品	管玉未製品	長さ0.2	幅0.4	厚さ0.4	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	
66	石製品	管玉未製品	長さ0.1	幅0.5	厚さ0.3	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	
67	石製品	管玉未製品	長さ0.1	幅0.5	厚さ0.3	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	
68	石製品	管玉未製品	長さ0.2	幅0.3	厚さ0.1	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		研磨・穿孔	
69	石製品	剥片	長さ1.7	幅2.0	厚さ0.8	重さ2.7	石材	緑色凝灰岩		№163	
70	石製品	剥片	長さ1.3	幅1.9	厚さ1.1	重さ1.9	石材	緑色凝灰岩		№217	
71	石製品	剥片	長さ1.7	幅3.0	厚さ0.6	重さ2.7	石材	緑色凝灰岩		№222	150-1
72	石製品	剥片	長さ0.9	幅2.0	厚さ0.5	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		№162	150-1
73	石製品	剥片	長さ1.4	幅1.8	厚さ1.1	重さ1.8	石材	緑色凝灰岩		№150	
74	石製品	剥片	長さ0.7	幅2.2	厚さ0.7	重さ0.8	石材	緑色凝灰岩		№178	
75	石製品	剥片	長さ1.1	幅2.2	厚さ0.6	重さ1.2	石材	緑色凝灰岩		№8	150-1
76	石製品	剥片	長さ0.7	幅1.7	厚さ0.4	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		№234	
77	石製品	剥片	長さ0.5	幅1.6	厚さ0.5	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		№11	
78	石製品	剥片	長さ1.5	幅1.5	厚さ0.8	重さ1.5	石材	緑色凝灰岩		№185-①	
79	石製品	剥片	長さ1.4	幅1.6	厚さ0.3	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		№34	150-1
80	石製品	剥片	長さ1.2	幅1.2	厚さ0.4	重さ0.4	石材	緑色凝灰岩		№181	
81	石製品	剥片	長さ0.8	幅0.8	厚さ0.5	重さ0.2	石材	緑色凝灰岩		№286	
82	石製品	剥片	長さ0.7	幅1.2	厚さ0.3	重さ0.2	石材	緑色凝灰岩		№39	
83	石製品	剥片	長さ0.9	幅1.1	厚さ0.7	重さ0.5	石材	緑色凝灰岩		№154	
84	石製品	剥片	長さ0.7	幅0.9	厚さ0.5	重さ0.2	石材	緑色凝灰岩		№265	
85	石製品	剥片	長さ0.8	幅0.8	厚さ0.3	重さ0.1	石材	緑色凝灰岩		№15	
86	石製品	剥片	長さ0.7	幅0.6	厚さ0.3	重さ0.0	石材	緑色凝灰岩		№184	
87	石製品	剥片	長さ0.6	幅0.8	厚さ0.4	重さ0.1	石材	緑色凝灰岩		№60	
88	石製品	剥片	長さ0.5	幅0.9	厚さ0.5	重さ0.2	石材	緑色凝灰岩		№244	
89	石製品	勾玉未製品	長さ1.1	幅0.8	厚さ0.7	重さ0.7	石材	水晶			150-1
90	石製品	砥石	長さ5.3	幅6.9	厚さ3.3	重さ155.5	石材	砂岩			150-5

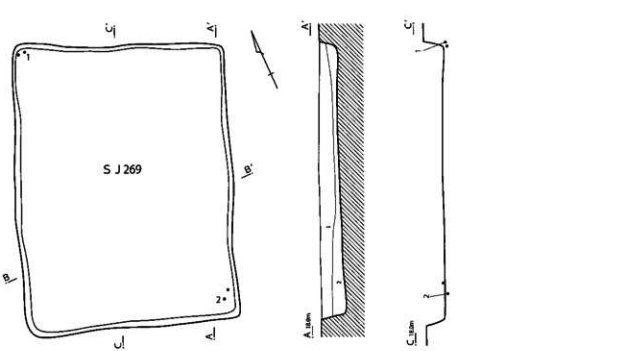
第269号住居跡（第300・301図）

調査区の中央西寄り、P・Q－58グリッドに位置する。

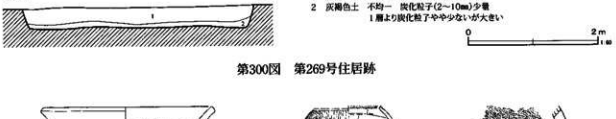
平面形は長方形である。主軸方向はN－21°－Eを指す。規模は長軸4.32m、短軸3.36m、深さ33.0cmを測る。第48号溝跡と並行するやや小型の住居跡である。

遺物の出土状況は、北西コーナー部分から壺、南東コーナー部分から坩を検出した。

遺物は1～3を図示した。1は複合口縁壺である。2は坩、3は壺の胴上半部である。細かいRL単節縄文を施文し、下端を2本1単位の束線具により区画している。区画沈線下は無文帯である。内面にハケ調整が残る。



第300図 第269号住居跡



第301図 第269号住居跡出土遺物

第125表 第269号住居跡出土遺物観察表（第301図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	17.2	12.1	－	ACEGHIKM	45	普通	にぶい黄橙	風化 No.1	85-8
2	土師器	坩	－	5.8	3.4	AEHIJK	25	普通	にぶい黄橙	No.4	
3	土師器	壺	－	6.2	－	ACEHIK	5	普通	にぶい黄橙	風化顕著	

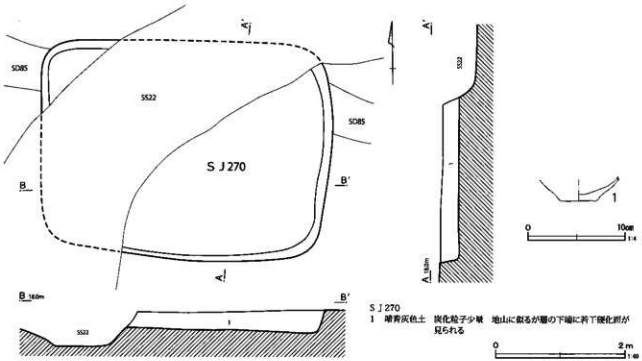
第270号住居跡（第302図）

調査区の北側西寄り、O－59・60グリッドに位置する。第85号溝跡、第22号墳と重複する。北2mに第84号溝跡が東西に走る。西2mに第242号住居跡、東2mに第246号住居跡がある。

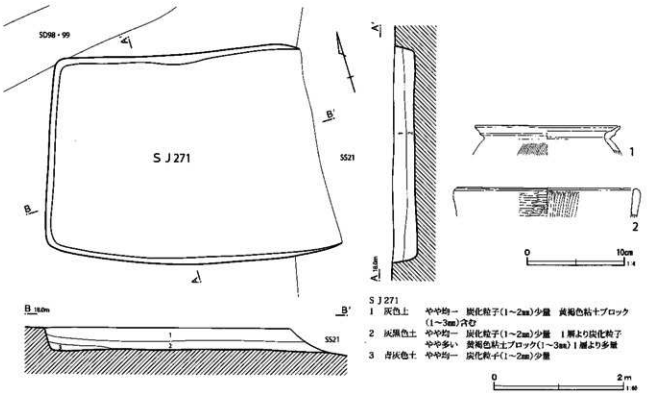
確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。覆土は地山に近似するが、第1層の下面に若干の硬化面を確認した。平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸4.45m、短軸3.39m、深さ28.8cmを測る。

施設は検出できなかった。

遺物は少量検出された。



第302図 第270号住居跡・出土遺物



第303図 第271号住居跡・出土遺物

第271号住居跡（第303図）

調査区の中央西寄り、Q・R－58グリッドに位置する。第98・99号溝跡、第21号墳と重複する。

平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－72°－Wを指す。規模は長軸4.14m、短軸3.27m、深さ36.0cmを測る。床面は平坦である。主軸は第98・99号溝跡に並行する。

施設は検出できなかった。

遺物は、少量検出した。1のS字状口縁甕と2の直口壺を図示した。1のS字状口縁は短く外方に向け立ち上がる。2は器壁が厚く、口縁部内外面にミガキが施されている。内面は縦方向のミガキ、外面は横方向のミガキである。

第272号住居跡（第304・305図）

調査区の北側東寄り、J・K－61・62グリッドに位置する。第268・273号住居跡と重複する。西側2mに第308号住居跡、南側2mに第302号住居跡がある。

平面形は長方形である。主軸方向はN－10°－Eを指す。規模は長軸8.34m、短軸6.57m、深さ54.0cmを測る。本住居跡は集落内でも掘り込みの深い、大型の住居跡である。

施設は検出できなかった。

遺物の出土状況は、住居跡北東コーナー部分に甕類を集中して検出した。また、北側中央には大型の甕を検出した。

第126表　第270号住居跡出土遺物観察表（第302図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	2.5	(3.6)	EGJ	30	普通	灰黄褐		

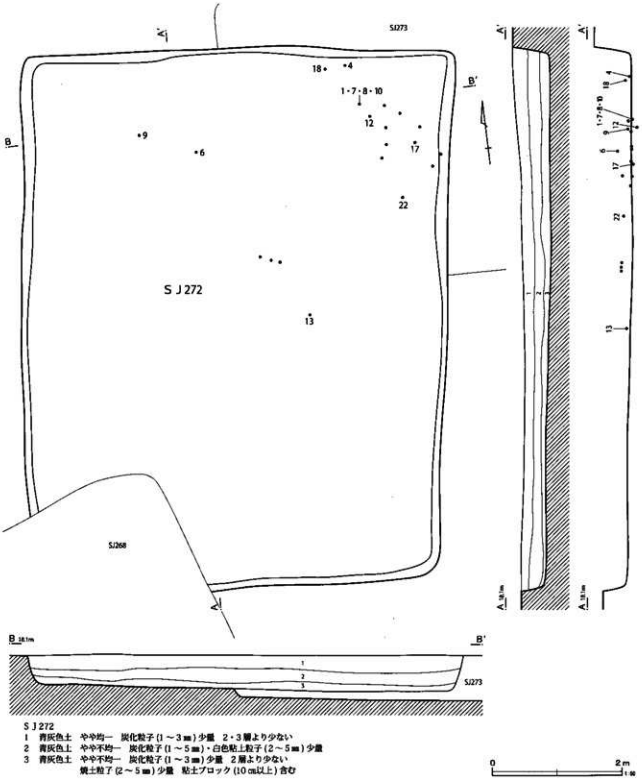
第127表　第271号住居跡出土遺物観察表（第303図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(15.0)	3.0	－	ACHI	5	普通	にぶい橙	S字甕	
2	土師器	壺	(18.5)	2.9	－	AEHIJK	5	良好	明赤褐		

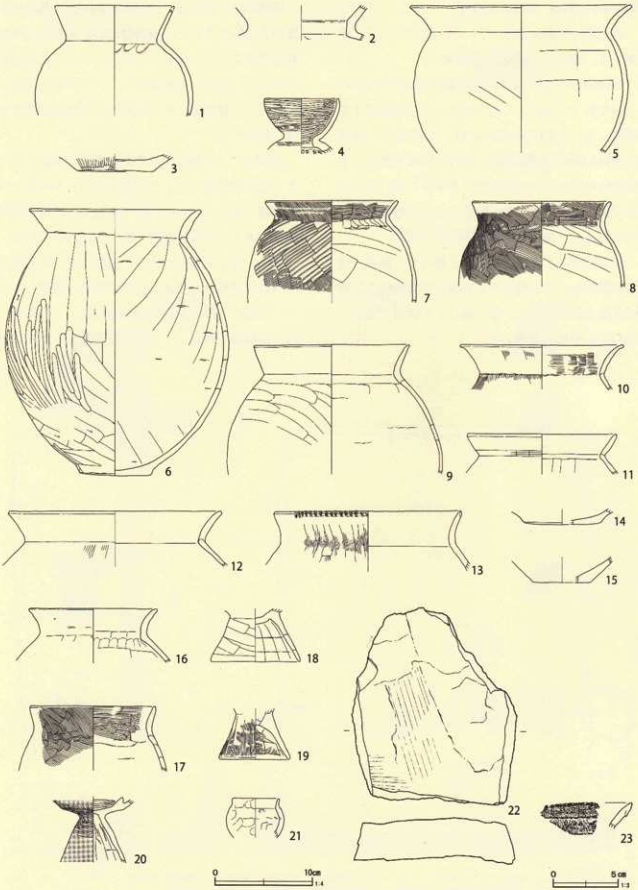
第128表　第272号住居跡出土遺物観察表（第305図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(12.0)	11.0	－	EHIK	40	普通	橙	No.5	
2	土師器	壺	－	3.5	－	CEHIL	15	普通	にぶい橙		
3	土師器	壺	－	1.8	8.0	EIKL	70	普通	にぶい橙		
4	土師器	小型壺	7.6	5.6	－	EHIK	95	普通	にぶい黄橙	ヒサゴ壺　No.4	
5	土師器	甕	(22.5)	15.1	－	CEHIJK	15	普通	赤褐	K62G	
6	土師器	甕	17.3	27.3	7.3	ADE	50	普通	にぶい橙	No.2	113-3
7	土師器	甕	(13.4)	10.4	－	EIKM	50	普通	にぶい黄褐	叩き甕　No.5	106-1・4
8	土師器	甕	(14.0)	8.7	－	EHIK	30	普通	にぶい橙	No.5	
9	土師器	甕	15.8	13.3	－	AEIK	40	普通	橙		
10	土師器	甕	(8.5)	4.5	－	EHI	45	普通	にぶい橙	No.5	
11	土師器	甕	(15.4)	4.1	－	BDE	10	普通	にぶい黄橙		
12	土師器	甕	(21.7)	5.7	－	AEH	10	普通	灰褐	No.6	
13	土師器	甕	(19.0)	6.2	－	CEIK	20	普通	にぶい黄褐	口唇キザミ　No.20　SJ268	
14	土師器	甕	－	1.6	(8.0)	AEH	15	普通	にぶい橙		
15	土師器	甕	－	2.6	(6.0)	AEHI	15	普通	灰褐		
16	土師器	小型甕	(13.0)	5.5	－	CEH	20	普通	灰褐	外面煤付着	
17	土師器	小型甕	(12.8)	6.6	－	BEH	10	普通	にぶい橙	No.13	
18	土師器	台付甕	－	5.4	9.2	AEIJK	100	普通	にぶい橙		
19	土師器	台付甕	－	5.2	(7.4)	ABEK	70	普通	にぶい黄橙	器面磨滅	
20	土師器	装飾器台	－	6.7	－	AEHIK	75	普通	にぶい橙	赤彩　器面磨滅	
21	土師器	手づくね	(4.7)	4.0	－	CEH	20	普通	にぶい黄橙		
22	石製品	砥石	長さ15.0	幅12.6	厚さ3.5	重さ856.2	石材	頁岩		No.16	
23	土師器	壺	－	2.0	－	ABHI	5	普通	橙		

遺物は、1～23を図示した。1～3は壺である。5～17は甕である。5は「く」の字状口縁甕、6は胴部が大きく張る甕、7は叩き甕である。13は口唇部にキザミのある甕、16・17は小型甕である。18・19は台付甕、20は装飾器台、21は手づくねである。22は砥石である。



第304図　第272号住居跡



第305図　第272号住居跡出土遺物

第273号住居跡（第306～308図）

調査区の北側東寄り、J・K－62グリッドに位置する。第272号住居跡と重複する。

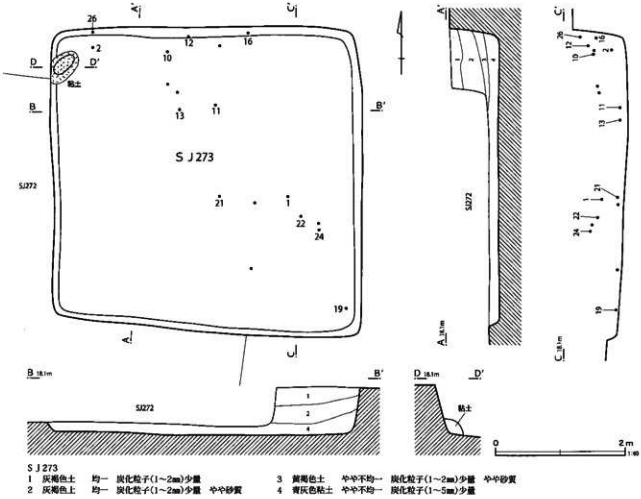
平面形は方形である。南西側を第272号住居跡に切られているが、その下面から本住居跡覆土を確認した。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は長軸4.74m、短軸4.68m、深さ72.0cmを測る。本住居跡の掘り込みは集落内でも非常に深い掘り込みである。北西コーナー壁際に粘土の堆積層が認められた。

断面観察によると、第1・2層はやや砂質で地山と類似し、第3層もやや砂質だが黄褐色土と青褐色粘土が混在する。第4層はやや砂質で地山に類似するが掘り方埋土か。

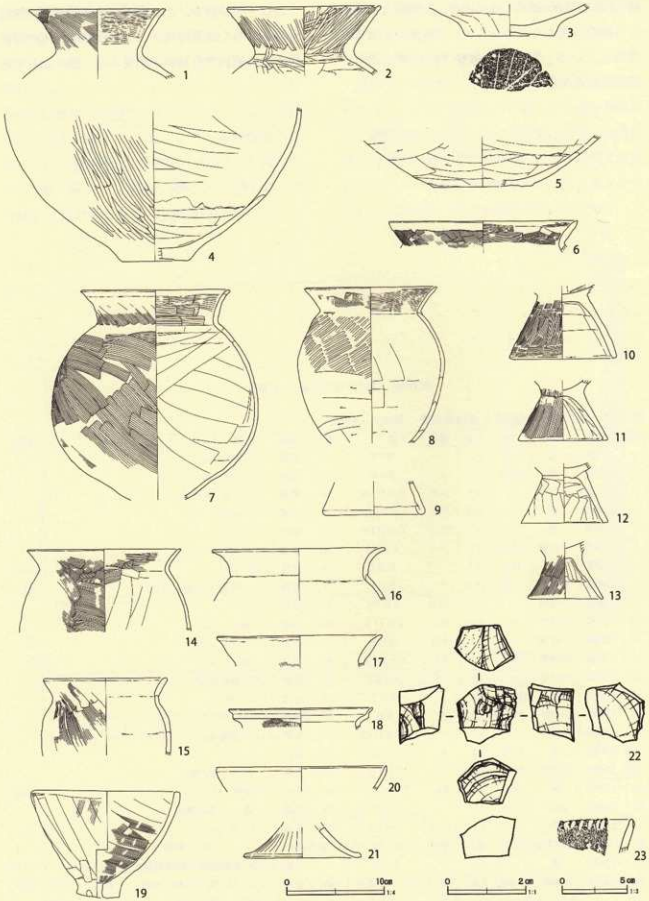
遺物の出土状況は、北壁中央部分から台付甕が集中して検出された。調理具の置き場空間の可能性が考えられる。また、北西コーナーの粘土溜まり部分から壺の口縁を検出した、この他、南東コーナーから鉢型甑、やや北側から石製紡錘車を単体で検出した。

遺物は、1～26を図示した。1～5は壺、6・9～13は台付甕で、8は胴部上半にタタキをもつ叩き甕である。14～17は甕である。18はS字状口縁甕である。19は鉢型甑、20・21は高坏である。

22は、管玉未製品である。調整工程の未製品で、石材は緑色凝灰岩である。下方部分は破損しており、上部の一部のみが残存している。上面部分には、節理面が残存している。左側面と、表面には、



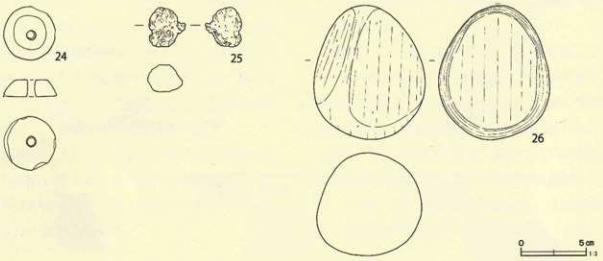
第306図　第273号住居跡



第307図　第273号住居跡出土遺物（1）

部分的に調整が加えられている。右側面と、裏面には調整は加えられておらず、剥離面がそのまま残存している。形割後、調整工程の早い段階で、破損したものと考えられる。

24は土製紡錘車、25は表面に小さな気泡状の穴が見られるため発泡塊としたが、高師小僧の可能性もあり遺物の性格は不明である。26は砥石である。



第308図　第273号住居跡出土遺物（2）

第129表　第273号住居跡出土遺物観察表（第307・308図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	13.8	7.2	—	HIK	75	普通	灰黄褐	№13	
2	土師器	壺	(15.8)	7.1	—	CIK	25	普通	にぶい橙	№2	
3	土師器	壺	—	3.2	(9.0)	AEHIK	50	普通	にぶい褐	木葉痕	
4	土師器	壺	—	15.4	(7.2)	CEIL	20	普通	にぶい黄褐		
5	土師器	壺	—	5.1	(10.0)	CEHIK	25	普通	橙		
6	土師器	台付甕	(19.4)	3.2	—	AEHI	20	普通	にぶい橙		
7	土師器	甕	15.0	21.5	—	EHI	70	普通	にぶい黄橙		113-4
8	土師器	台付甕	13.3	15.9	—	EHI	40	普通	にぶい黄橙	叩き甕　SJ272	106-2・5
9	土師器	台付甕	—	3.4	(10.0)	BDHI	25	普通	にぶい橙		
10	土師器	台付甕	—	7.6	11.1	EHIJK	95	普通	橙	№4	
11	土師器	台付甕	—	6.1	(9.2)	AHI	70	普通	にぶい橙	№9	
12	土師器	台付甕	—	6.1	9.0	BEHIK	85	普通	橙	№3	
13	土師器	台付甕	—	5.8	7.8	AEHI	95	普通	にぶい黄橙	№10	
14	土師器	甕	(15.8)	8.4	—	EHI	20	普通	にぶい橙		
15	土師器	小型甕	(6.3)	7.9	—	AH	45	普通	灰白		
16	土師器	甕	(17.7)	5.3	—	ACEHIK	10	普通	にぶい黄橙	№8	
17	土師器	甕	(17.0)	3.3	—	ACEHK	10	普通	にぶい橙		
18	土師器	台付甕	(14.8)	2.2	—	EHIK	10	普通	橙	S字甕	
19	土師器	甑	14.7	11.0	4.4	BEHIK	90	普通	浅黄橙	№17	141-2
20	土師器	高坏	(17.6)	2.5	—	AHI	15	普通	橙	器面磨滅	
21	土師器	高坏	—	3.1	(12.2)	EHIK	25	普通	にぶい橙	№11	
22	石製品	管玉未製品	長さ1.5	幅1.6	厚さ1.2	重さ2.6　石材　緑色凝灰岩				№14　調整	
23	土師器	甕	—	2.5	—	ACK	5	普通	にぶい黄橙	赤彩　口唇外面キザミ	
24	土製品	紡錘車	径4.1×4.0	孔径0.7	厚さ1.3	G	90	普通	にぶい橙	重さ26.80　№16	148-1
25	—	発泡土塊	長さ3.0	幅2.8	厚さ2.0				褐灰	重さ3.30	
26	石製品	砥石	長さ10.3	幅8.6	厚さ8.0	重さ1082.1　石材　砂岩				№1	153-1

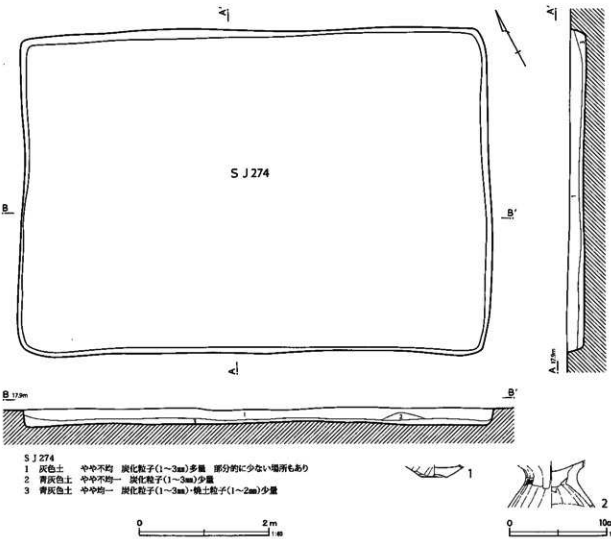
第274号住居跡（第309図）

調査区の中央西寄り、R－57・58グリッドに位置する。東側２ｍに第21号墳、南側2.5ｍに第19号墳がある。

確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。東西方向の壁は確認できたが、南北方向の壁はやや不明瞭である。住居跡と判断したが確信はない。平面形は長方形である。主軸方向はN－62°－Wを指す。規模は長軸7.20ｍ、短軸4.98ｍ、深さ27.0㎝を測る。

施設は検出できなかった。

遺物は、少量検出した。１は小型の壺底部とみられる。上げ底で器壁もやや薄い。外面の器面はナデ調整されている。２は台付甕の台部であるが、甕部と台部の接合方法が明瞭にわかる遺物である。台部は中央が貫通した状態で作成され、あとから中心に三角錘状の粘土を詰めて塞いでいる。



第309図　第274号住居跡・出土遺物

第130表　第274号住居跡出土遺物観察表（第309図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	1.2	2.5	ABEHIJK	55	普通	橙		
2	土師器	台付甕	－	4.7	－	AEHIJ	25	良好	灰褐		

第276号住居跡（第310・311図）

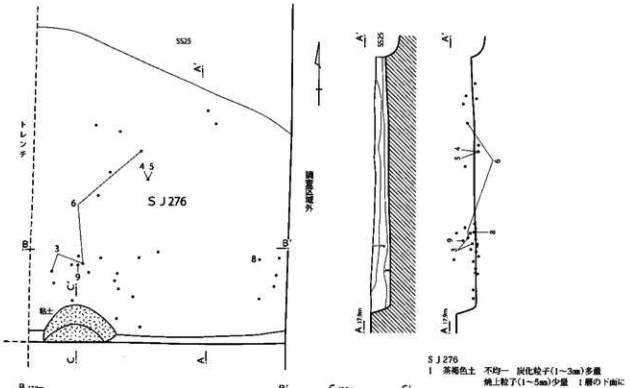
調査区の北側東寄り、M・N－62グリッドに位置する。第25号墳と重複する。

平面形は東側に調査区域外、西側をトレンチがかかるため判然としない。南側壁沿いに粘土溜まりの山がある。この粘土がどのような用途であるかは不明である。入口施設の粘土なのか、何かの作業に使うために貯蔵していた粘土なのかは明らかにできなかった。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸4.45m、短軸3.84m、深さ29.4cmを測る。断面観察によると覆土中に砂が部分的に見られる。第2層は砂粒を全体に含んでいる。一方、第3層は2～10mm程度の青白色粘土粒が多く含まれている。また、第3層の床直上には炭化物層が見られた。床面は平坦である。

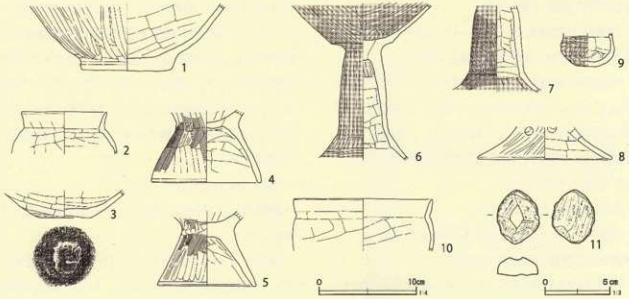
施設は検出できなかった。

遺物の出土状況は、住居跡全体から検出された。粘土溜まり周辺からは、高坏・坩・壺を検出した。北側では台付甕、東側で高坏を検出した。

遺物は、1～3が壺である。1は大型の壺底部で、器壁の厚い平底の底部から胴部が外傾に立ち上がる。胴部外面は縦方向のミガキが施され、内面はヘラナデを施す。2は小型壺で直口する口縁部である。3は器壁のやや厚い壺で、底部は上げ底気味の輪台状である。4・5は台付甕台部である。4はわずかに脚端部が内湾、5は直線的である。6～8は高坏である。6は有稜高坏で脚の長い柱状脚である。内外面に丁寧なミガキが施され赤彩されている。7は6と同様の長脚で、内外面に赤彩が施されている。9は坩、10は鉢、11は砥石である。



第310図　第276号住居跡



第311図　第276号住居跡出土遺物

第131表　第276号住居跡出土遺物観察表（第311図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	6.8	9.5	AEHIKM	45	普通	にぶい黄橙		
2	土師器	小型壺	(8.8)	4.3	－	AEHIJK	20	普通	橙		
3	土師器	壺	－	2.8	5.4	AEHIJK	70	普通	明赤褐	輪台状　№17・21	
4	土師器	台付甕	－	7.4	(11.2)	AEHIJK	80	普通	にぶい赤褐	№6	
5	土師器	台付甕	－	7.6	10.1	AEHIJK	70	普通	にぶい黄橙	№6	
6	土師器	高坏	－	16.0	－	ACEHIJK	75	良好	にぶい橙	赤彩　高坏の先脚形態	
7	土師器	高坏	－	8.8	－	EHIJK	60	良好	にぶい黄橙	赤彩	
8	土師器	高坏	－	3.3	14.0	AEHIK	20	普通	橙	三孔　№28	
9	土師器	坩	－	3.4	－	AEHI	100	普通	にぶい黄橙	赤彩　№18	138-3
10	土師器	鉢	(14.2)	5.3	－	AEGHIJK	10	普通	にぶい黄橙		
11	石製品	砥石	長さ4.2	幅3.2	厚さ1.7	重さ3.4　石材　軽石					

第277号住居跡（第312図）

調査区の北側東寄り、L－61・62グリッドに位置する。第279・285号住居跡と重複する。

平面形は東側をトレンチに切られているため判然としない。主軸方向はN－16°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸4.14m、短軸1.29m、深さ39.0cmを測る。床直上には炭化物層が見られた。床面は平坦である。

施設は検出できなかった。

遺物は、ほとんど検出されなかった。

第278号住居跡（第313・314図）

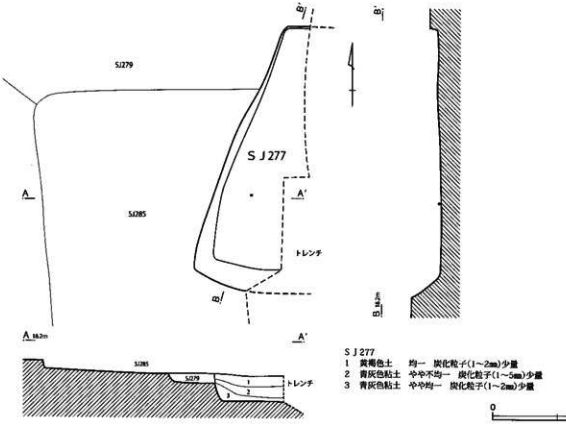
調査区の北側東寄り、L・M－62グリッドに位置する。北1m内に第295・307号住居跡、南1mに第25号墳がある。西側はトレンチにより壊されている。

確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。平面形は方形と思われる。主軸方向はN－25°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸4.13m、短軸2.52m、深さ35.0cmを測る。床直上には炭化物層が見られた。床面は北側に向かってやや傾斜している。断面観察によると、第1層は地山がやや黒ずんだ色調の土層である。第2・3層は地山に類似する。

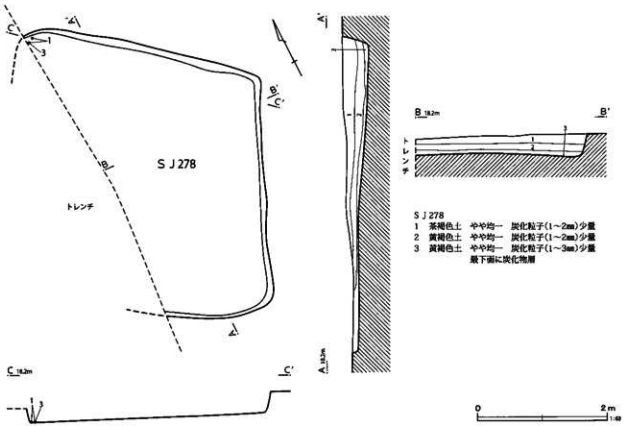
施設は検出できなかった。

遺物の出土状況は、北コーナー部分から高坏を検出した。

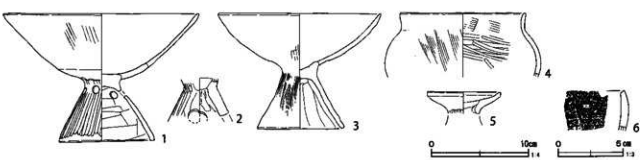
遺物は1～6を図示した。1～3は高坏である。ともに短脚の椀形高坏である。1の坏部は内湾坏で脚部は二個一対の透かし孔をもつ内湾脚である。3の坏部は椀形坏で、透かしを伴わない「ハ」の字状に直線に開く脚部である。4は鉢、5は器台である。



第312図　第277号住居跡



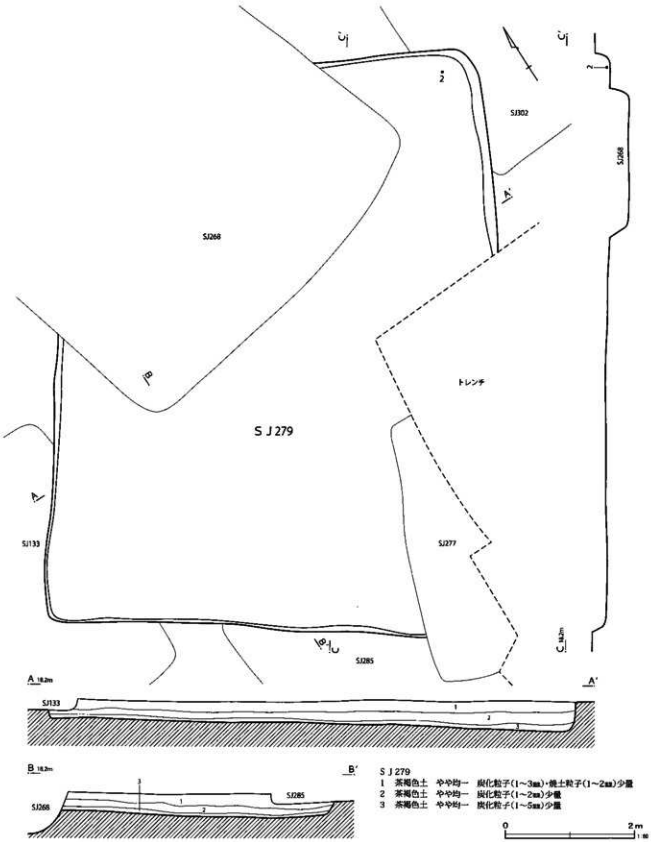
第313図　第278号住居跡



第314図　第278号住居跡出土遺物

第132表　第278号住居跡出土遺物観察表（第314図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	20.0	13.0	9.8	CEGHI	90	普通	にぶい橙	二孔1対　器面磨滅	130-4
2	土師器	高坏	—	4.4	—	EHI	90	普通	にぶい橙	四孔	
3	土師器	高坏	(16.6)	11.8	8.9	CIJK	60	普通	明赤褐	器面磨滅　No.1	130-5
4	土師器	鉢	(12.9)	6.5	—	EHIK	15	良好	にぶい橙		
5	土師器	器台	(7.4)	2.2	—	BEHI	45	普通	にぶい橙	器面磨滅	
6	土師器	壺	—	2.1	—	CEI	5	普通	橙	綾杉状の縄文	



第315図 第279号住居跡

第279号住居跡（第315・316図）

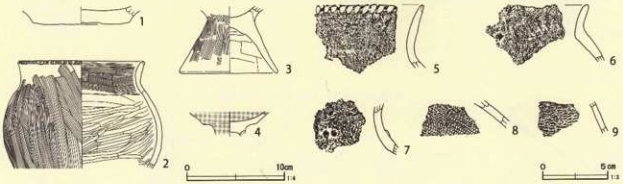
調査区の北側東寄り、K・L－61・62グリッドに位置する。第133・268・277・285・302号住居跡と重複する。北側２ｍに第272号住居跡、南西側１ｍに第253号住居跡、東側１ｍに第295・307号住居跡がある。

平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－35°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸8.81ｍ、短軸5.28ｍ、深さ39.0㎝を測る。断面観察によると、第２層にはやや明るい地山ブロックが含まれていた。第３層には地山の青灰色粘土ブロックが含まれていた。また、第３層下面の床直上には炭化物層が見られた。床面は平坦である。

施設は検出できなかった。

遺物の出土状況は、北東コーナー部分から甕を検出した。

遺物は、１が壺の底部である。器壁がやや厚く平底の底部である。２は小型甕で、口唇部にキザミを巡らす。胴部外面には縦方向に長いハケメが見られる。内面は口縁部に横方向のハケメを施し、胴部は横方向の磨きが施されている。３は台付甕の台部である。外反気味の台部で端部に向け器壁を薄くする。外面は縦方向のハケメを施している。４は高坏の破片である。５は直線的に立ち上がる甕の口縁部である。口端部にキザミを施し頸部にハケ調整が残る。６は屈曲外反する甕の口縁部である。口縁部以下無文である。口縁部と頸部の境界に円形浮文を１箇所貼付している。７は壺の頸部である。細かいＬＲ単節縄文を施文し、縄文施文部に２個１対の円形浮文を貼付している。８は球胴形を呈する壺の胴上半部である。ＲＬ単節縄文を施文している。９は壺の胴上半部である。網目状撚糸文を施文する。



第316図　第279号住居跡出土遺物

第133表　第279号住居跡出土遺物観察表（第316図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	－	1.8	10.0	AEGI	65	普通	灰		
2	土師器	小型甕	12.7	11.0	－	EGHI	85	普通	にぶい赤褐	No.1　口唇キザミ	117-5
3	土師器	台付甕	－	6.8	9.9	EGIJK	90	普通	橙		
4	土師器	高坏	－	2.6	－	EHIK	60	良好	にぶい橙	赤彩	
5	土師器	甕	－	4.8	－	AEHIK	5	普通	にぶい橙	口端キザミ	
6	土師器	甕	－	4.3	－	EHIK	5	普通	にぶい褐		
7	土師器	壺	－	3.9	－	EHIK	5	普通	橙		
8	弥生	壺	－	2.2	－	CDEHIK	5	普通	にぶい赤褐		
9	弥生	壺	－	2.5	－	EHIK	5	普通	にぶい橙		

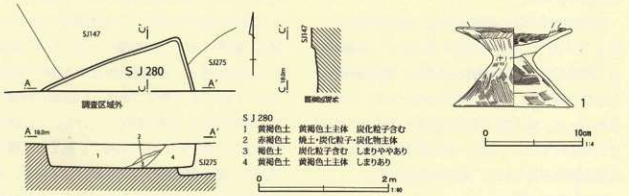
第280号住居跡（第317図）

調査区の南側中央寄り、Y－56・57グリッドに位置する。第147・275号住居跡と重複する。南側は調査区域外にかかる。

平面形は調査区域外にかかっているため判然としない。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は残存する部分で、長径1.77m、短径0.69m、深さ36.0cmを測る。

施設は検出できなかった。

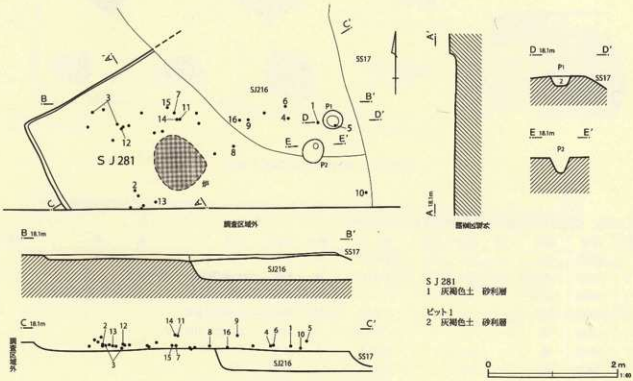
遺物は、装飾器台を検出した。



第317図　第280号住居跡・出土遺物

第134表　第280号住居跡出土遺物観察表（第317図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	装飾器台	－	8.1	12.4	BEHIJKM	75	普通	赤褐		

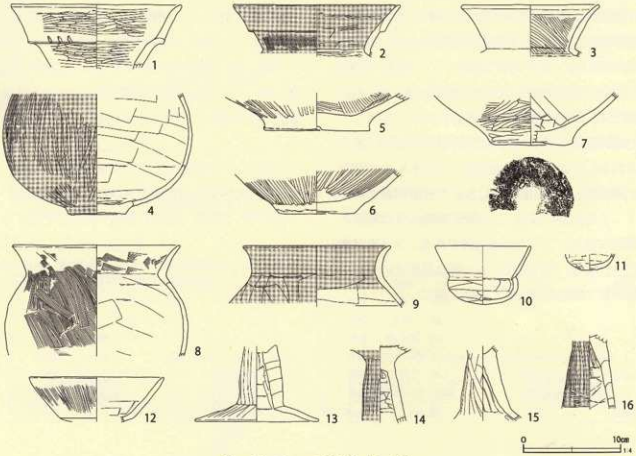


第318図　第281号住居跡

第281号住居跡（第318・319図）

調査区の南側西寄り、X・Y－54グリッドに位置する。第216号住居跡、第17号墳と重複する。南側は調査区域外にかかる。

平面形は北西コーナー部分の検出のみで、全体の形状が不明である。主軸方向はN－61°－Eを



第319図　第281号住居跡出土遺物

第135表　第281号住居跡出土遺物観察表（第319図）

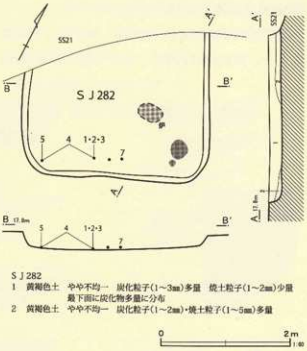
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(17.6)	7.5	－	ACDEHI	15	普通	にぶい橙	№24	
2	土師器	壺	(17.2)	5.3	－	CEHIK	20	普通	にぶい黄橙	赤彩　№32	
3	土師器	壺	(14.0)	5.3	－	ACGHIJ	25	普通	橙	№1・16	
4	土師器	壺	－	12.4	6.0	AH	50	普通	にぶい赤褐	赤彩　№13	
5	土師器	壺	－	3.9	10.8	AHI	60	普通	暗褐	№25	
6	土師器	壺	－	4.4	7.8	ACEHJ	65	良好	灰黄褐	輪台状　№12	
7	土師器	壺	－	5.4	8.6	ACEJ	45	良好	にぶい橙	輪台状　№5	
8	土師器	甕	(17.2)	11.3	－	EHIJK	25	普通	にぶい褐	№23	
9	土師器	甕	(15.0)	6.3	－	AEGHIJK	15	良好	明赤褐	赤彩　№9	
10	土師器	坩	(9.8)	5.9	－	CEHIK	60	普通	にぶい褐	№26	
11	土師器	坩	－	1.6	1.4	BHIK	50	普通	にぶい橙	№7	
12	土師器	高坏	(13.8)	4.6	－	CEHIK	20	普通	赤褐	№17	
13	土師器	高坏	－	7.7	(12.6)	CEHIJK	50	良好	橙	№27	
14	土師器	高坏	－	7.9	－	AHIJK	85	普通	橙	赤彩　№6	
15	土師器	高坏	－	7.5	－	AEHIJK	80	普通	褐灰	№4	
16	土師器	高坏	－	7.6	－	ACGHIJK	70	普通	灰褐	赤彩　№10	

指す。規模は残存する部分で、長軸2.82ｍ、短軸2.54ｍ、深さ10.0㎝を測る。掘り込みの浅い住居跡である。本住居跡の下面には第216号住居跡が存在する。床面はやや不安定で凹凸をもつ。

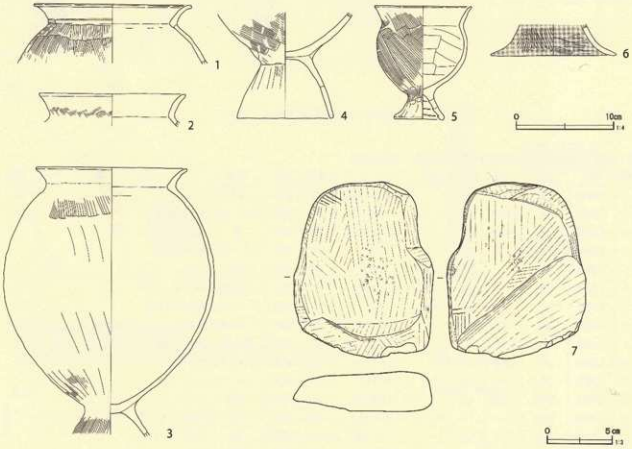
施設は、炉跡とピット２基を検出した。炉跡はほぼ中央に位置し、楕円形と推定される。推定径70.0×82.0㎝、深さ4.0㎝を測る。ピットは、径30.0～33.0㎝、深さ15.0～24.0㎝を測る。ピット１内の覆土は、砂利で覆われていた。

遺物の出土状況は、住居跡全体に広がって検出された。

遺物は、1～16を図示した。１～７は壺である。１・２は複合口縁壺、３は素口縁壺、４は胴部が球形に張る。５～７は壺底部である。８・９は甕、10・11は坩、12は高坏、13～16は高坏でいずれも柱状脚で脚端部が大きく屈曲し開く。



第320図　第282号住居跡



第321図　第282号住居跡出土遺物

第282号住居跡（第320・321図）

調査区の中央西寄り、Q－59グリッドに位置する。第21号墳と重複する。東側２ｍに第267号住居跡がある。

平面形は長方形と推定される。主軸方向はＮ－63°－Ｅを指す。規模は残存する部分で、長軸2.89ｍ、短軸2.11ｍ、深さ18.6㎝を測る。第１層の下面で床直上には炭化物が多量に見られた。第２層は焼土粒子・焼土ブロックが多く堆積する。床面は平坦である。

施設は炉跡を検出した。推定径37.2㎝を測る。

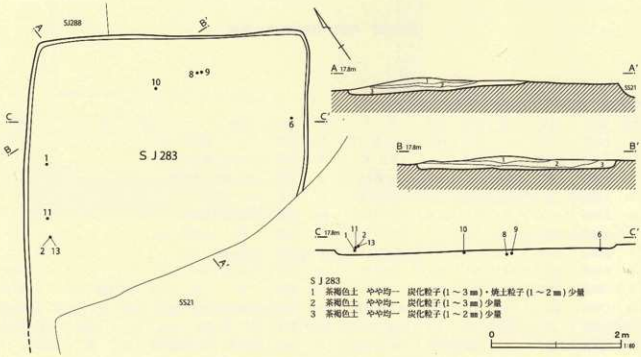
遺物の出土状況は、南壁際からまとまってつぶれるような状況で検出された。南西コーナーからは、小型台付甕が検出された。

遺物は、１・２が甕、３～５は台付甕である。３はやや短い台部から胴部が大きく外側に膨らみ、楕円状に張りをもつ。長胴化した台付甕である。口縁部は短く「く」の字状に開く。４はやや長い台部で「ハ」の字状に内湾する。大型の台付甕と想定される。

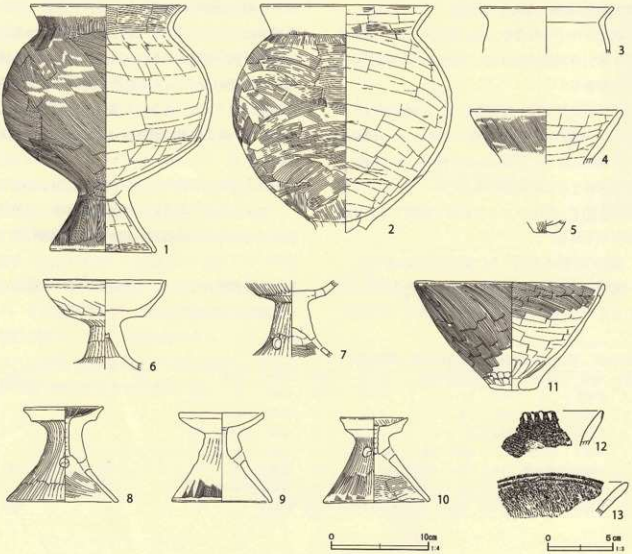
５は小型の台付甕である。口縁部に最大径をもつ。短めの台部は粘土紐の巻き上げによって作られている。やや器壁は厚い感がある。胴部は縦方向のハケメを施し、内面はヘラナデである。６は高坏の脚部破片である。内外面に赤彩が見られる。７は緑色岩の砥石である。

第136表　第282号住居跡出土遺物観察表（第321図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考		図版
1	土師器	甕	(16.2)	6.0	－	AEH	45	普通	橙	No.3		
2	土師器	甕	15.2	3.3	－	EHI	70	普通	灰褐	No.3		
3	土師器	台付甕	(15.4)	27.6	－	AEHIK	30	普通	明赤褐	No.3		
4	土師器	台付甕	－	10.8	9.8	ABCEHI	70	普通	にぶい橙	No.3・4		
5	土師器	小型台付甕	10.0	11.5	5.2	ACHIJ	85	普通	橙	No.4		104-1
6	土師器	高坏	－	3.2	(12.8)	AEI	20	普通	にぶい橙	赤彩		
7	石製品	砥石	長さ13.5	幅10.7	厚さ3.3	重さ784.1	石材	緑色岩		No.1		153-2



第322図　第283号住居跡



第323図　第283号住居跡出土遺物

第137表　第283号住居跡出土遺物観察表（第323図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	15.7	25.4	10.8	AEGHIJK	90	普通	にぶい褐	煤付着　№5	98-3
2	土師器	台付甕	(17.5)	23.3	—	EHIK	70	普通	にぶい橙	煤付着　№7	
3	土師器	甕	(13.4)	4.7	—	AEHIK	10	普通	にぶい橙	風化顕著	
4	土師器	壺	(15.6)	5.5	—	EHIJK	30	普通	にぶい橙		
5	土師器	ミニチュア	—	1.8	(2.7)	AEHIK	60	普通	にぶい橙	輪台状	
6	土師器	高坏	12.6	9.2	—	EHIKLM	90	普通	橙	石英多　№1	
7	土師器	高坏	—	7.9	—	AEHIK	60	普通	橙	三孔	
8	土師器	器台	8.0	9.7	11.5	AHJM	100	普通	にぶい橙	四孔　№3	135-10
9	土師器	器台	8.5	9.1	10.2	EG	100	普通	橙	二孔　石英多　胎土粗雑　№2	135-11
10	土師器	器台	6.9	8.6	10.9	AEHIJK	100	普通	明赤褐	三孔　№4	135-12
11	土師器	甑	19.4	11.0	4.7	AJM	100	普通	にぶい橙	№6	141-3
12	土師器	甕	—	2.6	—	EIJK	5	良好	灰黄褐	内外面煤付着	
13	土師器	甕	—	2.6	—	AEHIJK	5	良好	にぶい黄橙	外面煤付着　№7	

第283号住居跡（第322・323図）

調査区の中央東寄り、R・S－59・60グリッドに位置する。第288号住居跡、第21号墳と重複する。北東２ｍに第287号住居跡がある。

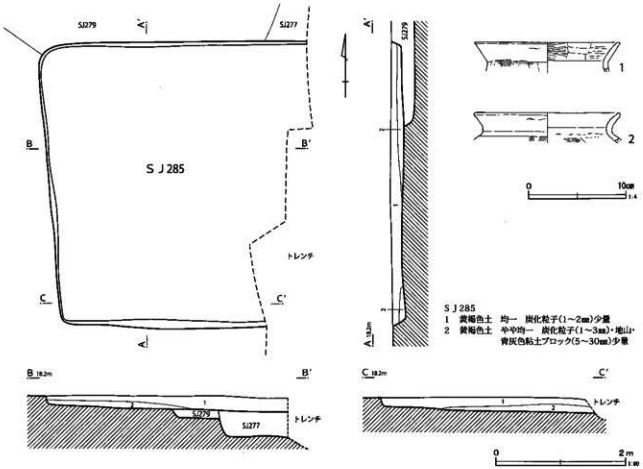
平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－37°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸4.39ｍ、短軸4.38ｍ、深さ19.8cmを測る。

施設は検出できなかった。

遺物の出土状況は、西壁中央付近の壁際から台付甕、東壁やや北側の壁際から高坏を検出した。

北壁中央付近の壁際から器台を検出した。

遺物は、１・２が台付甕である。１は「ハ」の字状に開く台部に球形状の胴部が付く。口縁部は外傾して立ち上がる。外面および口縁部内面には細かなハケメが施される。２は台部欠損、底部に粘土の丸い突出が見られ、はめ込みによる接合である。胴部は球形状に張りをもつが肩部に最大径をもつ。３は甕、４は壺である。６・７は有稜高坏で、７は三方透かしである。８～10は器台である。器受部は浅い逆台形状である。脚部は柱状部分が残り、円錐状に開く、脚端部に向け器壁が薄くなる。穿孔部分は器台によって位置にばらつきが見られる。８は脚部中央で５：５の位置に穿孔、９は４：６の位置に穿孔、10は３：７の位置に穿



第324図　第285号住居跡・出土遺物

第138表　第285号住居跡出土遺物観察表（第324図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(15.0)	3.1	－	AEHIJK	20	普通	橙	器面磨滅	
2	土師器	甕	(15.0)	3.1	－	AEHIJK	15	良好	にぶい黄橙		

孔している。11は鉢型甑である。

第285号住居跡（第324図）

調査区の北側東寄り、L－61グリッドに位置する。第277・279号住居跡と重複する。西２ｍに第253号住居跡、南西１ｍに第306号住居跡がある。

東側は攪乱に壊されている。

平面形は、東側をトレンチによって切られているため確定はできないが、長方形と推定される。主軸方向はN－1°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸4.40ｍ、短軸3.66ｍ、深さ24.0cmを測る。床面はやや不安定で凹凸をもつ。

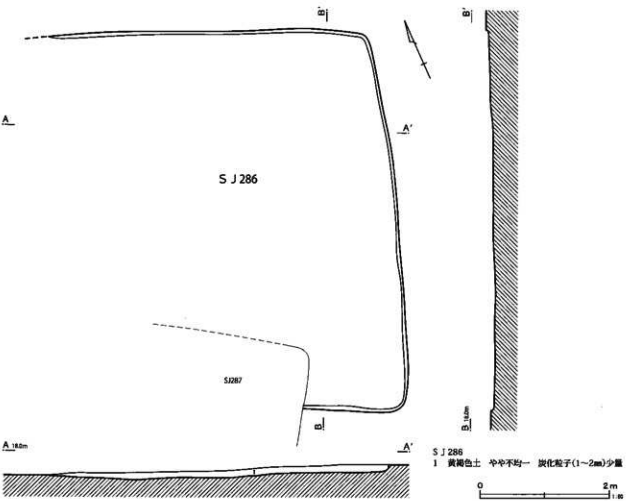
遺物は、覆土中から検出された。１・２は甕の口縁部破片である。

第286号住居跡（第325・326図）

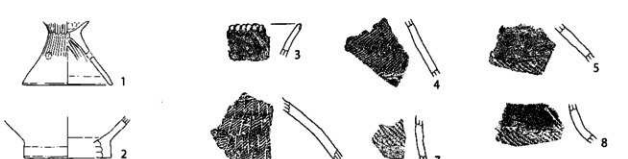
調査区の中央東寄り、R－60グリッドに位置する。第287号住居跡と重複する。第21号墳内にあたる。

平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－20°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸5.88ｍ、短軸5.82ｍ、深さ12.0cmを測る。

遺物は、１～８を図示した。１は器台、２は壺の底部である。底部は高台状を呈する。３は甕の口縁部である。口端部にキザミを施し以下ハケ調整が施されている。４は壺の胴上半部である。ＲＬ単節縄文とＬＲ単節縄文を交互に施文して羽状構成としている。５は壺の胴上半部である。無文帯下にＲＬ単節縄文を施文している。６は壺の胴部である。５本１単位の櫛描波状文を４段施文している。７・８は壺の胴部上半で同一個体である。無文帯下にＲＬ単節縄文を施文している。



第325図　第286号住居跡



第326図　第286号住居跡出土遺物

第139表　第286号住居跡出土遺物観察表（第326図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	器台	—	6.5	(9.2)	CEHIJ	30	普通	橙	三孔　器面磨滅	
2	土師器	壺	—	4.2	(9.0)	ACHJ	20	普通	にぶい橙		
3	弥生	甕	—	2.5	—	CJK	5	普通	にぶい橙		
4	弥生	壺	—	4.7	—	EJ	5	普通	灰黄褐		
5	弥生	壺	—	2.9	—	EHI	5	普通	にぶい橙		
6	弥生	壺	—	7.0	—	AEHI	5	良好	橙		
7	弥生	壺	—	3.6	—	AIK	5	普通	にぶい橙		
8	弥生	壺	—	2.9	—	CEK	5	普通	にぶい橙		

第287号住居跡（第327図）

調査区の中央東寄り、R－60グリッドに位置する。第286・288号住居跡と重複する。

確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。平面形は判然としない。主軸方向はN－40°－Eを指す。規模は残存する部分で南北軸3.66m、深さ6.5cmを測る。遺構確認面からの掘り込みは浅く、床面の一部は確認の段階で露出していた。

本住居跡は、第283・286・278・288号住居跡と重複し、確認面での検出であるが、ほとんど覆土が残存せず、床面もしくは住居の痕跡を把握したにとどまった。このため、断面観察による重複関係を捉えることができなかった。住居跡の掘り込みは5cm前後と浅く、床面の高さは、第287号住居跡が浅く、北東側に重複する第288号住居跡・第286号住居跡の順で床面レベルが雛壇状に低くなる。

施設は検出できなかった。

遺物は図示できるものが検出されなかった。

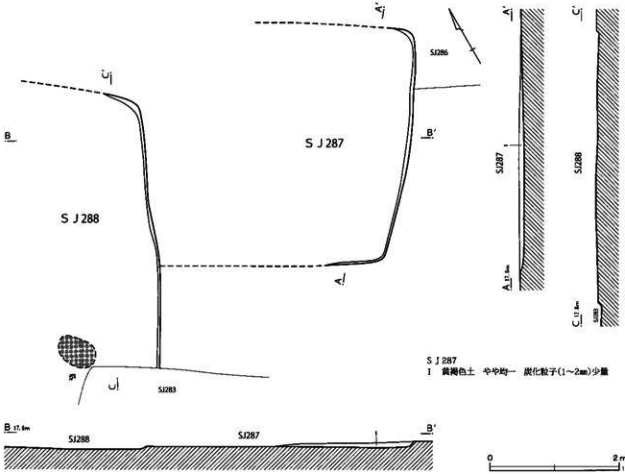
第288号住居跡（第327図）

調査区の中央東寄り、R－60グリッドに位置する。第283・287号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は判然としない。主軸方向はN－29°－Eを指す。規模は残存する部分で、推定南北軸4.20m、深さ3.4cmを測る。掘り込みは浅く覆土の堆積はほとんど見られなかった。このため、重複する住居跡は床面レベルが異なることで住居跡を確認した。南側には本住居跡よりも床面レベルの低い第283号住居跡が位置し、東側には本住居跡よりも床面レベルのやや高い第287号住居跡が位置する。

本住居跡の東壁は南側の第283号住居跡まで検出し、北側は北東コーナー部分まで明らかにできた。北壁は検出することができなかった。また、西壁も検出することができなかった。

施設は炉跡のみの検出であった。南側に位置し、楕円形と推定される。推定径41.0×60.6cmを測る。遺物は図示できるものが検出されなかった。



第327図　第287・288号住居跡

第289号住居跡（第328・329図）

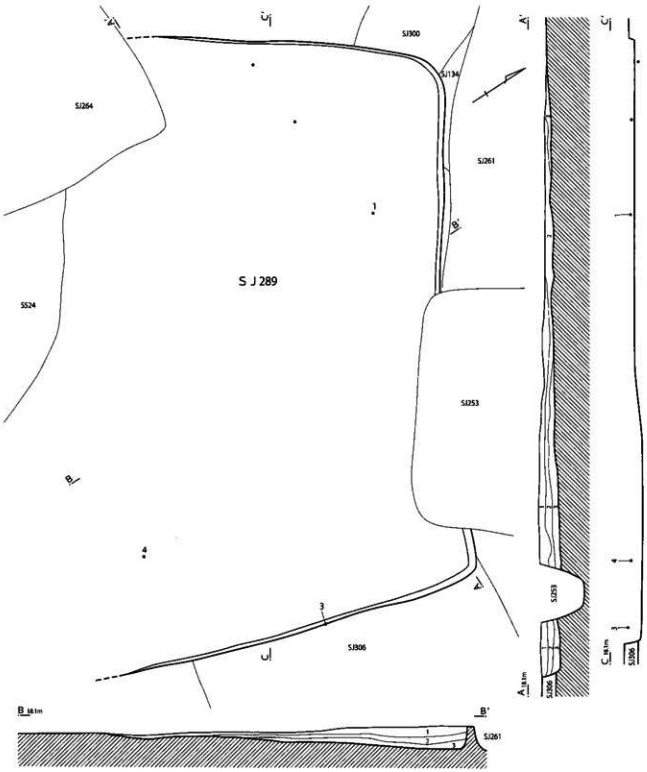
調査区の北側東寄り、L・M－60・61グリッドに位置する。第134・253・264・300・306号住居跡・第24号墳と重複する。

確認は重複遺構が多く極めて困難であった。また、トレンチを入れたが、南側は、掘り込みが浅く地山との境が不明瞭である。平面プランおよび住居跡床面の検出は難しかった。平面形は南壁が広がり不整形である。主軸方向はN－57°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸9.27m、短軸5.79m、深さ12.6～31.2cmを測る。大型の住居跡である。床面は緩やかな起伏をもつ。

本住居跡の部分は、重複関係が多く、住居間の新旧関係に連続性を追うことができる。本住居跡は第253号住居跡に切られている。

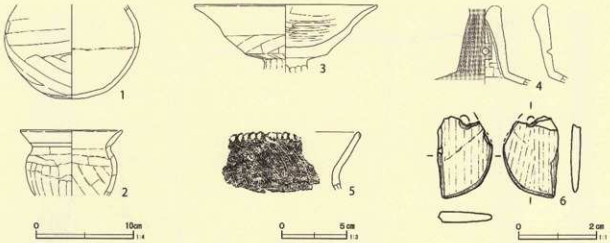
遺物は、1～6を図示した。1は小型の丸底壺である。胴部外面はナデを施す。胴部内面中位には輪積み痕が残る。2は小型鉢である。粘土紐を巻き上げて作られている。胴部やや球形を呈し、口縁部が外傾に直線的に開いて立ち上がる。口縁部が最大径になる。内外面ともヘラナデ調整である。

3・4は高坏である。3は坏部が外傾に大きく開く、口縁部と体部の境に稜をもつ。4の高坏は柱状脚で、中位に一ヶ所貫通しないが穿孔されている。5は吉ヶ谷系甕の口縁部である。口唇部端部にキザミをもつ。6は石製品の垂飾である。上半部に孔が一ヶ所見られる。



S J 289
1　黄褐色土　不均一　炭化粒子(1～3mm)少量　青灰色粘土ブロック含む　鉄分沈着多量
2　黄褐色土　やや不均一　炭化粒子(1～2mm)・鉄分沈着少量
3　黄褐色土　やや不均一　炭化粒子(1～3mm)・青灰色粘土ブロック少量

第328図　第289号住居跡



第329図　第289号住居跡出土遺物

第140表　第289号住居跡出土遺物観察表（第329図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	9.6	—	ACJ	70	普通	浅黄橙	No.3	
2	土師器	鉢	(10.4)	6.7	—	AHIJK	20	普通	黒	内面浅黄橙	
3	土師器	高坏	(18.8)	6.9	—	CEHIK	50	普通	赤	内外面二次被熱　No.4	
4	土師器	高坏	—	7.8	—	CEHIK	80	普通	橙	赤彩　器面磨滅　No.5	
5	土師器	甕	—	4.4	—	EHIKM	10	普通	にぶい褐	吉ヶ谷系　外面煤付着	
6	石製品	垂飾	長さ2.1	幅1.4	厚さ0.3	重さ1.3	石材	滑石			151-8

第290号住居跡（第330～334図）

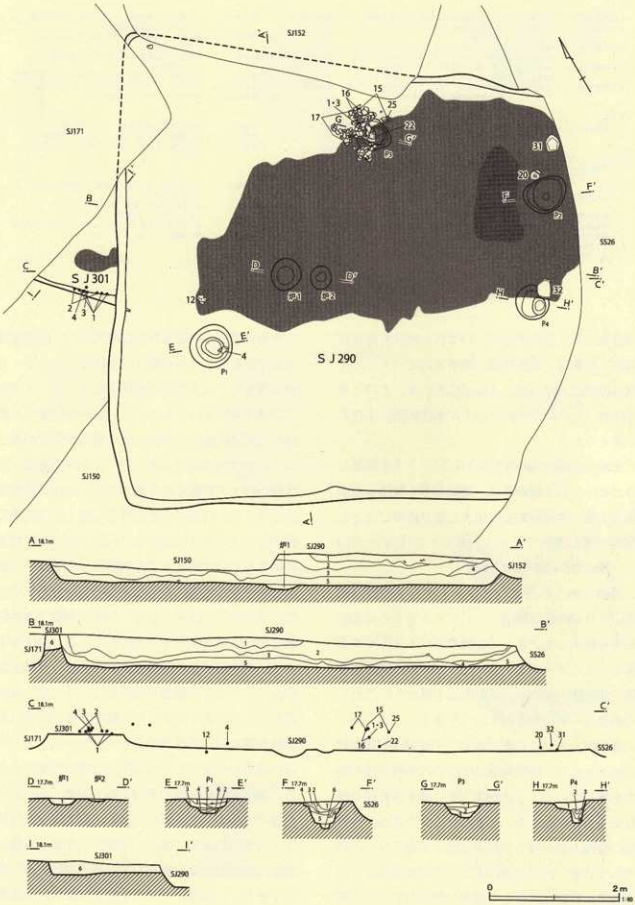
調査区の中央東寄り、U－60・61、V－61グリッドに位置する。第150・152・171・301号住居跡、第26号墳と重複する。

平面形は東側を第26号墳で切られ、東壁が検出されなかったが、長方形と推定される。主軸方向は、N－60°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸7.08m、短軸6.54m、深さ48.0cmを測る。断面観察によると、本住居跡は他の遺構との切り合いにより覆土の大半は削平され、わずかに西壁の一部が残存する。本住居跡に切られている住居跡は、第301号住居跡である。一方、本住居跡の覆土を切り込んでいる住居跡は第150・152・171号住居跡が存在する。重複が多いため、住居跡の平面形態をとらえることが難しく、北壁から西壁にかけては、重複遺構によって切られ、住居跡のコーナーを推定した。住居跡の北寄り半分は床直上に炭化物層の堆積が見られた。床面はわずかな凹凸が見られ不安定である。

床面の凹凸は、古墳跡の周溝内側の墳丘下から検出された住居跡でもみられた現象である。おそらく、墳丘の盛り土によって重量がかかり、覆土や住居跡の床面が沈下すると考えられる。しかも、墳丘の周溝から中央に向かって床面が傾斜する傾向にある。

本住居跡は集落内でも規模の大きな住居跡である。施設は炉跡2箇所、ピット4基を検出した。炉跡2基は、並んだ状態で、中央よりやや西側に位置し、円形を呈している。炉跡1は、径43.2cm、深さ9.0cmを測る。炉跡2は、径30.0cm、深さ2.0cmを測る。

ピットは、四か所検出した。ピット1は住居跡西寄りのやや壁に近い位置で検出した。ピットはテラス状の掘り込みがあり、中央が一段深く掘り込まれていた。ピット2とピット4が住居跡東寄りに南北に並んだ状態で1.50mの距離をもって検出された。いずれも円形にテラス状に掘り込み、中央を一段深く掘り下げている。柱の据え置き部



第330図　第290・301号住居跡（1）

S J 290
1　焦褐色土　炭化物やや含む　砂を部分的に含む　白色粒子微量　しまり・粘性あり
2　暗褐色土　炭化物・焼土・白色粒子微量　砂を部分的に含む しまりあり　粘性ややあり
3　暗褐色土　炭化物・焼土含む　白色粒子微量　砂・鉄分部分的に見られる 部分的に液状化跡　多少グライ化　鉄分一部斑状　しまり・粘性あり
4　暗褐色土　炭化物・焼土微量　鉄分一部斑状　多少グライ化 黄褐色ブロックが下部に入る　しまりあり　粘性ややあり
5　暗青灰色土　炭化物・焼土微量　砂を部分的に含む　鉄分斑状　部分的に液状化跡 グライ化　一部炭化物の堆積層　しまり・粘性あり

S J 301
6　茶褐色土　ほぼ均一　炭化粒子(1～2mm)・焼土粒子(1～2mm)・地山黄色砂質 ブロック(5～30mm)少量

炉
1　赤褐色土　焼土ブロック主体　炭化物含む　しまりなし　粘性あり

ピット1
1　暗褐色土　炭化物・白色粒子微量　鉄分多量　一部砂質　土器含む しまりあり　粘性ややあり
2　暗青灰色土　粘土質　鉄分含む　一部砂質　しまり・粘性あり
3　暗褐色土　炭化物微量　鉄分含む　一部砂質　しまりあり　粘性ややあり
4　オリブ灰色土　鉄分含む　しまりあり　粘性ややあり
5　オリブ灰色土　鉄分含む　多少粘土質　しまり・粘性あり
6　オリブ灰色土　鉄分含む　ほぼ砂質　しまりあり　粘性なし

ピット2
1　暗褐色土　炭化物微量　鉄分含む　砂質少量　やや粘土質 しまりあり　粘性ややあり
2　暗褐色土　鉄分含む　砂質少量　やや粘土質　しまりあり 粘性ややあり
3　暗褐色土　炭化物・砂質微量　鉄分含む　やや粘土質 しまり・粘性あり
4　青灰色土　鉄分含む　砂質微量　粘土質多量　しまり・粘性あり
5　暗青灰色土　鉄分含む　粘土質　土器含む　しまり・粘性あり
6　暗茶褐色土　鉄分含む　しまりなし　粘性あり

ピット3
1　暗褐色土　炭化物微量　鉄分多量　しまり・粘性あり
2　暗褐色土　鉄分微量　粘土質　しまりややあり　粘性強い
3　暗青灰色土　鉄分微量　粘土質　砂をやや含む　しまりややあり 粘性あり

ピット4
1　暗褐色土　炭化物微量　鉄分含む　斑状に黄褐色土含む しまり・粘性あり
2　青灰色土　炭化物・黄褐色土微量　鉄分含む　粘土質 しまりややあり　粘性あり
3　青灰色土　炭化物・鉄分微量　粘土質　しまりややあり　粘性あり
4　青灰色土　鉄分微量　粘土質　しまり・粘性あり

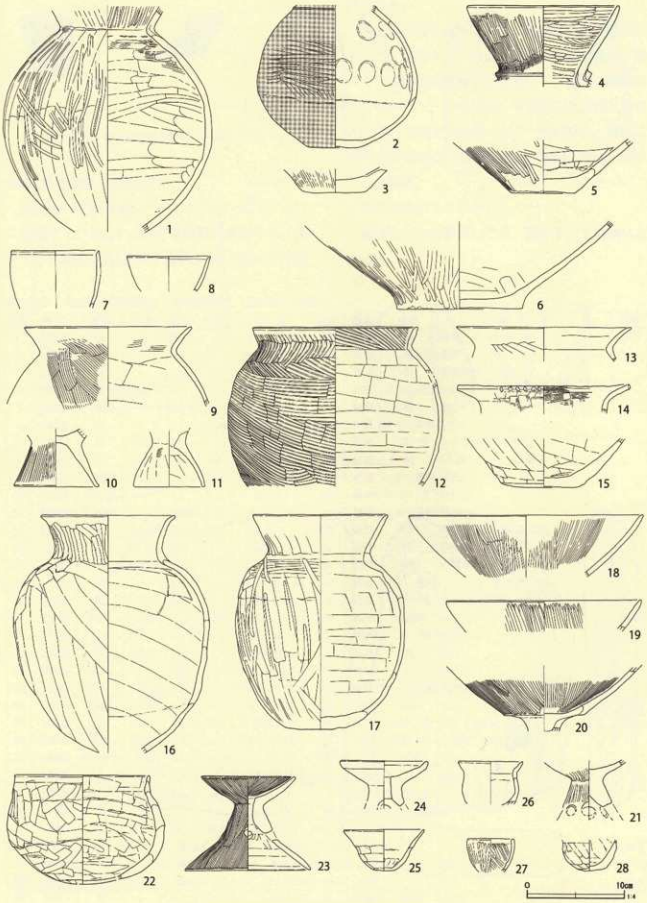
第331図　第290・301号住居跡（2）

分と見られ、近接するが、いずれも柱穴と考えられる。東側は、第26号墳に削平されているため東壁の位置は不明だが、さほど広がらないものと考えられ、この両者の対ピットが本住居跡の主柱穴と考えられる。

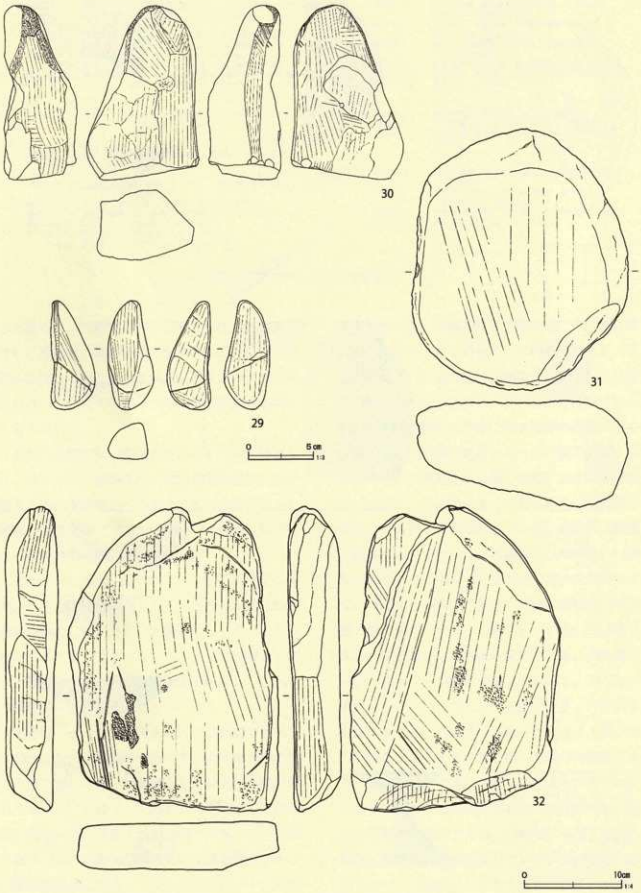
また、北側中央の北壁寄りにピット3を検出した。ピットの上層からは、遺物を多く検出したが、覆土上層の堆積層からの出土であり直接ピットと関係がある遺物ではない。ピットは径34.0～65.0cm、深さ21.0～49.7cmを測る。

遺物の出土状況は、ピット1から4の壺口縁、周辺から12の甕を検出した。ピット2からは20の高坏を検出した。さらに北側のピット3のやや上層からまとまって1・3・5・15～17の甕および壺、22の鉢、25の手づくね土器を検出し、これらの遺物は一括投棄されたようである。

遺物は、1～6が壺である。1は胴部が球形状に張りをもつ。胴部外面はナデののち縦方向の磨きを施している。2は胴部下半に最大径を図り張りをもつ。いわゆる、下膨れタイプである。内外面に輪積み痕が残る。外面は磨きが施され、赤彩されている。内面は指押さえの圧痕が残る。4は口縁部が外傾に外反して開き口唇部わずかに内湾する。頸部外面の屈曲部に粘土紐の貼り付けによる突帯が巡る。口縁部外面は縦方向に、内面は横方向に丁寧なミガキが施されている。3・5・6が壺底部で6は大型壺の底部である。7・8は坩の口縁部破片とみられる。9～11が台付甕である。10の台部は直線的に外傾に開き端部の器壁が薄くなる。11は内湾脚である。12～17が甕である。12は粗いハケメが施された甕である。14は口縁部破片であるが、口縁が大きく外方に開く、口唇部に刺突によるキザミを巡らしている。16・17は肩部に張りをもつ寸胴タイプの胴部に、やや長い口縁部が緩やかに外傾に立ち上がる。18～21がやや大型の坏部をもつ高坏である。坏部の調整は内外面縦方向に丁寧なミガキが施されている。22は鉢である。粘土紐による輪積み成形である。内外面は細かいなヘラナデ調整が施されている。23・24が器台、25～28がミニチュア土器である。いずれも形態が異なる。25は手づくねでヘルメット型、26は口縁部が外反する。27は坩の口縁の可能性もある。28は器壁やや厚く手づくねである。29～32は石器で29・30・32は砥石である。33は緩やかに外反する甕の口縁部である。口端部にキザミを施し頸部に櫛描波状文を施文している。34は甕の口縁部である。口端部にキザミを施し、以下ハケ調整を行っている。



第332図　第290号住居跡出土遺物（1）



第333図　第290号住居跡出土遺物（2）

第334図　第290号住居跡出土遺物（3）

跡がある。

住居跡の掘り込みは浅く、確認は極めて困難であった。平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、西側は確認面で床を検出し、西壁の確認はできなかった。このため、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－51°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸5.16m、短軸3.79m、深さ7.8cmを測る。

施設は検出できなかった。

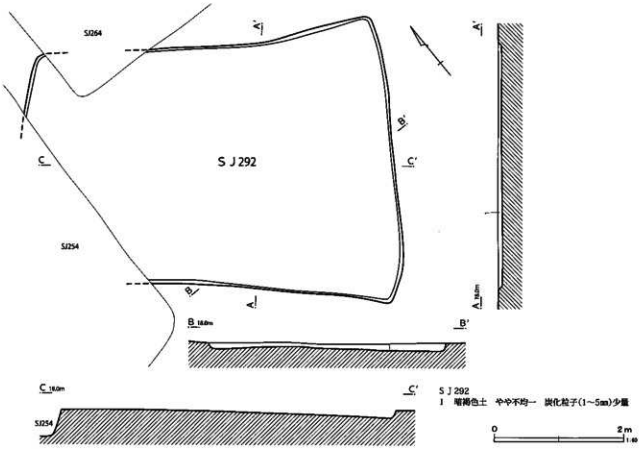
遺物は小片を検出したが、図示すべき遺物はなかった。

第292号住居跡（第335図）

調査区の北側西寄り、M・N－59・60グリッドに位置する。第254・264号住居跡と重複する。南東1mに第293号住居跡、南西1mに第263号住居

第141表　第290号住居跡出土遺物観察表（第332～334図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	23.3	－	CEHIK	70	普通	橙	風化　№10	89-5
2	土師器	壺	－	14.5	5.2	EHIJ	65	普通	にぶい橙	赤彩	
3	土師器	壺	－	2.5	6.1	CEHK	80	普通	橙	器面磨滅　№10	
4	土師器	壺	(15.6)	8.3	－	AEGHIJK	25	普通	にぶい橙	№1	
5	土師器	壺	－	5.5	6.7	EHIJK	25	普通	橙	P3	
6	土師器	壺	－	9.0	(12.8)	CJ	30	普通	にぶい黄橙	SJ151	
7	土師器	坩	(9.0)	5.9	－	ACEHI	25	普通	にぶい橙	ヒサゴ壺か　SJ151	
8	土師器	坩	(8.5)	3.6	－	ACEHI	15	普通	橙	SJ151	
9	土師器	台付甕	(16.9)	8.2	－	AEGHIK	10	普通	にぶい黄橙	SJ151	
10	土師器	台付甕	－	5.9	8.8	AEHJ	95	普通	にぶい橙	SJ151	
11	土師器	台付甕	－	5.7	(7.3)	EHIJK	20	普通	にぶい黄橙	SJ151	
12	土師器	甕	(16.9)	16.4	－	ADIJ	30	普通	黒褐	叩き甕　内外面煤付着　№2	
13	土師器	甕	(17.8)	3.5	－	ACEHI	10	普通	橙	石英多　SJ151	
14	土師器	甕	(17.8)	2.8	－	CE	5	普通	赤褐	口唇キザミ　SJ151	
15	土師器	甕	－	5.0	8.7	AEHIJKM	40	普通	にぶい黄橙	チャート　輪台状　№11・12	
16	土師器	甕	(13.5)	24.5	－	AEGHIK	60	普通	にぶい褐	外面二次被熱　№10・11	
17	土師器	甕	(13.8)	22.1	6.2	AEHIJK	70	普通	灰黄褐	№9・11	113-5
18	土師器	高坏	(24.0)	6.4	－	AEGHIK	5	普通	にぶい橙	SJ151	
19	土師器	高坏	(20.0)	3.2	－	AEHI	20	普通	橙	風化	
20	土師器	高坏	－	6.6	－	ACDEHIJ	70	良好	橙	№5	
21	土師器	高坏	－	5.1	－	AEHIJK	80	普通	にぶい黄橙	石英多　四孔二段　SJ151	
22	土師器	鉢	13.8	11.1	－	ACDHI	95	普通	灰褐	№13	123-3
23	土師器	器台	9.5	9.6	13.0	AEGHJK	70	普通	にぶい橙	四孔　SJ151	136-1
24	土師器	器台	(9.0)	4.9	－	AEHIJK	70	良好	にぶい橙	石英多　四孔　SJ151	
25	土師器	手づくね	8.3	4.2	2.1	AG	60	不良	淡黄	№12	
26	土師器	ミニチュア	(6.6)	4.4	－	ACEI	20	普通	橙	SJ151	
27	土師器	ミニチュア	(4.5)	3.4	－	EHIJ	5	良好	にぶい橙		
28	土師器	手づくね	－	3.1	2.5	AHIJK	60	普通	にぶい黄橙		
29	石製品	砥石	長さ8.4　幅3.5　厚さ3.5　重さ129.5　石材　砂岩								
30	石製品	砥石	長さ17.9　幅11.6　厚さ7.5　重さ2045.8　石材　緑色岩								152-2
31	石製品	台石	長さ26.8　幅22.4　厚さ11.9　重さ9530.0　石材　砂岩							№6	
32	石製品	砥石	長さ31.5　幅21.6　厚さ5.4　重さ6430.0　石材　砂岩							№7	153-3
33	弥生	甕	－	4.1	－	ADI	5	普通	黄灰	SJ151	
34	弥生	甕	－	3.4	－	EHIJK	5	良好	灰褐	外面煤付着	



第335図　第292号住居跡

第293号住居跡（第336・337図）

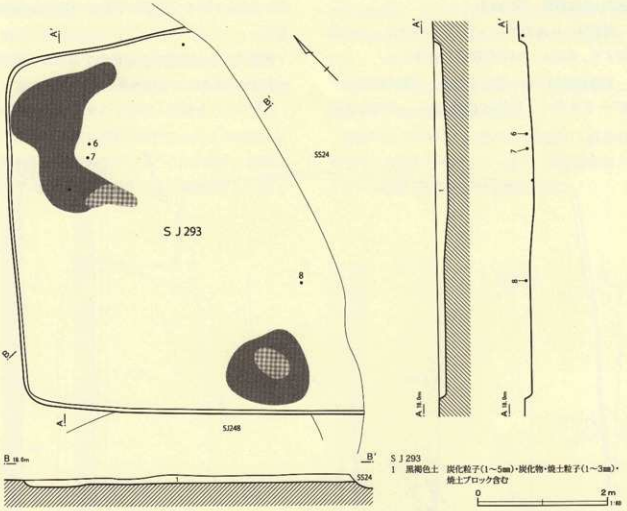
調査区の北側東寄り、M・N－60グリッドに位置する。第248号住居跡、第24号墳と重複する。北西1mに第292号住居跡、西2mに第263号住居跡、南1m内に第259号住居跡がある。

住居跡の掘り込みは浅く、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。東側は第24号墳で切られているため全体は把握できない。平面形は東西方向に長い長方形と推定される。主軸方向はN－42°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸5.61m、短軸4.83m、深さ16.8cmを測る。床直上には炭化物と焼土の堆積層が見られた。特に、北東コーナー部分には炭化物と焼土ブロックが堆積していた。床面は不安定で若干の凹凸をもつ。

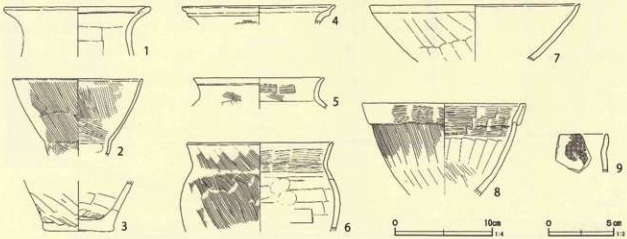
遺物の出土状況は、北西コーナー部分から高坏

第142表　第293号住居跡出土遺物観察表（第337図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(15.0)	5.1	－	BEHIJ	15	普通	にぶい橙	M60G	
2	土師器	坩	(13.5)	7.9	－	EGHIK	10	普通	橙		
3	土師器	甕	－	5.2	6.8	G	60	普通	褐	底部ヘラケズリ　M60G	
4	土師器	台付甕	(15.9)	1.9	－	ACHI	10	普通	灰黄	S字甕　角閃石多	
5	土師器	小型甕	(13.4)	3.2	－	EHI	5	普通	橙		
6	土師器	小型甕	(15.0)	9.1	－	AEJ	20	普通	赤褐	No.3	
7	土師器	高坏	(21.7)	5.8	－	EHIJK	10	普通	にぶい橙	No.2	
8	土師器	甑	(17.0)	9.3	－	CHJ	30	普通	にぶい黄橙	No.5	
9	土師器	鉢	－	2.9	－	AHI	5	普通	にぶい橙	赤彩　内面漆付着	



第336図　第293号住居跡



第337図　第293号住居跡出土遺物

と小型甕が検出された。また、住居跡の中央南側から鉢型甑を検出した。

遺物は、1～9を図示した。1は壺の破片、2は坩である。4はS字状口縁甕である。5・6は小型甕、7は高坏、8は折り返し口縁の鉢型甑である。9は内面に漆が付着した鉢の破片である。

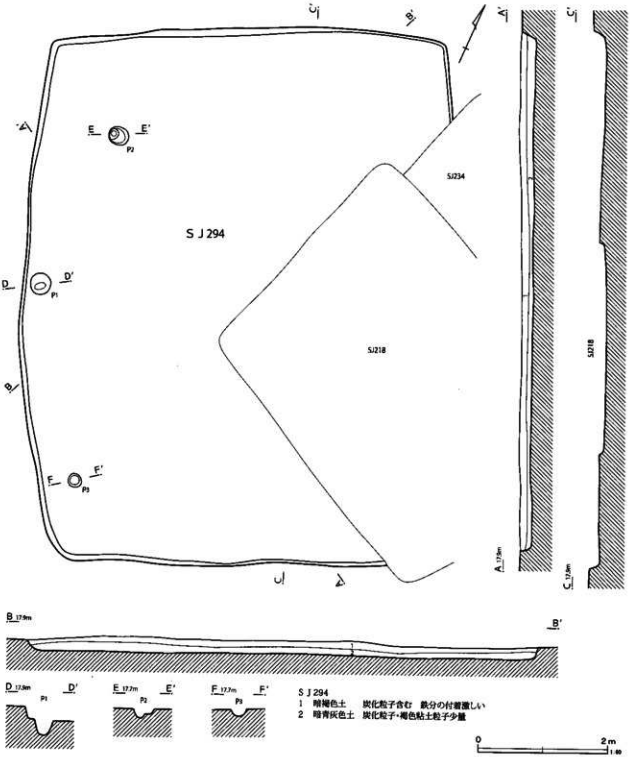
第294号住居跡（第338図）

調査区の中央西寄り、T・U－58グリッドに位置する。第218・234号住居跡と重複する。

平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－23°－Wを指す。規模は長軸8.25m、短軸6.36m、深さ20.0cmを測る。床面は不安定で若干の凹凸をもつ。

施設はピット3基のみの検出であった。径21.0～30.0cm、深さ11.2～21.4cmを測る。

遺物は小片を検出し図示すべき遺物はなかった。



第338図 第294号住居跡

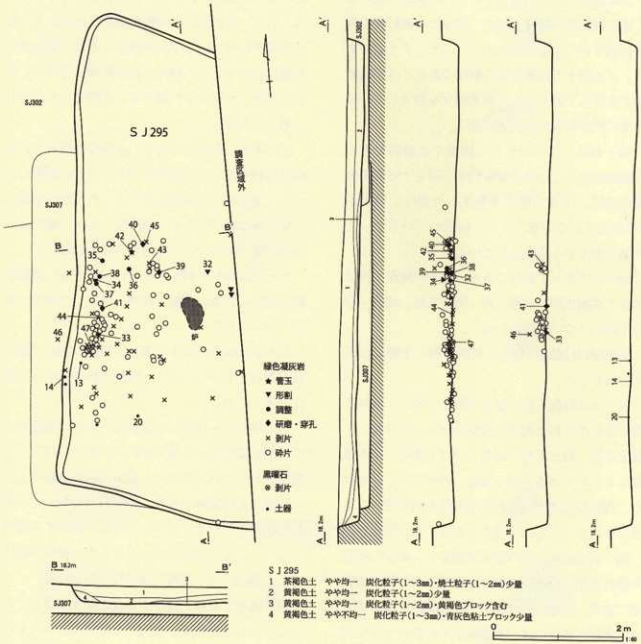
第295号住居跡（第339～341図）

調査区の北側東寄り、K・L－62グリッドに位置する。第302・307号住居跡と重複する。西側1mに第279号住居跡、南西側1mに第278号住居跡がある。

平面形は東側が調査区域外にかかるため判然としない。主軸方向はN－8°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸7.17m、短軸2.47m、深さ26.7cmを測る。本住居跡の下面には、第302・307号住居跡が存在する。床面は、不安定で凹凸をもつ。

施設は炉跡のみの検出であった。住居跡中央に位置する。推定径47.4cmを測る。

遺物の出土状況は、西壁のやや南側から多量の碧玉片と水晶片を検出した。また、西壁南寄りから13・14の甕と20の台付甕を検出した。



第339図　第295号住居跡

遺物は、1～31を図示した。1～6は壺である。1・2は素口縁壺で口縁外面を縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。3は複合口縁甕、4は折り返し口縁甕である。6は寸胴型の壺で外面はミガキ、内面は横ナデを施す。7～17は甕、18～20は台付甕である。7は口唇部にキザミ、9～11は叩き甕である。18・19はS字状口縁甕である。20の台部は、「ハ」の字状に開き端部が細く外反する。21は器台、22は鉢、23は坩である。24～26は高坏、27は小型壺である。口縁部外面には二条の綾杉状の模様が巡り、頸部にも綾杉状の模様が施されている。28～30はミニチュア土器である。31は壺または無形壺の胴部である。S字状結節文を挟んで細かいLR単節縄文を施文している。下端に円形竹管の刺突列が廻る。

32～46は、管玉の玉作に関連する遺物である。住居跡内からは、緑色凝灰岩を石材とする管玉未製品10点、玉作に伴って発生した剥片、砕片が117点出土している。また、破損しているが、完成品の管玉が1点出土している。

32～41は管玉未製品である。管玉の製作工程は、大きく荒割工程、形割工程、調整工程、研磨・穿孔工程の4つに分類される。

第295号住居跡からは、荒割工程の未製品は出土しなかった。

32～34は形割工程の管玉未製品である。荒割工程で作り出された板状の未製品から、角柱状に未製品を割り取る工程である。33は上部の一部が残存するものである。32・34は、形がいびつなもので、角柱状に定形化された未製品を割り取ることができなかったものと考えられる。

35～38は形割工程の管玉未製品に、細かい調整や敲打を加え、形状を整える調整工程の管玉未製品である。35は、両側面に丁寧な調整を加えている。表面と裏面には、剥離面がそのまま大きく残存している。36は表面と上面に調整が施されている。37は、調整中に半分が欠損している。38は、未製品の一部で、調整中に破損したものと考えられる。

39～41は、研磨・穿孔工程の管玉未製品である。調整工程で形状を整えられた未製品は、角柱体のまま6面を粗く研磨し、その後多角柱状に研磨し、穿孔作業を行い、穿孔が終了したものから仕上げの研磨を行っている。39は、角柱体に研磨を加える工程で、表面に研磨が加えられているが、他は研磨されていない。左側面は原礫面と考えられる。40も39と同様に、表面のみに研磨が加えられている。41は、多角柱状に研磨作業を行ったのち、穿孔作業を行っている管玉未製品である。穿孔部分が端に寄りすぎて、側面に孔が貫通している。穿孔に失敗した部分で、割り取って廃棄されたものと考えられる。

42は管玉の完成品である。上部は破損している。穿孔は残存部では片面穿孔であったが、破損しており、完形時には両面穿孔であった可能性が高い。

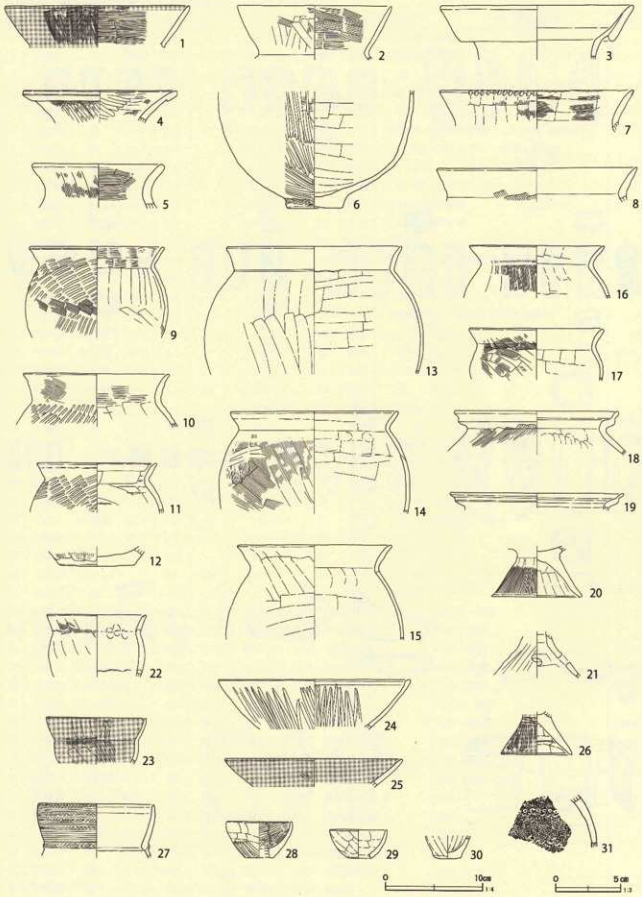
43～46は剥片である。剥片は、1㎝に満たない小形のものがそのほとんどを占めている。

43・44は横長の剥片である。44は下面に調整剥離が認められる。調整工程中に発生した剥片であると考えられる。

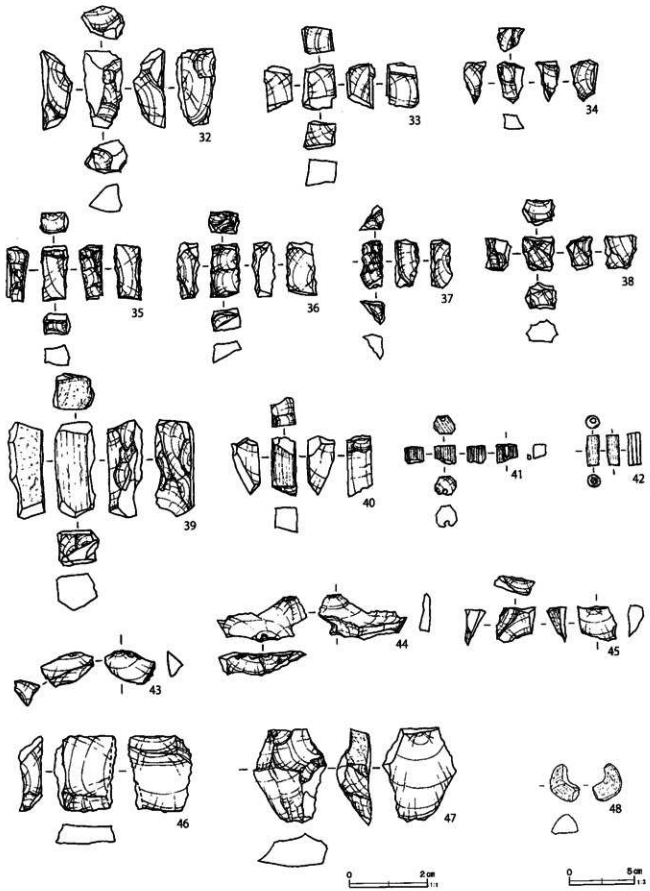
45・46は縦長の剥片である。45は右側面に節理面が残存している。46は、荒割工程で発生した剥片と考えられる。

47は黒曜石を石材とする剥片である。黒曜石は主に旧石器時代から縄文時代の石器の石材として、使用された石材であるが、桶川市前原遺跡の玉作に関連する住居跡からも、黒曜石を石材とする剥片が出土していることから、玉作に関連する遺物として、ここに図示することとした。縦長の剥片で、右側面には一部風化面が残存している。

48は砥石である。残存する長さは3㎝ほどである。石材は軽石で、砥石として使用されたものではなく、細かく砕いて研磨剤として使用していた可能性も考えられる。



第340図　第295号住居跡出土遺物（1）



第341図　第295号住居跡出土遺物（2）

第143表　第295号住居跡出土遺物観察表（第340・341図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	(19.0)	4.3	—	AEHIJ	15	良好	にぶい橙	赤彩	
2	土師器	壺	(16.0)	5.5	—	EHIJ	20	普通	にぶい橙		
3	土師器	壺	(19.8)	5.6	—	EGHI	15	普通	橙	胎土粗	
4	土師器	壺	(15.8)	3.3	—	AEHIK	20	普通	にぶい橙		
5	土師器	壺	(13.0)	4.5	—	CHIK	20	普通	灰白	風化顕著	
6	土師器	壺	—	12.0	5.7	AEHIK	40	普通	灰黄褐	外面煤付着　二次被熱　輪台状	
7	土師器	甕	(20.0)	3.9	—	ACEHIK	10	普通	にぶい褐	口唇キザミ　雲母・石英多	
8	土師器	甕	(10.4)	3.5	—	EHIK	10	普通	にぶい赤褐		
9	土師器	甕	(13.8)	9.3	—	HIJK	10	普通	にぶい褐	叩き甕　SJ302	
10	土師器	甕	(15.0)	5.4	—	CEHIK	20	普通	にぶい黄橙	叩き甕	
11	土師器	甕	(12.2)	5.1	—	ACEHIJ	25	普通	にぶい橙	叩き甕	
12	土師器	甕	—	2.0	(7.9)	EHIK	50	普通	灰黄褐		
13	土師器	甕	(18.0)	13.1	—	AEHIK	30	普通	灰褐	内外面煤付着　風化顕著	
14	土師器	甕	(17.0)	10.5	—	ACHIK	20	普通	明褐灰	№3	
15	土師器	甕	(15.8)	9.7	—	AEHIK	15	普通	黒褐	№1　SJ302	
16	土師器	小型甕	(13.7)	5.3	—	AHIK	15	普通	浅黄橙	内外面煤付着　風化顕著	
17	土師器	小型甕	(13.8)	5.3	—	EHIK	10	普通	にぶい橙	酸化鉄	
18	土師器	台付甕	(16.8)	4.5	—	CEHIK	10	普通	橙	S字甕	107-6
19	土師器	台付甕	(18.0)	1.6	—	ACHIK	10	普通	にぶい黄橙	S字甕	
20	土師器	台付甕	—	5.2	9.2	AEHIK	95	普通	橙	№4	
21	土師器	器台	—	4.7	—	CEHIK	20	普通	灰黄褐	四孔	
22	土師器	鉢	(10.2)	6.4	—	EHI	20	普通	にぶい橙		
23	土師器	坩	(10.2)	4.8	—	EHIK	10	普通	にぶい橙	赤彩	
24	土師器	高坏	(19.8)	5.1	—	ABEHIJ	15	普通	にぶい橙	風化	
25	土師器	高坏	(18.2)	2.9	—	CEI	10	普通	灰褐	赤彩	
26	土師器	高坏	—	4.3	(7.4)	AEHIK	30	普通	にぶい橙	赤彩	
27	弥生	小型壺	(11.9)	5.5	—	AHIK	10	普通	橙	綾杉文　K69G	
28	土師器	ミニチュア	(6.7)	3.7	(3.0)	AEHIJ	25	普通	にぶい橙		
29	土師器	ミニチュア	5.8	2.9	—	EHIK	60	普通	橙	風化	
30	土師器	ミニチュア	—	2.4	2.8	ABEHI	70	普通	にぶい橙		
31	土師器	壺	—	4.0	—	CHJ	5	普通	明赤褐		
32	石製品	管玉未製品	長さ2.0	幅1.0	厚さ0.8	重さ1.4	石材	緑色凝灰岩		№3-① 形割	
33	石製品	管玉未製品	長さ1.1	幅0.9	厚さ0.7	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		№65 形割	
34	石製品	管玉未製品	長さ1.0	幅0.7	厚さ0.6	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		№39 形割	
35	石製品	管玉未製品	長さ1.4	幅0.7	厚さ0.6	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		№34 調整	150-3
36	石製品	管玉未製品	長さ1.4	幅0.8	厚さ0.6	重さ0.4	石材	緑色凝灰岩		№45 調整	
37	石製品	管玉未製品	長さ1.2	幅0.6	厚さ0.6	重さ0.3	石材	緑色凝灰岩		№123 調整	
38	石製品	管玉未製品	長さ0.9	幅0.8	厚さ0.7	重さ0.5	石材	緑色凝灰岩		№37 調整	150-3
39	石製品	管玉未製品	長さ2.5	幅1.0	厚さ0.9	重さ2.4	石材	緑色凝灰岩		№14 研磨	150-3
40	石製品	管玉未製品	長さ1.5	幅0.7	厚さ0.7	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		№23 研磨	
41	石製品	管玉未製品	長さ0.5	幅0.5	厚さ0.5	重さ0.1	石材	緑色凝灰岩		№49 研磨・穿孔	
42	石製品	管玉	長さ0.8	幅0.3	厚さ0.3	重さ0.1	石材	緑色凝灰岩		№28	150-3
43	石製品	剥片	長さ0.9	幅1.4	厚さ0.6	重さ0.4	石材	緑色凝灰岩		№18	
44	石製品	剥片	長さ1.2	幅2.3	厚さ0.6	重さ0.7	石材	緑色凝灰岩		№130	
45	石製品	剥片	長さ0.9	幅1.0	厚さ0.5	重さ0.2	石材	緑色凝灰岩		№24	
46	石製品	剥片	長さ1.9	幅1.6	厚さ0.6	重さ2.0	石材	緑色凝灰岩		№47	
47	石製品	剥片	長さ2.9	幅1.9	厚さ0.9	重さ3.0	石材	黒曜石		№133	
48	石製品	砥石	長さ2.9	幅2.3	厚さ1.8	重さ2.0	石材	軽石			150-6

第296号住居跡（第342・343図）

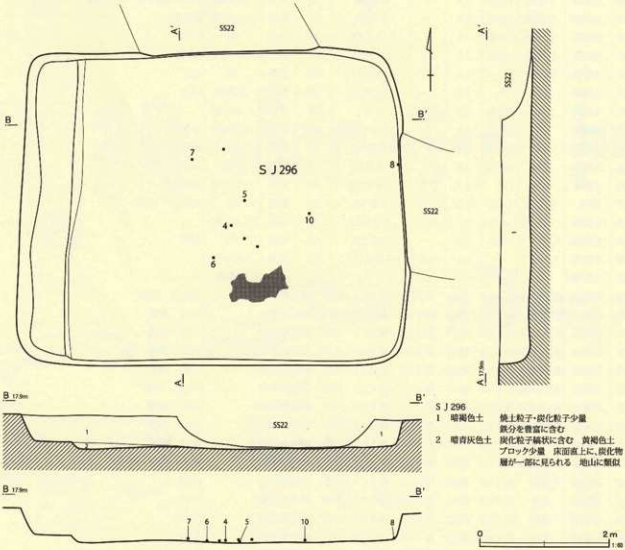
調査区の北側西寄り、P－59グリッドに位置する。第22号墳と重複する。北西１ｍに第241号住居跡がある。

平面形は長方形である。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は長軸6.0ｍ、短軸4.86ｍ、深さ51.0㎝を測る。床直上には炭化物層が見られ、一部床面に炭化物が残る。床面は平坦であるが西側で段をもち西壁側にベッド状の高まりがある。

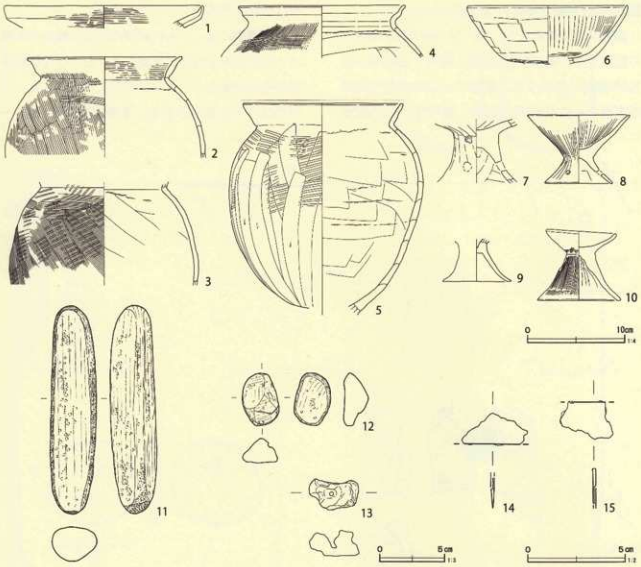
施設は検出できなかった。

遺物の出土状況は、住居跡の中央部床面から検出された。５の甕はつぶれて床面に貼り付くように検出された。６・７の高坏や８の器台は床面に突き刺さった状態で検出された。

遺物は、１が壺口縁部破片、２～５は台付甕である。３・５は叩き甕、４はS字状口縁甕である。６～９は高坏で、６は坏部が埦形、８は低脚である。10は器台である。11は敲石、12は砥石、13は貝巣穴痕泥岩である。14・15は鉄製品の破片である。製品は不明である。同一個体の可能性もあるが断定できない。古墳時代前期の所産であると考えられる。



第342図　第296号住居跡



第343図　第296号住居跡出土遺物

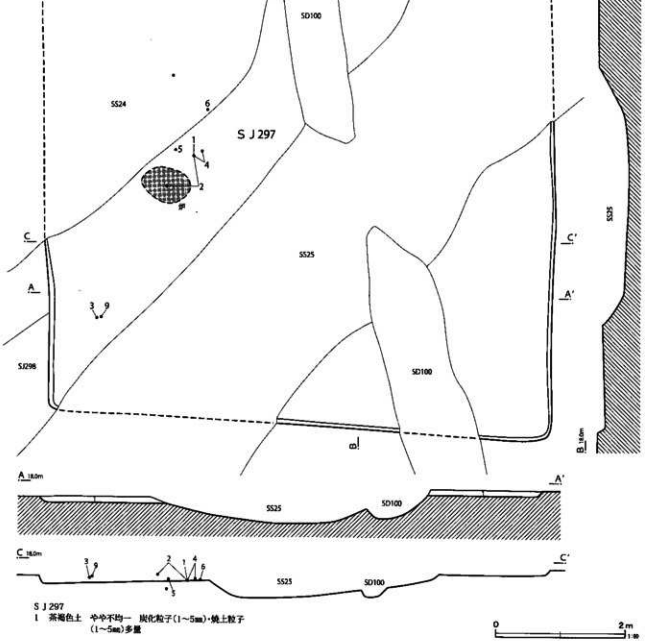
第144表　第296号住居跡出土遺物観察表（第343図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	(20.4)	2.6	—	EIK	5	普通	にぶい橙		
2	土師器	台付甕	(15.6)	10.3	—	ACEHK	40	普通	灰黄褐		
3	土師器	台付甕	—	10.6	—	EHI	30	普通	にぶい橙	叩き甕　Q60G	
4	土師器	台付甕	(17.0)	5.4	—	AEGHIK	15	普通	にぶい黄橙	S字甕　No.4	107-6
5	土師器	台付甕	16.4	21.7	—	ACJ	90	普通	灰黄褐	叩き甕　No.3	106-3・6
6	土師器	高坏	(16.4)	6.0	—	CEHIK	30	普通	にぶい橙	No.7	
7	土師器	高坏	—	6.5	—	AEHIJ	65	普通	にぶい黄橙	三孔　No.1	
8	土師器	高坏	(10.4)	7.0	(7.0)	BEGHIK	50	普通	にぶい橙	砂粒多　三孔　No.9	
9	土師器	高坏	—	4.3	7.2	EHI	70	普通	橙		
10	土師器	器台	7.2	7.0	8.6	AEHIJK	80	普通	にぶい黄橙	No.8	136-2
11	石製品	敲石	長さ16.0	幅3.6	厚さ3.1	重さ274.0	石材	砂岩			153-2
12	石製品	砥石	長さ4.0	幅2.9	厚さ2.0	重さ2.7	石材	軽石			153-2
13	その他	貝製穴開貝殻	長さ3.8	幅2.0	厚さ1.9	重さ10.57					
14	鉄製品	刀子	長さ3.4	幅1.6	厚さ0.2	重さ2.26					149-8
15	鉄製品	刀子	長さ2.6	幅1.9	厚さ0.2	重さ3.40					149-8

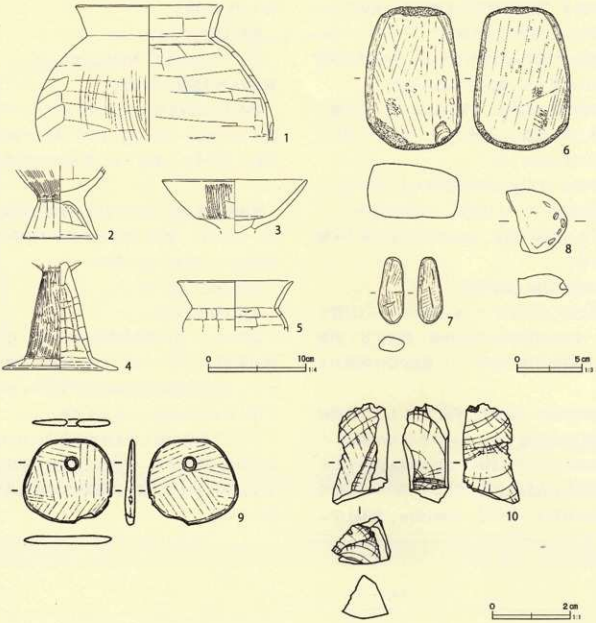
第297号住居跡（第344・345図）

調査区の北側東寄り、M・N－60・61グリッドに位置する。第298号住居跡、第24・25号墳、第100号溝跡と重複する。東側1ｍに第260号住居跡、南東側2ｍに第305号住居跡、南西側2ｍに第259号住居跡がある。

重複遺構によって本住居跡の確認は極めて困難で、掘り込みも浅く、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。平面形は方形と推定される。主軸方向はN－63°－



第344図　第297号住居跡



第345図　第297号住居跡出土遺物

第145表　第297号住居跡出土遺物観察表（第345図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	14.9	14.0	—	AEIJ	70	不良	灰黄褐	No.5・6	
2	土師器	台付甕	—	7.5	7.6	AEHIK	50	普通	にぶい黄橙	二次被熱・赤化　No.3・5	
3	土師器	高坏	15.0	5.4	—	AEHIJK	70	普通	にぶい黄橙	風化顕著　No.1	
4	土師器	高坏	—	10.9	11.7	ADEGHIJK	70	普通	浅黄橙	No.5・6	
5	土師器	鉢	(11.9)	5.1	—	ABEHIK	20	普通	橙	風化　No.4	
6	石製品	敲石	長さ10.0　幅7.4　厚さ4.5　重さ601.5　石材　閃緑岩							No.7	153-2
7	石製品	砥石	長さ5.1　幅2.0　厚さ1.2　重さ18.1　石材　緑色岩								
8	その他	貝塚穴鹿泥岩	長さ4.8　幅3.6　厚さ1.7　重さ33.19							被熱	
9	石製品	垂飾	長さ2.2　幅2.3　厚さ0.3　重さ2.2　石材　結晶片岩							No.2　穿穴有り	151-4
10	石製品	管玉未製品	長さ2.6　幅1.5　厚さ1.2　重さ3.3　石材　緑色凝灰岩							形割	151-9

Eを指す。規模は残存する部分で、長軸7.86m、短軸7.73m、深さ7.2cmを測る。

施設は炉跡のみの検出であった。住居跡の西壁寄りに位置する。推定径73.2cmを測る。

遺物の出土状況は、炉跡周辺から壺・台付甕・高坏・鉢を検出し、南西コーナー付近から高坏と有孔円板を検出した。

遺物は、1が直口壺で胴部は大きく張りをもつ。2は台付甕、3・4は高坏、5は鉢である。

9は石製品の垂飾、10は緑色凝灰岩の管玉未製品である。

第298号住居跡（第346図）

調査区の南側東寄り、N－60グリッドに位置する。第297号住居跡、第25号墳と重複する。西側1mに第24号墳、南西1mに第259号住居跡がある。

確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。平面形は第297号住居跡・第25号墳と重複するため判然としない。主軸方向はN－28°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸4.92m、短軸1.57m、深さ10.2cmを測る。

施設は検出できなかった。

図示できる遺物は、検出されなかった。

第299A号住居跡（第347図）

調査区の北側東寄り、L－59・60グリッドに位置する。第135・251・261・262・299B・300号住居跡と重複する。南側1mに第134号住居跡がある。

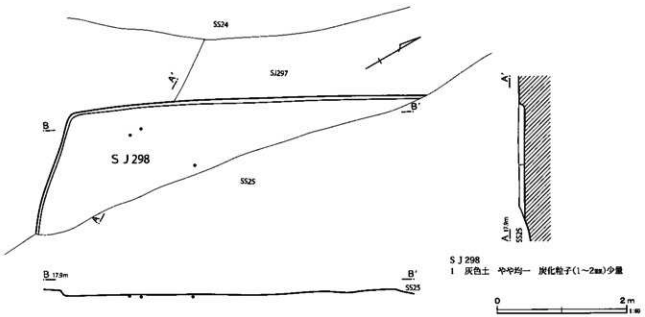
平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－37°－Wを指す。規模は残存する部分で長軸5.05m、短軸2.70m、深さ11.4cmを測る。

施設は検出できなかった。

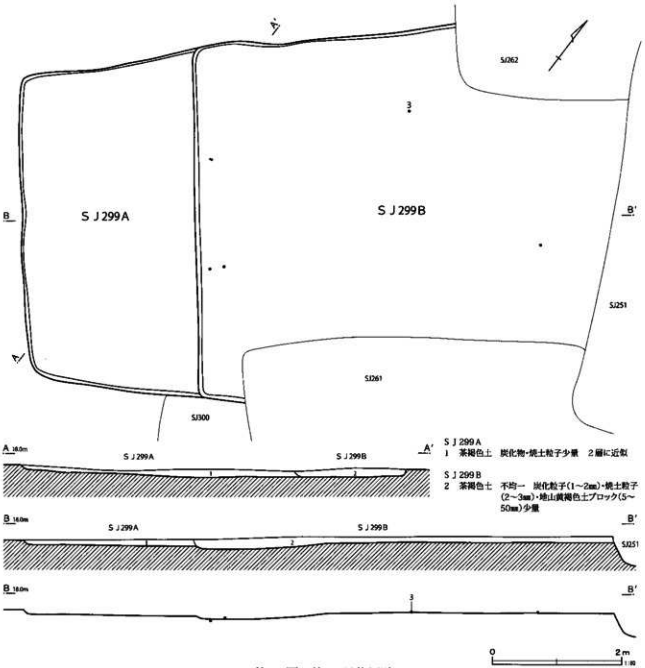
遺物は検出されなかった。

第299号A・B住居跡は軸を同じくし、住居全体が東側にスライドする。北壁と南壁を一部共有する。A号住居跡の西壁は東側に約2.70m移動して建て替えが行われているようである。

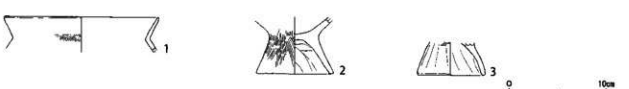
こうした形態の建て替えは本集落内において初めての検出例である。床面は、第299A号住居跡を少し掘り下げて、新たに第299B号住居跡を構築している。



第346図　第298号住居跡



第347図 第299号住居跡



第348図 第299号住居跡出土遺物

第146表 第299号住居跡出土遺物観察表（第348図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(15.8)	3.6	—	CEIK	10	普通	明赤褐		
2	土師器	台付甕	—	5.8	(7.4)	EIK	45	普通	灰白		
3	土師器	台付甕	—	3.3	7.0	AEHIK	80	良好	明赤褐	No1	

第299B号住居跡（第347・348図）

調査区の北側東寄り、L－59・60グリッドに位置する。第135・251・261・262・299A・300号住居跡と重複する。南側1mに第134号住居跡がある。

平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－53°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸6.43m、短軸5.58m、深さ12.6cmを測る。掘り込みの浅い住居跡で西側の第299A号住居跡を切り込んでいる。床面の高さは第299A号住居跡に比べ、本住居跡がわずかに低い。床面はやや凹凸が見られた。低い部分の床面には砂が堆積していた。おそらく洪水起源と考えられる砂である。中央部分で床面は明瞭にとらえられたが、周辺部分では床面は不明瞭で、住居跡プランを確定するのが難しかった。

施設は検出されなかった。

遺物は、覆土中から少量、床面から甕の破片などを検出した。また、住居跡北壁付近と東側から台付甕の台部をそれぞれ検出した。

第300号住居跡（第349図）

調査区の北側東寄り、L－60グリッドに位置する。第134・135・261・289・299号住居跡と重複する。

平面形は重複遺構がある為、判然としない。主軸方向はN－29°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸2.28m、短軸1.56m、深さ9.0cmを測る。

施設は炉跡のみの検出であった。北西コーナーに近い位置である。推定径36.0cm、深さ3.6cmを測る。

遺物は、検出されなかった。

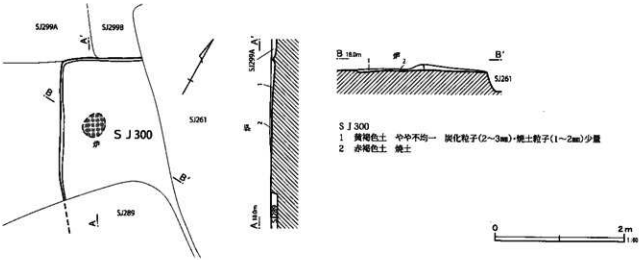
第301号住居跡（第330・331・350図）

調査区の中央東寄り、U－60・61グリッドに位置する。第171・290号住居跡と重複する。周辺の重複する遺構の間に検出された住居跡である。

平面形は不明である。規模は残存する部分で、長軸1.73m、短軸0.85m、深さ21.0cmを測る。床面はわずかに残存し、平坦である。

施設は検出できなかった。

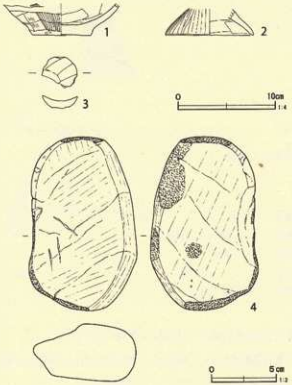
遺物は唯一確認できた西壁際から1の壺の破片、



第349図　第300号住居跡

第147表　第301号住居跡出土遺物観察表（第350図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	－	3.4	6.1	AEHIJK	100	普通	明赤褐	No.1・2・7・9	
2	土師器	高坏	－	2.7	9.0	AEGHIKM	95	普通	橙	風化顕著　No.3・8	
3	土師器	台付甕	－	1.3	－	AEGHI	80	普通	にぶい橙	No.6	
4	石製品	敲石	長さ13.3	幅8.3	厚さ4.7	重さ855.2	石材	砂岩		No.5	153-2



第350図　第301号住居跡出土遺物

2の高坏の脚部、3の台付甕の台部破片を検出した。4は敲石である。

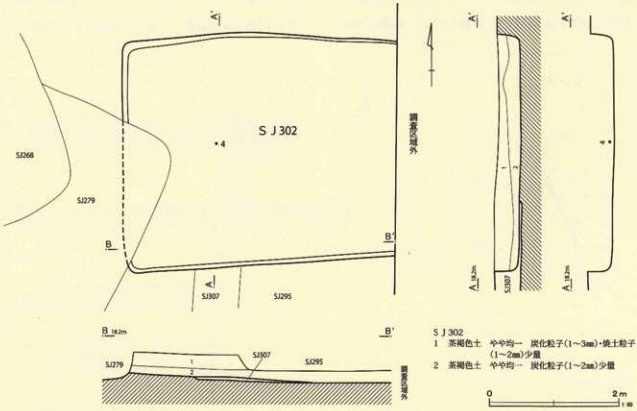
第302号住居跡（第351・352図）

調査区の北側東寄り、K・L－62グリッドに位置する。第279・295・307号住居跡と重複する。西側2mに第268号住居跡、南側1m内に第278号住居跡、北側1mに第272号住居跡がある。東側は調査区域外にかかる。

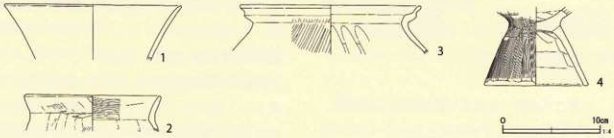
平面形は長方形と推定される。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は残存する部分で、長軸4.26m、短軸3.56m、深さ36.0cmを測る。床面はやや凹凸が見られる。本住居跡の一部の下面には第307号住居跡が存在する。

施設は検出できなかった。

遺物は、1が壺の口縁部破片、2は小型甕の口縁部、3はS字状口縁甕、4は台付甕の台部破片である。



第351図　第302号住居跡



第352図　第302号住居跡出土遺物

第148表　第302号住居跡出土遺物観察表（第352図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	(18.2)	5.6	—	AEGHIK	10	普通	にぶい橙	風化顕著	107-6
2	土師器	小型甕	(13.8)	3.7	—	CEHIK	10	普通	にぶい黄橙		
3	土師器	台付甕	(18.4)	4.9	—	AEHIK	5	普通	橙	S字甕	
4	土師器	台付甕	—	8.0	10.6	CEIK	85	普通	明赤褐	№1	

第303号住居跡（第353・354図）

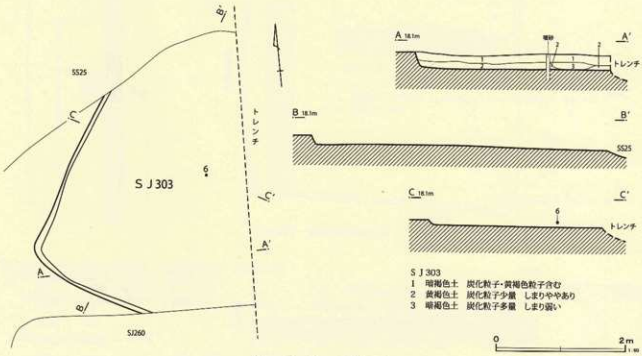
調査区の北側東寄り、M－61グリッドに位置する。第260号住居跡、第25号墳と重複する。

確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。平面形は重複遺構、トレンチに壊されているため判然としない。主軸方向はN－31°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸4.57m、短軸3.00m、深さ23.4cmを測る。床面は平坦である。

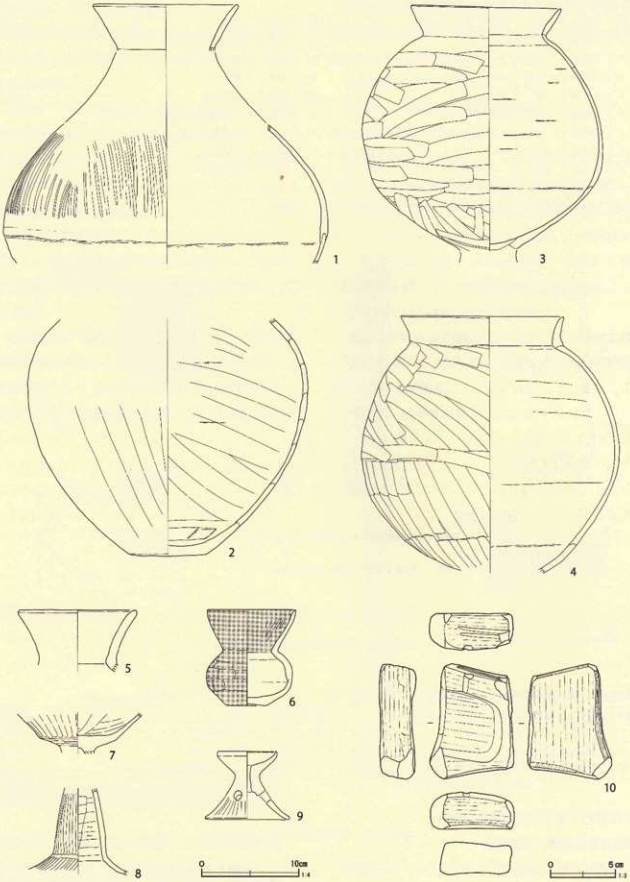
断面観察から、地山から吹きあがった噴砂が覆土全体を貫いていることが判明した。

施設は検出できなかった。

遺物は、1が大型壺の上半破片、2は胴部球形に膨む壺、3は胴部に張りのある台付甕である。6は赤彩された坩である。7・8は高坏である。8は円柱状の脚部で、端部が屈曲して外反する。



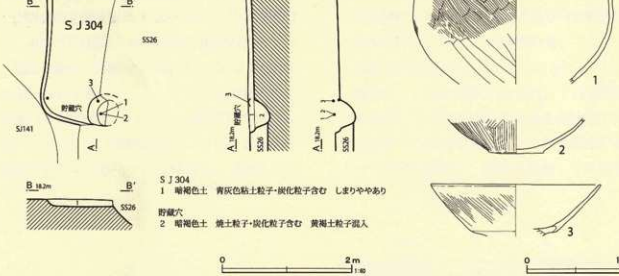
第353図　第303号住居跡



第354図　第303号住居跡出土遺物

第149表　第303号住居跡出土遺物観察表（第354図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	壺	15.0	—	—	AGI	20	普通	にぶい褐	M61G	
2	土師器	壺	—	24.2	8.0	AEGHI	20	不良	黄褐		
3	土師器	台付甕	15.2	25.0	—	AEG	70	普通	黒褐		
4	土師器	甕	16.7	26.3	—	EGJ	60	普通	にぶい黄褐		113-6
5	土師器	壺	(12.0)	6.3	—	EHIJ	10	普通	にぶい黄橙	胎土粗雑　小石多	
6	土師器	坩	(9.2)	9.8	4.1	G	70	普通	にぶい橙	赤彩　No1	138-4
7	土師器	高坏	—	4.2	—	ACHIJK	70	普通	にぶい黄褐		
8	土師器	高坏	—	8.8	—	ABCÊHI	50	良好	にぶい橙		
9	土師器	器台	(6.0)	6.9	(8.5)	EHIK	15	普通	橙	三孔	
10	石製品	砥石	長さ8.9	幅6.5	厚さ2.9	重さ217.3　石材　凝灰岩					153-2



第355図　第304号住居跡・出土遺物

第150表　第304号住居跡出土遺物観察表（第355図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	甕	16.6	17.3	—	AEHIJ	60	不良	にぶい赤褐	No2・4	114-1
2	土師器	甕	—	3.5	5.6	AC	30	普通	灰褐	No2	
3	土師器	高坏	17.6	5.3	—	ABEHI	95	普通	橙	器面磨滅　No1	

9は器台である。10は砥石である。

第304号住居跡（第355図）

調査区の中央東寄り、U－61グリッドに位置する。第141号住居跡、第26号墳と重複する。北2mに第187号住居跡、南2mに第143号住居跡がある。

掘り込みが浅く、西壁から南北壁の一部を確認した。東側を第26号墳に切られ、ほぼ半分残存するため平面形は方形と推定する。主軸方向はN－0°を指す。規模は残存する部分で、長軸2.79m、

短軸0.99m、深さ12.0cmを測る。

施設は貯蔵穴のみの検出であった。南壁に沿って半分残った形で検出した。推定径48.0cm、深さ74.4cmを測る。

遺物は、貯蔵穴周辺から出土している。1は胴部が球形に張りをもつ甕である。口縁部は「く」の字状に外方へ開いて立ち上がる。2は甕底部、3は高坏の坏部である。

第305号住居跡（第356図）

調査区の北側東寄り、N・O−61グリッドに位置する。第25号墳と重複する。北側2mに第297号住居跡、北側2mに第100号溝跡が北西から南東に走る。

確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。東側の壁の立ち上がりは地山との差が明瞭でなく覆土のわずかな色の差で判断した。平面形は歪んだ方形である。主軸方向はN−56°−Eを指す。規模は長軸3.24m、短軸3.06m、深さ30.0cmを測る。床面はやや南側が低くなっていた。

施設は検出できなかった。

遺物は、有稜高坏の脚部を検出した。

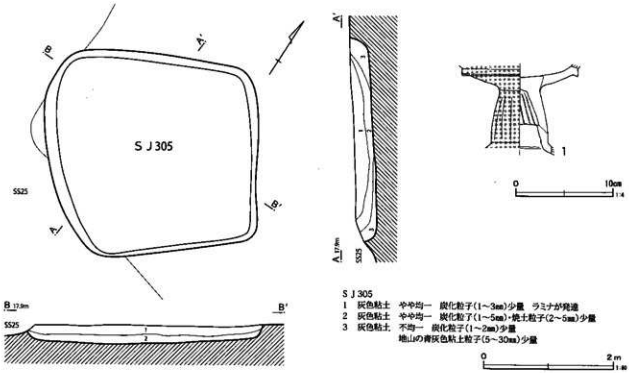
第306号住居跡（第357図）

調査区の北側東寄り、L・M−61グリッドに位置する。第289号住居跡、第25号墳と重複する。

平面形は方形と推定される。主軸方向はN−17°−Eを指す。規模は残存する部分で、長軸4.80m、短軸2.94m、深さ18.0cmを測る。北壁から東壁、南壁を検出し、西壁は第289号住居跡によって壊されている。床面は平坦である。

施設は炉跡のみの検出であった。ほぼ中央より、東側に位置し、楕円形と推定される。推定径45.0×60.0cmを測る。

遺物は、検出されなかった。

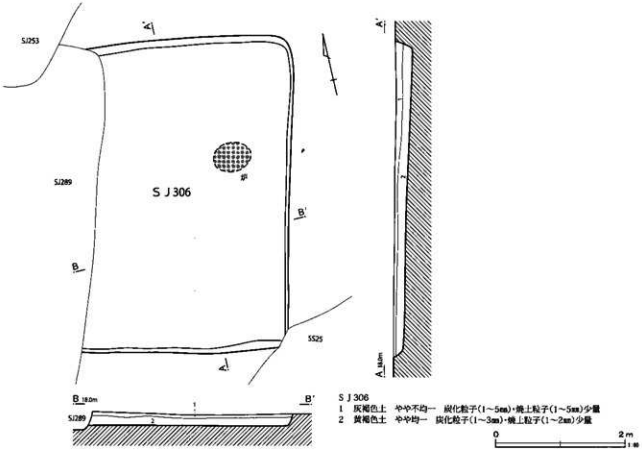


S J 305
1　灰色粘土　やや均一　炭化粒子(1～3mm)少量　ラミナが発達
2　灰色粘土　やや均一　炭化粒子(1～5mm)・焼土粒子(2～5mm)少量
3　灰色粘土　不均一　炭化粒子(1～2mm)少量
　　地山の青灰色粘土粒子(5～30mm)少量

第356図　第305号住居跡・出土遺物

第151表　第305号住居跡出土遺物観察表（第356図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高坏	—	9.3	—	AEHIK	60	普通	にぶい橙	赤彩 N60G	



第357図　第306号住居跡

第307号住居跡（第358・359図）

調査区の北側東寄り、L－62グリッドに位置する。第295、302号住居跡と重複する。西1mに第279号住居跡、南1mに第278号住居跡がある。東側は調査区域外にかかる。本住居跡は連続する住居跡の重複関係の中で下位にあたる。上位にあたる住居跡は順に第302・279・277・285号住居跡で、第302号より第295号が上位関係で、第279号より第268号が上位関係であることが切りあいから把握することができる。

平面形は長方形である。主軸方向はN－5°－Eを指す。規模は残存する部分で、長軸5.43m、短軸3.18m、深さ39.0cmを測る。住居跡床面はわずかに全体が不規則で凹凸が見られる。

施設は検出できなかった。

遺物は、1が甕の破片を西壁際から検出した。緩やかにくの字状に開く口縁で、外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメを施している。2が緑色凝灰岩の形割された管玉未製品である。

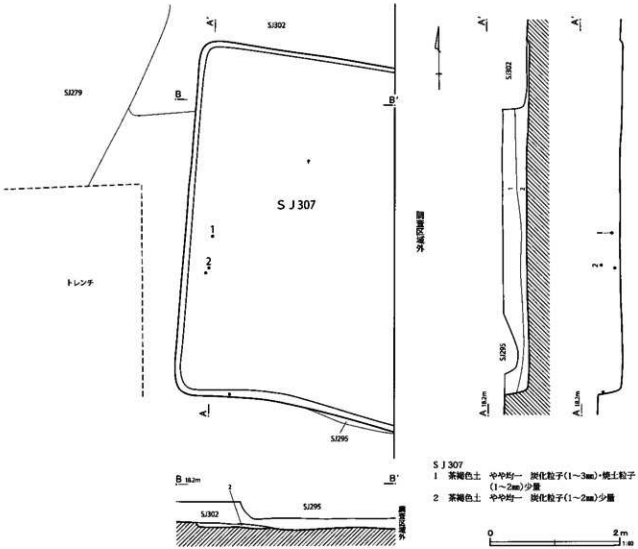
第308号住居跡（第360～362図）

調査区の北側東寄り、J・K－60・61グリッドに位置する。第251号住居跡と重複する。東側2mに第272号住居跡がある。

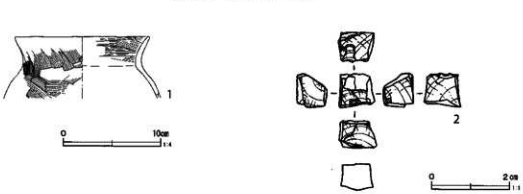
平面形は長方形である。主軸方向はN－90°－Wを指す。規模は長軸7.08m、短軸5.94m、深さ40.2cmを測る。確認は極めて困難で、平面プランおよび住居跡床面の検出が難しく、トレンチを入れ確認した。住居跡の覆土は地山との境を検出するのが困難であった。床面は、一部に炭化物を検出したため、捉えることができた。

遺物は、9の甕が北壁際から検出した。また、東壁南側付近で、一括投棄された状態の土器群を検出した。

遺物は、1～8が壺、9～15は甕ある。10は受



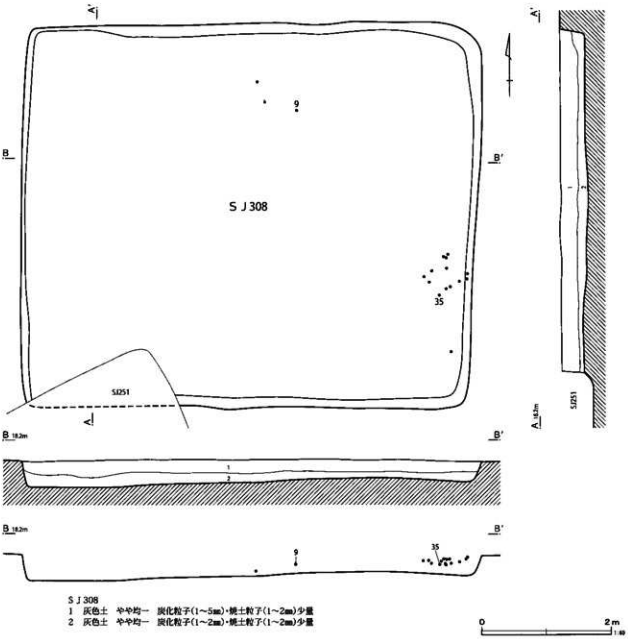
第358図　第307号住居跡



第359図　第307号住居跡出土遺物

第152表　第307号住居跡出土遺物観察表（第359図）

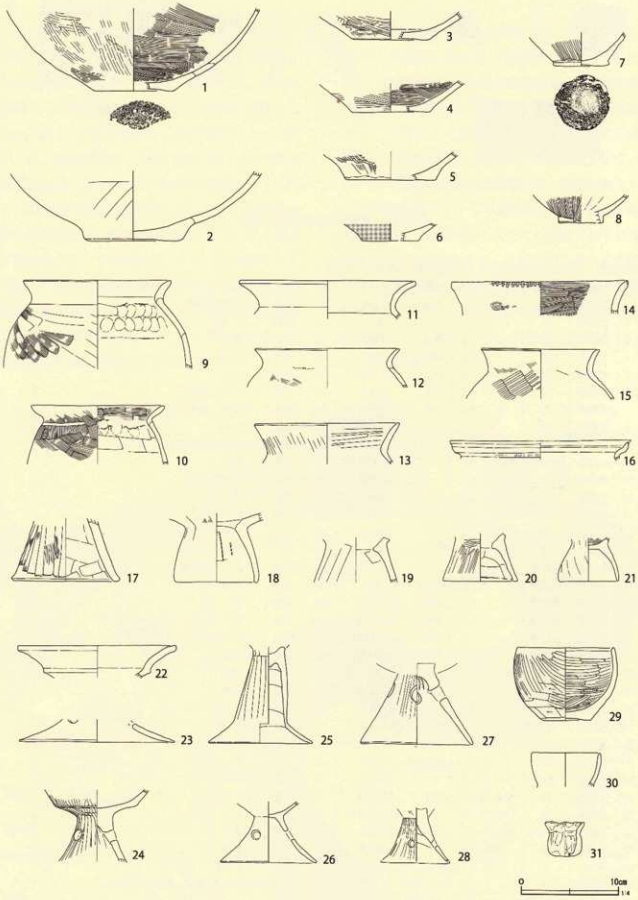
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(13.6)	6.3	―	EHI	25	普通	にぶい褐	No.1	
2	石製品	管玉未製品	長さ0.9	幅0.9	厚さ0.7	重さ0.6　石材　緑色凝灰岩				No.3　形制	151-11



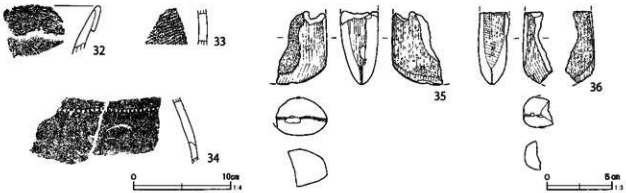
第360図　第308号住居跡

け口状口縁甕、14は口唇部にキザミを施す。15は叩き甕の口縁である。16はS字状口縁甕、17～21は台付甕の台部である。17は「ハ」の字状に外反する。18・21は内湾する。20は脚端部に面をもつ。22～25は高坏である。

26～28は高坏で、大きさに大・中・小がある。30は坩、31は手づくね土器である。32は緩やかに外反する複合口縁の壺である。口縁部以下無文である。33は壺の胴部である。ＬＲ単節縄文を施文している。34は壺の胴部である。上半に工具による刺突列が廻る。器面全体は無文で赤彩されている。35・36は磨製石斧である。



第361図　第308号住居跡出土遺物（1）



第362図　第308号住居跡出土遺物（2）

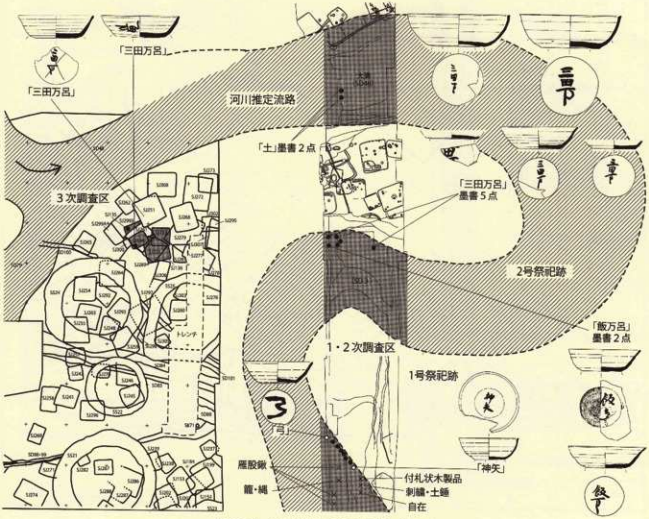
第153表　第308号住居跡出土遺物観察表（第361・362図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	8.5	(8.0)	CJM	20	普通	にぶい黄褐	輪台	
2	土師器	壺	—	7.1	10.1	EJ	75	普通	にぶい褐		
3	土師器	壺	—	2.9	(8.0)	ACJ	20	普通	橙		
4	土師器	壺	—	2.9	(8.0)	AJ	45	普通	にぶい褐		
5	土師器	壺	—	2.9	(9.2)	ADEHJ	15	普通	浅黄		
6	土師器	壺	—	1.8	(5.8)	EH	20	普通	にぶい橙	赤彩	
7	土師器	壺	—	4.0	5.8	AI	70	普通	浅黄橙	輪台	
8	土師器	壺	—	2.9	(4.6)	BEHIK	20	普通	にぶい橙		
9	土師器	甕	(15.0)	9.0	—	BCEHIK	35	普通	にぶい赤褐	器面磨滅　№2	
10	土師器	小型甕	(13.1)	6.0	—	IK	25	普通	橙		
11	土師器	甕	(18.0)	3.9	—	EHIK	10	普通	にぶい赤褐		
12	土師器	甕	(14.8)	4.0	—	IK	20	普通	橙		
13	土師器	甕	(14.6)	4.1	—	HIK	25	普通	橙		
14	土師器	甕	(18.0)	3.4	—	ACE	10	普通	灰黄褐	口縁キザミ	
15	土師器	甕	(6.0)	5.1	—	ACEHIK	40	普通	灰褐	叩き甕	107-3
16	土師器	台付甕	(18.6)	2.0	—	ACEK	10	普通	橙	S字甕	
17	土師器	台付甕	—	6.4	(10.7)	AJ	30	普通	にぶい橙		
18	土師器	台付甕	—	5.0	(8.0)	AEIK	60	普通	橙		
19	土師器	台付甕	—	4.9	(8.6)	AEHIK	50	普通	橙		
20	土師器	台付甕	—	4.8	(7.6)	ACEHIK	50	普通	にぶい橙		
21	土師器	台付甕	—	4.5	6.0	EHIK	85	普通	明赤褐		
22	土師器	高坏	(16.2)	3.3	—	EHI	10	普通	浅黄橙		
23	土師器	高坏	—	2.3	(8.0)	AEHJ	30	普通	浅黄橙		
24	土師器	高坏	—	7.3	—	AEHIK	40	普通	にぶい橙	三孔	
25	土師器	高坏	—	9.9	(10.6)	ABEGHIK	45	普通	にぶい橙		
26	土師器	高坏	—	6.2	(10.0)	ACIK	30	普通	にぶい黄橙	三孔か	
27	土師器	高坏	—	8.2	(11.4)	EHI	45	普通	橙	四孔	
28	土師器	高坏	—	5.6	—	AEIJ	80	普通	浅黄橙	三孔	
29	土師器	鉢	10.0	7.3	5.0	ACJM	75	普通	にぶい橙		123-4
30	土師器	坩	(7.4)	3.5	—	ACEHIK	40	普通	橙		
31	土師器	手づくね	(3.8)	3.5	(1.9)	EIKL	50	普通	浅黄橙		126-8
32	土師器	壺	—	3.7	—	AHIK	5	普通	浅黄橙		
33	弥生	壺	—	2.7	—	ACHI	5	普通	にぶい橙		
34	土師器	壺	—	5.0	—	AEH	5	普通	にぶい黄橙	赤彩　刺突痕　K61G	
35	石製品	磨製石斧	長さ5.7	幅4.0	厚さ2.9	重さ73.9	石材	凝灰岩			153-2
36	石製品	磨製石斧	長さ5.1	幅2.3	厚さ2.4	重さ30.3	石材	凝灰岩			

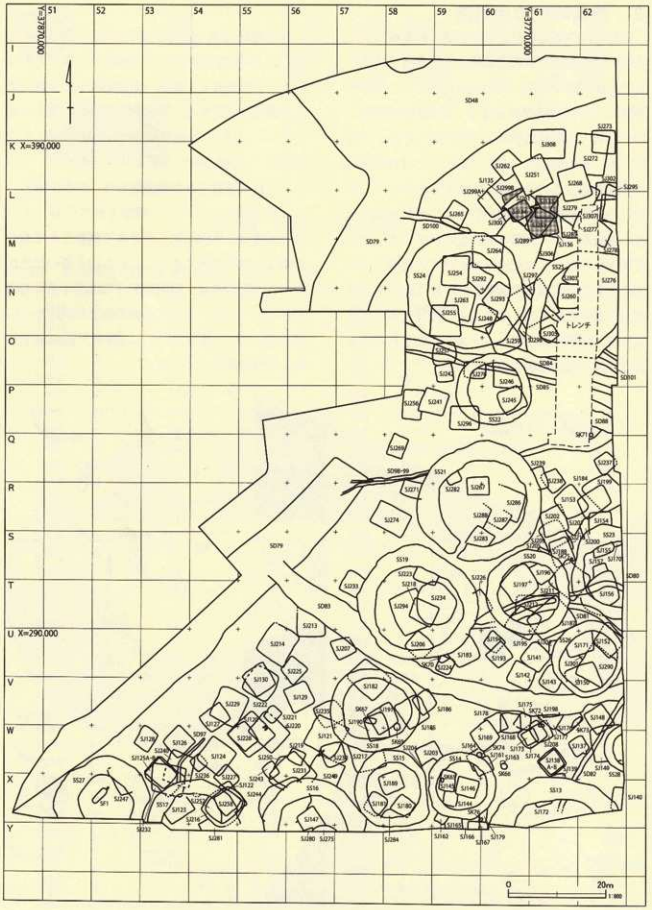
3．奈良時代の住居跡

奈良時代の集落は、竪穴住居跡4軒を検出した。4軒の住居跡は、調査区北側にまとまって検出された。住居跡の北側、約10mの位置には、第48号溝跡とした河川跡が東流する。住居跡は第133・134・135・136号住居跡の4軒が重なりあって検出され、新旧関係は、136<135<133<134の順に新しくなる。このうち第135号住居跡から「三田万」の墨書土器2点を検出した。いずれも南比企産の須恵器坏で、底部外面に記されている。鳩山Ⅳ期と見られ、8世紀後半にかけての時期である。また、第134号住居跡の覆土からも「三田万」の墨書土器を検出した。こちらも、南比企産の須恵器坏で、底部外周回転ヘラケズリが施される。墨書は体部外面に横書きされている。

反町遺跡の第1・2次調査でも「三田万」と「飯万」の墨書土器が第3号溝跡から検出されている。今回調査した集落の東側約50mの位置に第3号溝跡は位置する。この第3号溝跡の覆土上面から「三田万」と墨書された須恵器坏が5点、「飯万」と墨書された須恵器坏が2点出土している。これら墨書された須恵器坏は、底部全面もしくは外周回転ヘラケズリ調整されている。また、須恵器埦は、外周回転ヘラケズリ調整されており、時期は8世紀中葉である。これらの土器の出土状況から、報告者は、河川祭祀として捉え第2号祭祀跡としている。さらに南側の第36号溝跡からは雁股鏃3点、「神矢」「弓」の墨書土器が出土し、第1号祭祀跡としている。



第363図　反町遺跡墨書土器出土分布図



第364図　反町遺跡３次全体図（奈良時代住居跡）

第133号住居跡（第365～367図）

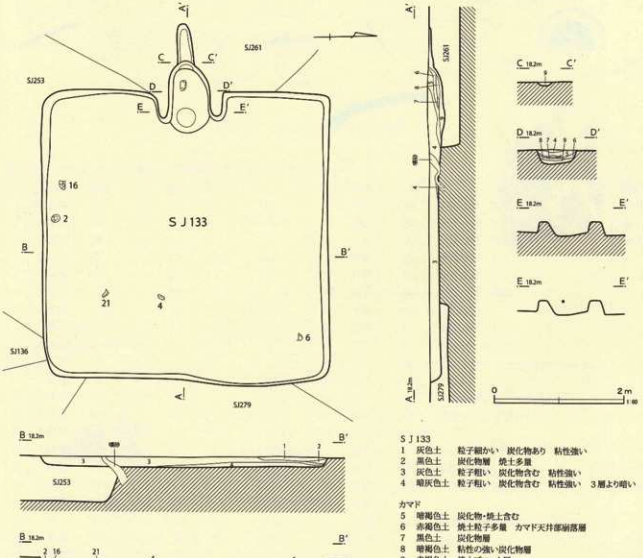
調査区の北側東寄り、L－61グリッドに位置する。第253・261・279号住居跡と重複する。

平面形は長方形である。主軸方向はN－88°－Wを指す。規模は長軸5.49m、短軸4.50m、深さ43.80cmを測る。床面は平坦である。第136号住居跡と重複するが、ほとんど床面が同じ高さであることから、平面の切り合いで確認された。

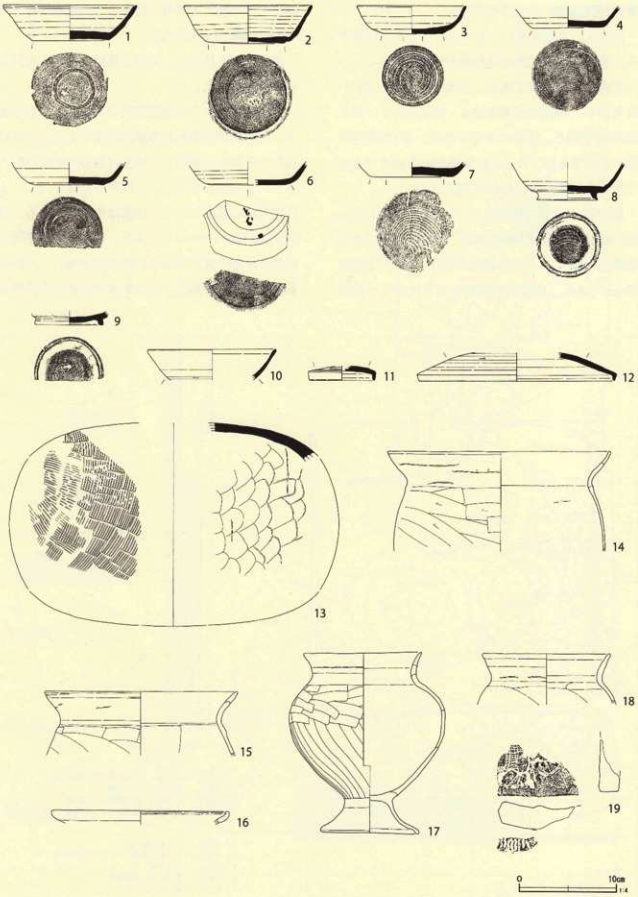
施設はカマドを検出した。カマド全長1.65m、焚口幅0.64m、燃焼部幅0.64m、深さ19.5cmである。燃焼部は膨らみを持ち掛け口部分の深さは推定25.0cmである。両壁は直線的に立ち上がり、奥壁は壁ができ煙道との境に段をもつ。煙道部の全長0.64m、幅0.24mを測る。

遺物の出土状況は、南壁と東壁に近接した位置から破片が出土した。

遺物は、1～7が須恵器坏である。いずれも胎土に白色針状物質を含み南比企産である。ロクロ目のやや細かい整形で、底部外面の外周は回転ヘラケズリを施している。1はやや器高が浅く、上げ底気味の底部である。体部はやや外反する。底部全面回転ヘラケズリである。2は器壁やや薄く、底部と体部の腰に糸切りの際の段が残る。外周回転ヘラケズリである。3は平底の底部から体部が



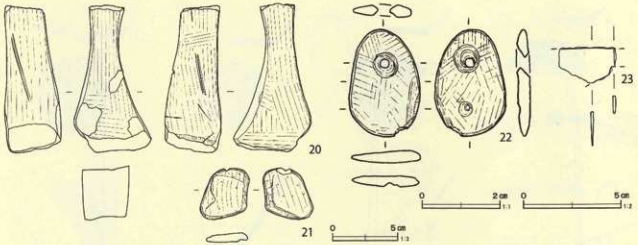
第365図　第133号住居跡



第366図　第133号住居跡出土遺物（1）

やや短く、内湾して外側に立ち上がる。口唇部はやや膨らみ外反する。底部中央にヘラ起しを残し外周回転ヘラケズリを施す。4・5は糸切り後外周回転ヘラケズリを施す。6の底部外面に墨痕が見られる。7の底部外面には、判読不明だが墨痕が見られる。8・9は高台付坏である。11は壺蓋である。12は蓋である。13は横瓶である。14・15は「く」の字状口縁の土師器甕である。調整は口縁部横ナデ、胴部外面は斜め方向のヘラ削りを施す。

17・18は小型台付甕である。19は平瓦の破片、成形は凸面に縄叩き、凹面は布目である。20・21は砥石、22は石製品の垂飾である。23は不明鉄製品である。



第367図　第133号住居跡出土遺物（2）

第154表　第133号住居跡出土遺物観察表（第366・367図）

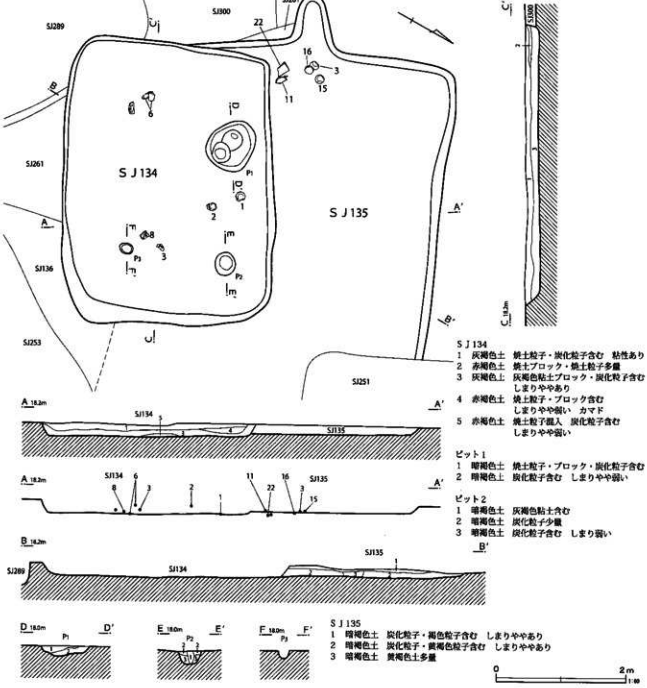
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	13.9	3.6	8.0	AJ	70	普通	白灰	南比企産　SJ253	146-6
2	須恵器	坏	13.0	3.9	8.1	EHIJK	100	良好	灰	南比企産　№2	146-7
3	須恵器	坏	11.2	2.8	6.4	J	70	普通	灰	南比企産　SJ253	146-8
4	須恵器	坏	－	2.1	7.3	AJ	5	普通	灰	南比企産　№4	
5	須恵器	坏	－	2.3	7.4	J	10	普通	灰	南比企産　№5	
6	須恵器	坏	－	2.4	7.9	DEIJK	30	良好	灰	南比企産　墨痕	
7	須恵器	坏	－	1.5	8.5	EHIJK	80	不良	灰白	南比企産	
8	須恵器	高台付坏	－	3.8	6.3	EJK	50	良好	灰	南比企産	
9	須恵器	高台付坏	－	1.4	7.1	IK	55	良好	灰	湖西産　転用硯	
10	須恵器	坏	(13.2)	3.1	－	HIJK	20	良好	灰	南比企産	
11	須恵器	蓋	6.6	1.4	－	IJK	60	良好	灰褐	SJ134	
12	須恵器	蓋	(20.0)	2.9	－	EIJK	10	良好	灰	南比企産	
13	須恵器	横瓶	－	4.0	－	EHIJK	10	普通	灰	南比企産　SJ253	
14	土師器	甕	(22.9)	10.2	－	AHIJ	30	普通	にぶい橙		
15	土師器	甕	(19.6)	6.6	－	ACEGHIK	25	普通	にぶい橙	№1	
16	土師器	甕	(17.8)	1.3	－	CEHI	5	普通	灰白	№5　SJ253	
17	土師器	小型台付甕	12.0	18.4	9.9	GHI	60	普通	橙	二次被熱　SJ253	104-2
18	土師器	小型台付甕	(13.1)	5.2	－	CEGI	25	普通	橙		
19	瓦	平瓦	長さ5.2　幅7.8　厚さ2.1			IJK	25	普通	灰白	模骨痕　桶巻造り	
20	石製品	砥石	長さ11.4　幅5.9　厚さ4.3　重さ275.0　石材　凝灰岩							№3	152-1
21	石製品	砥石	長さ3.9　幅3.9　厚さ0.9　重さ13.6　石材　砂岩								151-2
22	石製品	垂飾	長さ2.7　幅1.8　厚さ0.4　重さ2.6　石材　滑石								
23	鉄製品	不明品	長さ2.9　幅1.7(最大)　厚さ0.15(最大)　重さ2.87							刃物か	

第134号住居跡（第368・369図）

調査区の北側、L－60グリッドに位置する。北側に第135号住居跡、南側に第136号住居跡、西側に第289・300号住居跡、本住居跡の下層に第253・261号住居跡が重複する。

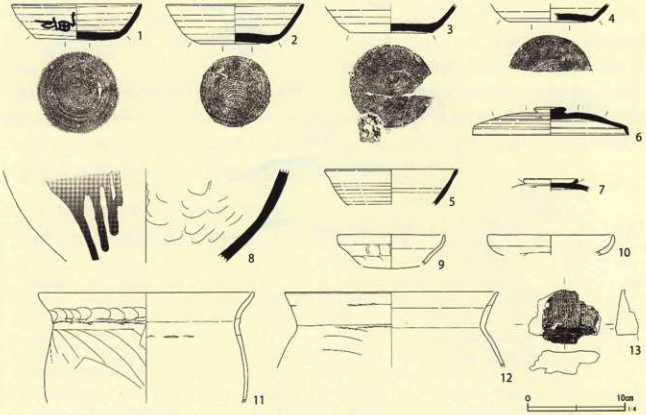
平面形は長方形である。主軸方向はN－60°－Eを指す。規模は長軸4.35m、短軸3.23m、深さ20.0cmを測る。床面は貼り床が施され、平坦である。断面観察では、北側に赤褐色土が浅く堆積し、カマドの崩落した残載土と思われ、北側のカマドが構築されていたと判断された。

施設はカマドの崩落土とピット3基を検出した。カマドの規模は不明である。ピットは、径20.0～80.0cm、深さ11.0～20.0cmを測る。



第368図　第134・135号住居跡

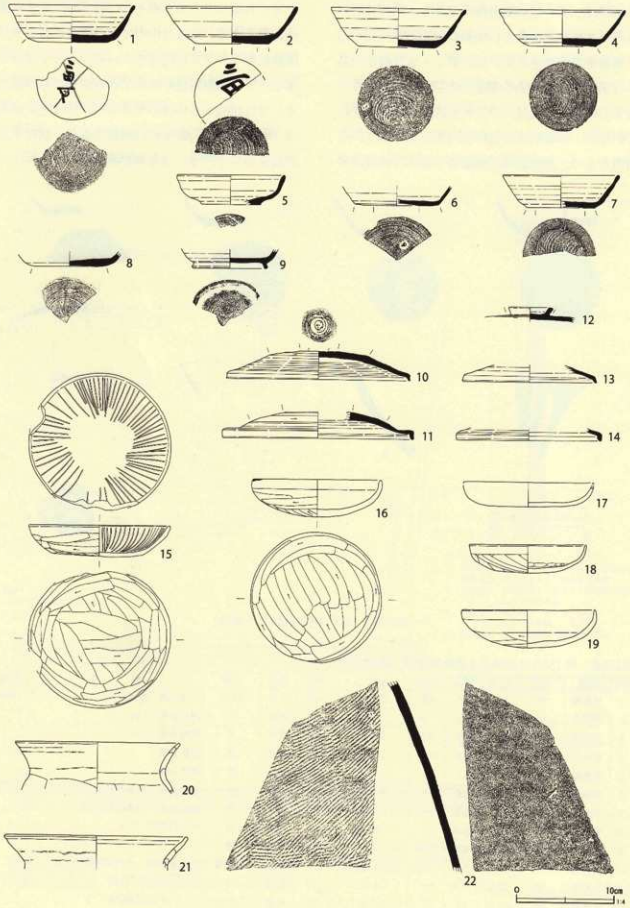
遺物は、1～5が須恵器坏である。底部外周回転ヘラケズリである。1の体部外面には「三田万」と横書きで墨書されている。第1・2次調査の第3号溝跡や今回報告の第135号住居跡出土の「三田万」の墨書土器は、いずれも底部外面に記されていたが、本資料だけは体部外面に記されている特徴をもつ。須恵器坏は底部やや厚く、体部はやや短く外傾して立ち上がる。口唇部がつままれ器肉を薄くする。底部は中心にヘラ切りが残り、外周回転ヘラケズリが施されている。6・7は蓋である。8は須恵器甕の破片で器面に自然釉が流れる。9は屈曲する体部の坏である。10は北武蔵型坏、11・12は「く」の字状口縁甕である。13は平瓦の端面破片で凹面には布目が残る。



第369図　第134号住居跡出土遺物

第155表　第134号住居跡出土遺物観察表（第369図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	13.4	3.5	8.2	CEHJ	90	不良	灰白	南比企産　墨書　№3	146-9
2	須恵器	坏	(14.2)	4.1	7.2	J	45	良好	灰	南比企産　№4	
3	須恵器	坏	－	3.0	8.6	EIJK	60	良好	灰	産地不明　№1	
4	須恵器	坏	－	1.8	(8.6)	EHIJ	35	普通	灰	南比企産	
5	須恵器	坏	(13.5)	3.7	－	IJK	20	良好	灰	南比企産	
6	須恵器	蓋	16.0	2.9	－	EHJK	80	良好	灰	南比企産　つまみ径3.3cm	147-8
7	須恵器	蓋	－	1.3	－	DHJK	30	良好	灰	南比企産　つまみ径5.2cm	
8	須恵器	甕	－	(9.6)	－	EIK	5	良好	灰	外面自然釉　№2	
9	土師器	坏	11.0	3.1	－	CI	20	普通	橙		
10	土師器	坏	(12.8)	2.1	－	AHI	5	普通	明赤褐	北武蔵型坏　内外面磨滅	
11	土師器	甕	22.0	11.3	－	AHI	15	普通	にぶい橙	「く」の字状口縁甕	
12	土師器	甕	(21.7)	7.7	－	ACHI	30	普通	にぶい橙	「く」の字状口縁甕	
13	瓦	平瓦	長さ7.5	幅4.6	厚さ2.4	HI	5	普通	灰白	模骨痕　桶巻造り	



第370図　第135号住居跡出土遺物

第135号住居跡（第368・370図）

調査区の北側、K・L－60グリッドに位置する。南側に第134・261号住居跡、西側に第300号住居跡、東側に第251号住居跡と重複する。

平面形は方形と推定される。南壁は第134号住居跡に切られ不明である。主軸方向はN－23°－Eを指す。規模は残存する部分で長軸4.60m、短軸4.15m、深さ15.0cmを測る。

施設はカマドを検出した。カマドは西側に位置し、全長0.90m、幅0.60m、燃焼部幅0.60m、深さ15.0cmを測る。

遺物は、1～8が須恵器坏である。いずれも底部外周回転ヘラケズリである。1の底部外面には「三田万」と墨書されている。2は欠損しており、「三田□」と墨書されている。9は高台付坏、10～14は無返りの蓋である。15は暗文坏、16～19は北武蔵型坏、20・21は武蔵型甕である。22は須恵器甕の胴部破片である。外面は細かい平行叩き、内面は無文で、当て具痕が見られる。

第136号住居跡（第371・372図）

調査区の北側、L－60・61グリッドに位置する。北側に第133・134号住居跡、南側に第306号住居跡、本住居跡の下層に第253・289号住居跡が重複する。

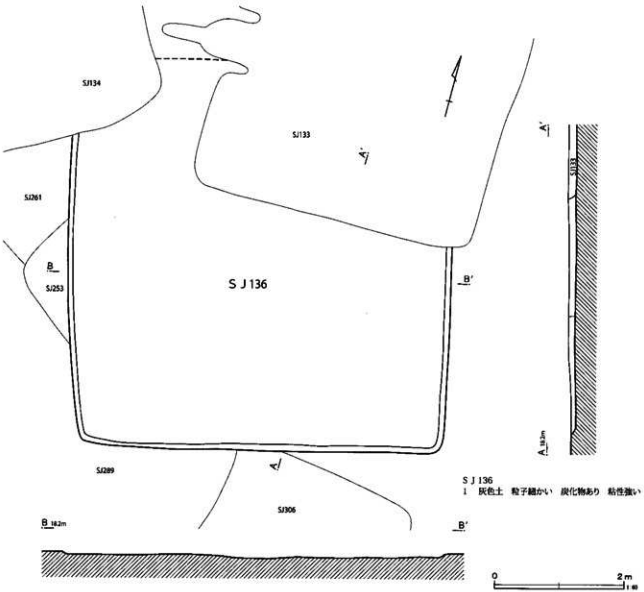
平面形は方形である。北壁は第133・134号住居跡に切られ検出できない。主軸方向はN－12°－Wを指す。規模は長軸6.00m、短軸5.90m、深さ20.0cmを測る。床面は貼り床が施され、平坦である。覆土は炭化粒子を含む細かい灰褐色の粘質土が堆積していた。

第156表　第135号住居跡出土遺物観察表（第370図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	(12.8)	3.8	(7.1)	HJ	25	普通	灰	墨書　ヘラ記号　SJ132	147-2
2	須恵器	坏	(13.4)	3.8	7.6	EIJ	30	良好	灰	墨書　SJ261	147-3
3	須恵器	坏	14.0	4.1	7.7	EHIJ	90	良好	褐灰	外周回転ヘラケズリ　No3	146-10
4	須恵器	坏	(13.0)	3.8	7.0	EIJK	45	良好	灰	南比企産　SJ261	
5	須恵器	坏	(11.0)	3.0	(6.2)	EIJ	10	良好	灰	南比企産　カマド　SJ132	
6	須恵器	坏	－	2.1	(8.7)	IJK	20	良好	灰	南比企産　SJ261	
7	須恵器	坏	(12.0)	3.3	7.0	IJ	30	良好	灰	南比企産　SJ132	
8	須恵器	坏	－	1.5	(7.7)	IJ	20	良好	灰	南比企産　SJ132	
9	須恵器	高台付坏	－	1.9	(7.8)	CEHIJ	30	良好	灰	南比企産　SJ132	
10	須恵器	蓋	(18.8)	2.9	－	EHIJ	50	普通	灰	南比企産　SJ132	
11	須恵器	蓋	(19.6)	2.7	－	AEGIJ	20	普通	灰白	南比企産　No5	
12	須恵器	蓋	－	1.5	－	CEIJ	85	良好	灰	南比企産　つまみ径4.0cm　SJ132	
13	須恵器	蓋	(13.8)	1.8	－	IJK	5	良好	灰	南比企産　SJ261	
14	須恵器	蓋	(14.8)	1.3	－	EIJK	5	良好	灰	南比企産　SJ132	
15	土師器	坏	14.4	3.3	9.3	ACEGHI	95	良好	橙	放射状暗文	144-7
16	土師器	坏	13.2	3.8	－	ACEI	100	良好	橙	北武蔵型坏　口唇部油煙付着	144-8
17	土師器	坏	－	2.2	－	AEHJ	30	普通	橙	北武蔵型坏　磨滅顕著　SJ132	
18	土師器	坏	(12.0)	2.9	－	ACDI	60	普通	にぶい橙	北武蔵型坏　SJ132	
19	土師器	坏	13.6	3.9	－	ACE	90	普通	にぶい橙	北武蔵型坏　SJ132	144-9
20	土師器	甕	(16.9)	5.1	－	ABCHI	20	普通	にぶい赤褐	武蔵型甕　SJ132	
21	土師器	甕	(18.8)	3.5	－	AHIK	10	良好	橙	武蔵型甕　SJ261	
22	須恵器	甕	－	19.3	－	EIK	5	良好	灰白	No4	

第157表　第136号住居跡出土遺物観察表（第372図）

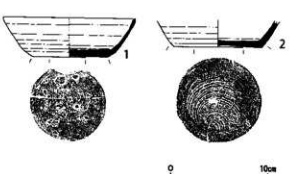
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	13.6	4.0	7.9	JK	90	良好	灰白	外周回転ヘラケズリ	147-1
2	須恵器	坏	－	2.6	9.0	AEI	70	良好	灰白	南比企産　外周回転ヘラケズリ	



第371図　第136号住居跡

施設は検出されなかった。

遺物は、1・2の須恵器坏を検出した。いずれも外周回転ヘラケズリが施されている。1は器肉の厚い平底の底部から、体部が外傾してやや内湾気味に器壁を薄くしながら立ち上がる。口唇部はやや膨らみ内傾して立ち上がる。内底部の見込みに窪みをもつ。底部外面はヘラ起しの後、外周回転ヘラケズリを施す。2は器壁やや厚く上げ底気味である。体部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部欠損。底部は糸切り後、外周回転ヘラケズリを施す。



第372図　第136号住居跡出土遺物

4．溝跡

集落の形成された台地上に、第80～101号溝跡を検出した。ただし、第86・87・89～96号溝跡は欠番としたため、12条の溝跡を調査した。

集落は、周囲を河川跡（第48・79号溝跡）に囲まれている特徴をもつ。その中にあって、集落内の溝跡は、河川跡を意識して開削されているか、否かによって性格が異なる。河川跡は、弥生時代末、古墳時代、奈良・平安時代にかけて機能し、中世以降には埋没し、遺構は途切れる。再び近世以降、溝跡が開削されるものと考えられる。

河川跡を意識して開削された溝跡には、第83号溝跡があたる。この溝跡は、覆土中の出土遺物から古墳時代中期段階のものである。また、溝跡を壊して古墳が築造されていることからこの時期には溝跡の機能が停止していたものとみられる。この溝跡と同時期のカマドをもつ古墳時代中期の住居跡が3軒存在することから、第83号溝跡は中期集落形成期に開削されたものと見ることができる。溝跡の走行方向は、弓なりに南側に貼り出しながら湾曲し、西側から東側に向かって低くなる比高差によって明らかである。

一方、河川跡を意識せず掘り込まれている溝跡は、第84・85・88号溝跡である。溝跡の走行方向は、直線的でいずれも並走する。出土遺物から中・近世と判断され、東西方向に走る地割溝跡の可能性がある。覆土は粘土質の褐色土である。

さらに、どちらとも判断の付かないやや細長く蛇行しながら走行する溝跡がある。調査区南側では、第80～82・97号溝跡である。これらの溝跡は、第79号溝跡とは接することなく調査区東側の調査区域外に伸びる。調査区北側では第98～101号溝跡である。これらの溝跡は、第79号溝跡から東側の調査区域外に伸びるが、いずれもO・P－62グリッド付近に溝跡が集まり、それぞれの溝跡が合流または、東に検出されている第38号溝跡と関連する可能性がある。

第80号溝跡（第373・374・377図）

調査区の中央東寄り、T－60～62グリッドに位置する。第156・197・211・212号住居跡、第20・23号墳と重複する。南側1ｍを第81号溝跡が並行するように走る。

走行方位はN－76°－Eを指す。規模は全長22.80ｍ、幅0.64～1.40ｍ、深さ9.7～20.0cmを測る。東西方向にやや屈曲しながらも直線的に伸びる。西から東に向かってわずかに傾斜している。

本溝跡は、いずれの遺構よりも新しく、確認面で検出された。覆土は、灰白色の粘土粒子を多く含み粘質土を主体とする。断面形態は、浅い箱型で底面は平坦である。

覆土中からは、近世の遺物を検出したが図示すべきものはなかった。この他に、1の壺、2の甕、3の砥石、4・5の敲石を検出した。

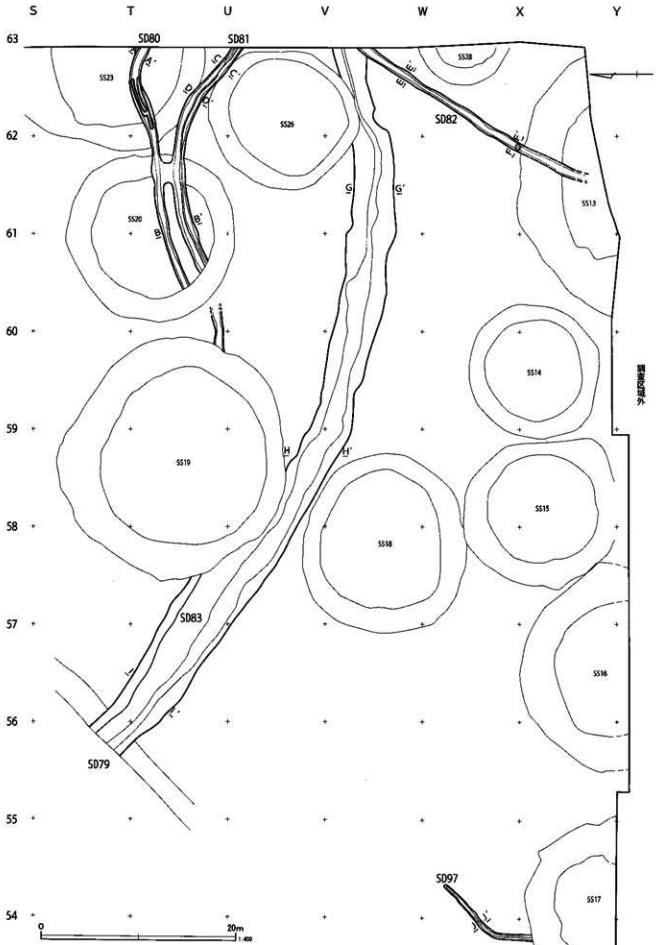
第81号溝跡（第373・374・378図）

調査区の中央東寄り、T－59～62、U－62グリッドに位置する。第152・187・195・212号住居跡、第20・23・26号墳と重複する。北側1ｍを第80号溝跡が並行するように走る。

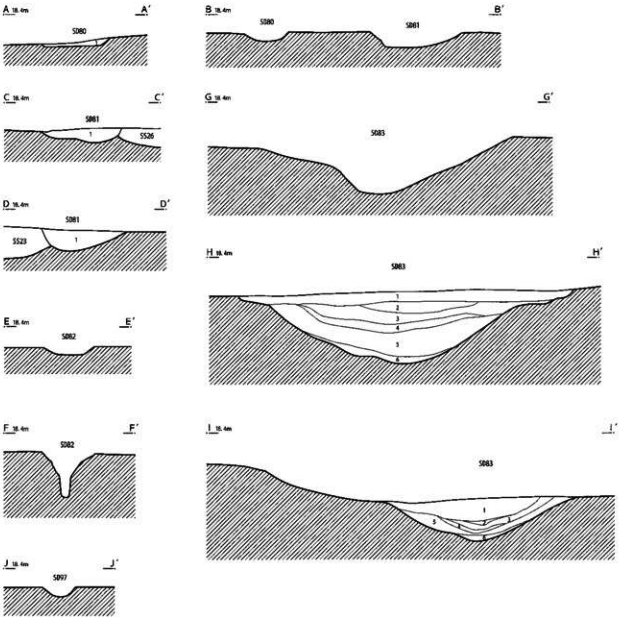
走行方向はN－74°－Eを指す。規模は全長25.52ｍ、幅0.72～1.40ｍ、深さ18.0～27.2cmを測る。東西方向にやや弓なりに伸びる。西から東に向かってわずかに傾斜している。

本溝跡は、いずれの遺構よりも新しく、確認面で検出された。北側に検出された第80号溝跡と同時期とみられる。覆土は、灰白色の粘土粒子を多く含み粘質土を主体とする。断面形態は、浅いU字型で、底面の掘り込みは凹凸が見られ、南側の掘り込みが深い部分や北側の掘り込みが深い部分があるなど一定ではない。覆土中からは、近世の遺物を検出した。

遺物は、1～11を図示した。1は瀬戸の皿、2～4は青磁碗、5は在地産の鉢、6は焙烙、7は瀬戸産のすり鉢である。この他、鍛冶椀形滓、煙



第373図　第80～83・97号溝跡（1）



SD80　A－A'
1　淡灰白色土　炭化物なし　粘性強い

SD81　C－C'　D－D'
1　淡灰色土　炭化物なし　粒子細かい　粘性強い

SD83　H－H'
1　暗灰褐色土　炭化物なし　粘性非常に強い
2　暗褐色土　砂質土含む　粒子粗い
3　暗灰色土　炭化物含む　粘性強い
4　明灰白色土　炭化物なし　粒子細かい
5　暗灰褐色土　炭化粒子含む
6　黒色土　炭化物層

SD83　I－I'
1　淡灰褐色土　炭化粒子含む　粒子細かい　粘性強い
2　黒色土　炭化粒子多量
3　灰白色土　炭化物含む　粒子粗い　粘性強い
4　暗灰色土　炭化物多量　粘性強い
5　灰白色土　炭化物なし　粒子細かい　粘性強い
6　暗灰色土　炭化物多量　粘性強い

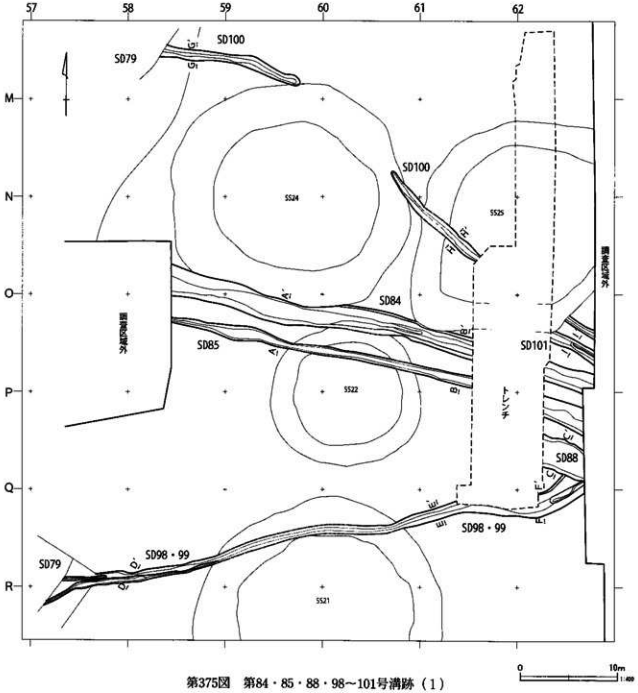
0　2m
1:80

第374図　第80～83・97号溝跡（2）

管を検出した。また、石製品では砥石と凹石を検出した。また、形象埴輪を含む埴輪片が少量出土したが、溝跡に伴うものではなく、周辺の古墳からの混入遺物である。その他遺構には伴わないが、O－60グリッドから緑色凝灰岩の剥片が1点出土した。

第82号溝跡（第373・374図）

調査区の南側東寄り、W・X－61、V－W－62グリッドに位置する。第148・149号住居跡、第83号溝跡、第13号墳と重複する。



第375図　第84・85・88・98～101号溝跡（1）

走行方向はN－31°－Eを指す。規模は全長19.28m、幅0.88～1.80m、深さ13.5～19.6cmを測る。南北方向に直線的に伸びる。

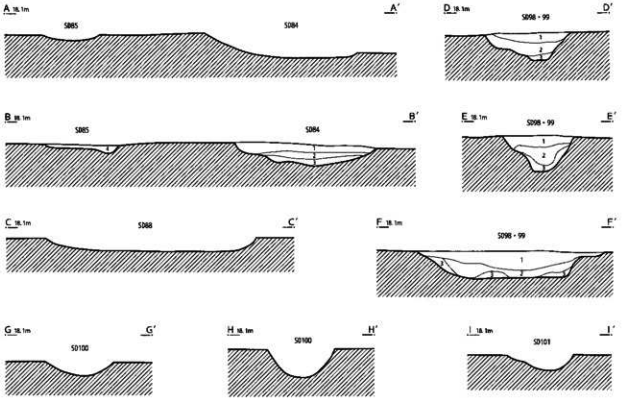
本溝跡は、いずれの遺構よりも新しく、確認面で検出された。覆土は、暗褐色土を主体とし粘土粒子を含む粘質土である。断面形態は、浅い箱型で底面は平坦である。

遺物はほとんど検出されなかったため時期は不詳である。埋土から古墳時代前期の土師器、円筒埴輪片が少量出土しているが、溝跡に伴うものではない。

第83号溝跡（第373・374・379～382図）

調査区の南側中央から東寄り、S－55・56、T－56～58、U－57～59、V－58～62グリッドに位置する。第176・177・186・198・207・213号住居跡、第82号溝跡、第19・26号墳と重複する。

重複関係は、古墳時代前期の第176・177・186・198・207号住居跡を切っている。一方、第



S D84　B－B'
1　暗褐色土　炭化粒子極少量　粘性あり
2　暗茶褐色土　小礫含む　粘性あり
3　暗灰褐色土　砂粒子を全体に含む　粘土ブロック(1～2cm)まばらに含む

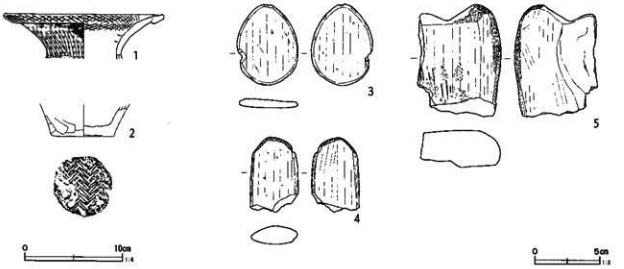
S D85　B－B'
4　暗褐色土　炭化粒子少量　粘性あり

S D98・99　D－D'　E－E'
1　黒褐色土　鉄分付着著しい　均一
2　黒褐色土　地山の青灰色ブロック少量
3　黒褐色土　地山の青灰色ブロック大型(3～4cm)多量

S D98・99　F－F'
1　黒褐色土　炭化粒子少量　全体に鉄分付着　色調は均一
2　黒褐色土　青灰色ブロック・炭化粒子少量　地山の崩落と考えられる大粒の青灰色ブロック少量
3　暗青灰色土　地山の崩落と思われる青灰色ブロック多量　下層の砂と混合

0　2m　1:80

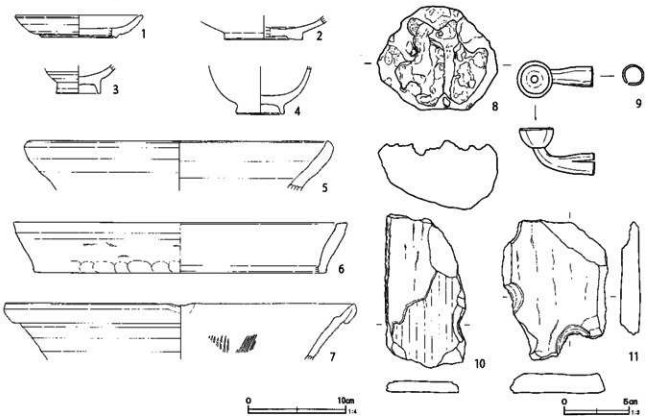
第376図　第84・85・88・98～101号溝跡（2）



第377図　第80号溝跡出土遺物

第158表　第80号溝跡出土遺物観察表（第377図）

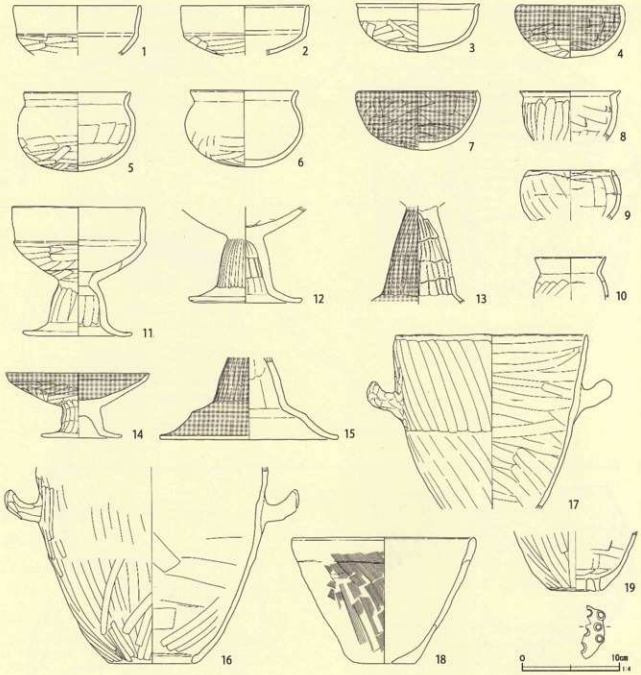
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	弥生	壺	16.4	4.6	—	CEIK	20	普通	にぶい黄橙	赤彩　T62G	80-2
2	土師器	甕	—	3.3	6.2	E	55	普通	にぶい褐	T62G	
3	石製品	砥石	長さ6.3	幅4.7	厚さ0.7	重さ29.3	石材　結晶片岩			T62G	
4	石製品	敲石	長さ5.8	幅3.7	厚さ1.5	重さ44.8	石材　砂岩			T62G	
5	石製品	敲石	長さ8.6	幅6.4	厚さ3.4	重さ258.2	石材　砂岩			T62G	154-1



第378図　第81号溝跡出土遺物

第159表　第81号溝跡出土遺物観察表（第378図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	皿	(13.0)	2.3	(8.0)	K	25	良好	灰黄	志野(丸)皿　瀬戸美濃産　16C末～17C初　T61G	
2	陶器	碗	—	2.5	(8.2)	I	40	良好	灰白	肥前産　貫入多　T62G	
3	陶器	碗	—	2.9	4.6	IK	80	普通	灰白	肥前産　17C後半　貫入多　T62G	
4	陶器	碗	—	4.9	4.8	K	50	良好	灰白	肥前産　17C後葉　貫入多　呉器手　T62G	
5	瓦質陶器	鉢	(30.8)	5.1	—	EHIKM	5	普通	暗灰	在地系　T60G	
6	陶器	焙烙	(34.4)	5.2	(30.1)	AC	15	普通	黒	在地系　外面煤付着　17C　T61G	
7	陶器	擂鉢	(35.9)	5.8	—	EIK	5	良好	淡黄	瀬戸美濃産　18C中頃　T62G	
8	鉄滓	椀形滓	長さ5.2	幅6.2	厚さ3.4	重さ97.36					149-2
9	鉄製品	煙管	長さ3.9	火皿径1.8×1.8	小口径1.0×1.1	重さ8.14				雁首　T62G	
10	石製品	砥石	長さ11.9	幅6.2	厚さ1.0	重さ110.7	石材　緑泥片岩			T61G	
11	石製品	凹石	長さ10.8	幅8.1	厚さ1.7	重さ213.7	石材　緑泥片岩				154-1

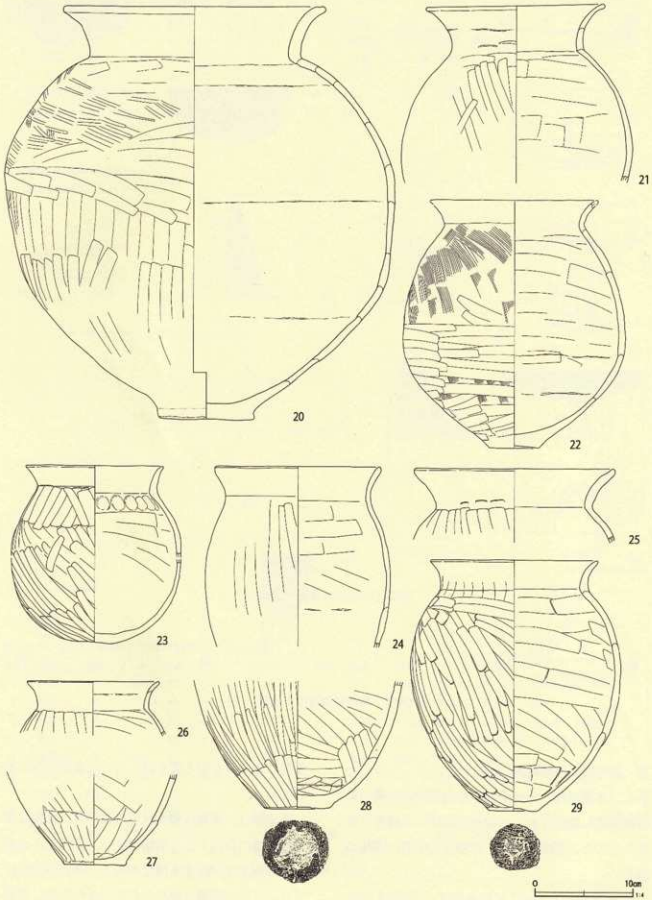


第379図　第83号溝跡出土遺物（1）

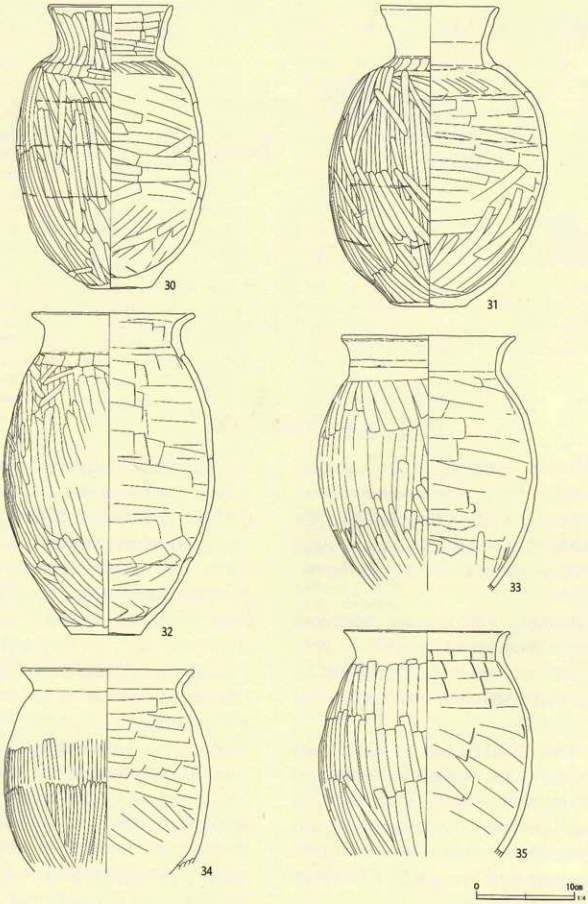
19・26号墳の古墳周溝に切られている。このことから、本溝跡は、カマドを伴う古墳時代中期の集落形成期に開削され、古墳築造時期には機能を停止していたと判断される。古墳時代中期の溝跡である。

走行方向はN－61°－Wを指す。規模は全長78.40m、幅3.28～6.00m、深さ60.0～108.0cmを測る。南側に膨らみながら弧を描くように東西方向に伸びる。

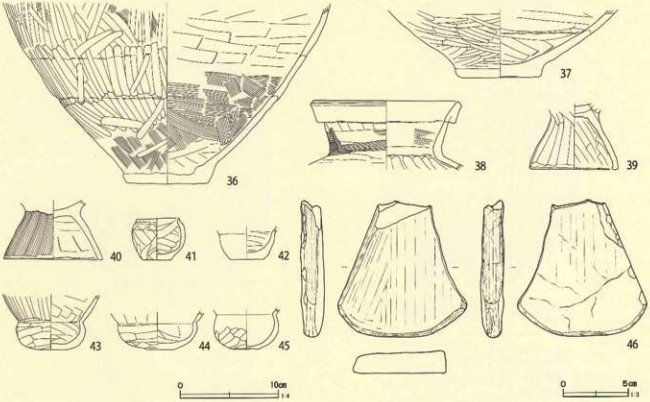
本溝跡は、東側は調査区域外に至り、西側は第79号溝跡に合流する。溝幅が広く、深さも1m前後あり南北を分断する機能がある。調査区内にはブリッジ状の遺構は検出されていないため、容易に越えることは難しい。西側は、第79号溝跡と合



第380図　第83号溝跡出土遺物（2）



第381図　第83号溝跡出土遺物（3）



第382図　第83号溝跡出土遺物（4）

流している。合流部付近では、取り入れ口の施設を検出できなかったが、流水があり東に向かって流れがあったものとみられる。溝跡の底面の標高は西側で17.00m、東側で16.75mを図り、高低差は約60mの距離で0.40mである。傾斜方向は東に向け低くなっている。

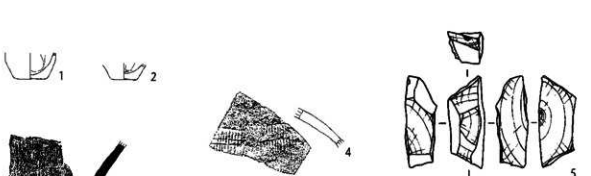
断面形態は、東側のY－61グリッド付近では逆台形で底面は幅を狭める。中央付近のU－58グリッド付近では、上幅も広くU字状で両側面の立ち上がりは緩い傾斜である。東側はやや緩やかな立ち上がりをもつ。

覆土は、灰褐色土を主体とし、焼土粒子、炭化粒子を含む。特に、断面観察の結果、黒褐色土の第2層、暗灰色土の第4・6層は炭化物を多く含み、その中間の第1・3・5層は粘性の強い灰白色粘土を主体とした堆積土である。洪水による土砂の堆積が繰り返された結果このような堆積層が形成されたと考えられる。

遺物は、1～46を図示した。1・2は模倣坏である。丸底の底部から口縁部が上方に直線的に立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。3は内斜口縁坏である。丸底の底部から口縁部が上方に立ち上がり、口唇端部内面に斜縁の面をもつ。4は丸底坏である。5～8は深身の埦である。5・6は丸底の深身の体部が球形状に立ち上がり口縁部で屈曲し外方に短く開く。口縁部横ナデ、体部外面はヘラケズリを施す。7・8は丸底の埦である。7は口縁部がわずかに内湾する。8は口唇部内面に斜縁の面をもつ内斜口縁の埦である。9は鉢である。10は鉢形態のミニチュア土器である。11～15は高坏である。11・12は短脚で、坏部は模倣坏である。13・15は長脚高坏で、13は粘土紐巻き上げタイプの造りである。15は脚部である。14は短脚で坏部は皿状の形態である。16～19は甑である。16・17は把手付きの大型甑である。18は鉢型の単孔形態、19は鉢型の多孔形態の甑である。20は大型の壺である。21も壺で口縁部が外に開き、胴部は球形である。22～35は甕である。23・26は小型

第160表　第83号溝跡出土遺物観察表（第379～382図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	坏	(13.2)	5.1	—	AH	20	普通	橙	U58G	
2	土師器	坏	(13.2)	5.1	—	ACHJ	20	普通	橙	U58G　№4	
3	土師器	坏	(12.2)	4.7	—	ACJ	85	普通	明赤褐	U57G	144-10
4	土師器	坏	10.6	5.6	—	ACHIJ	90	普通	にぶい橙	赤彩　V60G　№6	145-1
5	土師器	埦	11.0	8.1	—	HIJK	80	普通	明赤褐	V60G	123-5
6	土師器	埦	10.6	7.4	—	EJ	85	普通	橙	V61G	123-6
7	土師器	埦	12.3	6.1	—	AEHIJK	90	普通	にぶい赤褐	赤彩　V60G　№7	123-7
8	土師器	埦	(10.4)	5.1	—	AHIJ	20	普通	灰黄褐	V62G	
9	土師器	鉢	(8.6)	5.1	—	AEHIJK	35	普通	にぶい黄橙	V59G	
10	土師器	ミニチュア	(7.2)	4.3	—	ACHI	30	普通	橙	V59G	
11	土師器	高坏	(13.6)	13.2	11.4	ACHJ	65	普通	明赤褐	V58G　№6	131-1
12	土師器	高坏	—	9.8	11.7	AEHIJK	70	普通	橙	V60G　№4	
13	土師器	高坏	—	10.0	—	ABEHIK	90	普通	にぶい黄橙	赤彩　二孔　V60G　№1	
14	土師器	高坏	14.9	6.6	8.4	CGI	65	普通	にぶい褐	赤彩　U58G　№2	130-6
15	土師器	高坏	—	8.1	(17.8)	ACJ	50	普通	にぶい黄橙	赤彩　V61G	
16	土師器	甕	—	20.0	(9.0)	ACEH	30	普通	灰黄	V60G	
17	土師器	甕	19.6	(17.9)	—	AEHIJK	70	普通	灰黄褐	U57G　№1	141-4
18	土師器	甕	(18.6)	13.0	6.7	AEHIJK	40	普通	にぶい黄橙	V61G　№7・8	
19	土師器	甕	—	6.1	(5.8)	JM	30	普通	灰褐	V61G　№5	
20	土師器	壺	26.1	42.1	9.5	GI	70	良好	茶褐	V62G　№2	90-1
21	土師器	壺	18.0	18.0	—	EH	30	普通	にぶい褐	V58G　№3	
22	土師器	甕	—	25.2	5.0	AEHIJKLM	30	普通	暗灰黄	V62G　№1	
23	土師器	小型甕	13.9	18.0	3.9	ACEHIJK	60	普通	にぶい橙	V60G	117-6
24	土師器	甕	16.8	18.3	—	HIJK	35	普通	にぶい褐	V58G　№6	
25	土師器	甕	20.2	7.5	—	ACEI	60	普通	にぶい赤褐	石英多　V60G	
26	土師器	小型甕	(13.4)	5.5	—	AEHIJK	35	普通	明赤褐	V61G　№3	
27	土師器	甕	—	9.3	6.4	AEIJ	35	普通	明赤褐	石英多　V60G	
28	土師器	甕	—	13.0	6.7	A	45	普通	にぶい赤褐	V60G　№8	
29	土師器	甕	(17.0)	25.4	5.2	ACG	60	普通	明赤褐	V60G　№1	114-2
30	土師器	甕	12.4	28.9	6.6	CJM	90	普通	にぶい橙	V62G　№3	114-3
31	土師器	甕	(11.6)	29.8	7.8	ACEHIJK	80	普通	にぶい黄橙	V62G　№1	114-4
32	土師器	甕	16.3	32.9	7.1	ACH	70	普通	褐灰	V59G　№2	114-5
33	土師器	甕	17.5	2.9	—	AEHIJK	70	普通	にぶい橙	U58G	114-6
34	土師器	甕	(17.5)	21.0	—	HIJK	70	普通	灰黄褐	V61G　№3	115-1
35	土師器	甕	16.8	22.9	—	AI	60	普通	明赤褐	V60・61G	115-2
36	土師器	壺	—	18.4	8.5	ACHJ	40	普通	灰褐	U58G	
37	土師器	壺	—	6.9	8.7	ABC	55	普通	にぶい赤褐	V60G　№2	
38	土師器	壺	(14.8)	7.0	—	AEHIJK	40	普通	にぶい褐	V62G	
39	土師器	台付甕	—	6.6	(9.0)	CEJ	40	普通	明赤褐	V61G　№2	
40	土師器	台付甕	—	6.0	(10.2)	AHIJ	40	普通	にぶい赤褐	V60G　№5	
41	土師器	手づくね	4.4	4.3	2.8	AE	100	普通	橙	V61G　№11	
42	土師器	手づくね	—	3.3	3.4	AHI	90	普通	暗灰黄	V61G　№1	
43	土師器	坩	—	5.6	3.0	ACHIJ	60	普通	にぶい橙	V61G　№4	138-6
44	土師器	坩	—	3.8	2.6	ABEHIK	30	普通	にぶい黄橙	V62G	138-5
45	土師器	坩	—	4.1	2.4	AE	50	普通	にぶい橙	V62G	
46	石製品	砥石	長さ10.5	幅9.8	厚さ1.9	重さ236.5	石材	砂岩		V62G　№3	154-1



第383図　第84号溝跡出土遺物

第161表　第84号溝跡出土遺物観察表（第383図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	土師器	手づくね	－	2.5	3.2	BEI	50	普通	灰黄	O61G	
2	土師器	ミニチュア	－	1.7	2.6	EIK	50	普通	褐	O59G	
3	須恵器	甕	－	6.6	－	IJ	5	良好	灰		
4	陶器	甕	－	4.4	－	IK	5	良好	灰白	常滑	
5	石製品	管玉未製品	長さ2.4	幅0.9	厚さ0.8	重さ1.8　石材　緑色凝灰岩				O60G　形割	151-18

の丸甕である。22は胴部下半に最大径をもつ。29は胴部中位に最大径をもつ。30・31は長頸の口縁部で肩に張りをもち胴部は砲弾型である。底部は平底。32はやや胴部が長く中位に最大径をもつ。口縁部は短く外反する。34・35も口縁部は短く外反する。36・37は大型の壺底部である。38は折り返し口縁壺である。39・40は台付甕台部、41・42は手づくね土器、43～45は坩である。46は砥石である。

本溝跡は、古墳時代前期の住居跡や古墳周溝と重複しているため覆土中からは溝跡の時期に伴わない遺物も多く出土した。

第84号溝跡（第375・376・383図）

調査区の北西から北東にわたるN－58・59、O－58～62グリッドに位置する。第257・259号住居跡、第22・24・25号墳と重複する。いずれの遺構よりも新しい。南側1mを第85号溝跡が並行するように走る。

走行方向はN－80°－Wを指す。規模は全長34.80m、幅2.08～2.56m、深さ24.3～29.2cmを測る。断面形態は、幅広の皿状を呈している。覆土は、粘性のある褐色土を主体とし、第2層は小礫を多く含むことから河川からの流入か洪水砂によるものと考えられる。

常滑産の甕の破片が出土しており、中世以降の開削と考えられる。この他に古墳時代前期土師器、埴輪、古代の須恵器、緑泥片岩等の破片が混入していた。

第85号溝跡（第375・376図）

調査区の北西から北東にわたるO－58～61、P－62グリッドに位置する。第246・257・270号住居跡、第22号墳と重複する。いずれの遺構よりも新しい。北側1mを第84号溝跡が並行するように走る。両溝跡は、重複関係は見られず、並行していることから一対の可能性もあるものの性格不明である

走行方向はN－79°－Wを指す。規模は全長31.12m、幅0.72～1.36m、深さ10.7～16.5cmを測る。溝跡は、西側が細く、東に向かって徐々に幅を広げている。断面形態は浅い皿状である。東側では、

溝跡の底面はやや南側に窪みを伴う。

図示すべき遺物は検出されなかった。

第86・87号溝跡　欠番

第88号溝跡（第375・376・384図）

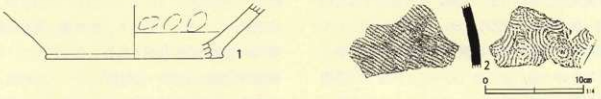
調査区の北側の東寄り、P－62グリッドに位置する。第98・99号溝跡と重複する。北側1mを第85号溝跡、南側に第98・99号溝跡が走る。検出された部分は、東側調査区外、西側はトレンチまでの間を検出した。北側の第84・85号溝跡と並行する。

走行方向はN－73°－Wを指す。規模は全長4.40m、幅3.20m、深さ20.0cmを測る。断面形態は浅い皿状である。底面は平坦で側縁は立ち上がりも緩やかである。

本溝跡は、第84・85号溝跡と同時期の可能性がある。また、第98・99号溝跡を切っている。

出土遺物は、埋土から古墳時代前期の土師器片が少量出土しているが、溝跡に伴うものではない。

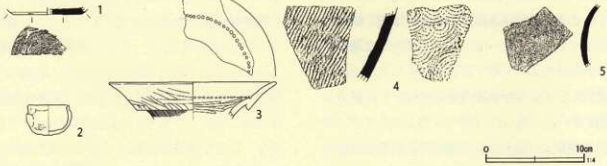
第89～96号溝跡　欠番



第384図　第88号溝跡出土遺物

第162表　第88号溝跡出土遺物観察表（第384図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	陶器	甕	－	5.5	(18.0)	AI	15	良好	灰	常滑　P62G　No.1	
2	須恵器	甕	－	6.5	－	EIK	5	良好	灰	青海波文	



第385図　第98号溝跡出土遺物

第163表　第98号溝跡出土遺物観察表（第385図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎　土	残存	焼成	色調	備　　考	図版
1	須恵器	坏	－	0.7	(7.0)	AIJK	25	良好	灰		
2	土師器	手づくね	4.0	3.1	－	AEIK	90	普通	にぶい橙		
3	土師器	壺	(16.8)	3.8	－	EHI	15	良好	にぶい橙	刺突文	
4	須恵器	甕	－	7.6	－	EHIJ	5	良好	灰	青海波文	
5	須恵器	壺	－	6.4	－	EIK	5	良好	灰	波状文	

第97号溝跡（第373・374図）

調査区の南側の西寄り、W－53・54、X－53グリッドに位置する。第125・232・240号住居跡、第17号墳と重複する。

走行方向はN－48°－Eを指す。規模は全長11.02m、幅0.56m、深さ7.7～17.0cmを測る。断面形態は、浅い掘り込みのU字状である。覆土は淡灰白色粘土を主体とする。第80～82号溝跡と近似し、同時期の可能性がある。

本溝跡に伴う遺物は検出されなかったため時期は不明である。埋土から古墳時代前期の土師器片が少量出土しているが、溝跡に伴うものではない。

第98・99号溝跡（第375・376・385図）

調査区の中央付近を西側から東側にわたるP－62、Q－57・58、60～62、R－57グリッドに位置する。第21号墳と重複する。

走行方向はN－74°－Eを指す。規模は全長35.36m、幅0.80～2.40m、深さ37.7～55.4cmを測る。

本溝跡は、西側部分で分離していたが、R－57グリッド付近で合流し一体の溝跡として捉えることができる。断面形態は、西側の合流部分で逆台形の箱型である。第98号溝跡はやや浅く、第99号溝跡は一段深く掘り込まれている。Q－61グリッド付近では第98号溝跡部分のテラスは短く溝幅も細くなっている。Q－62グリッド付近では溝幅が広がり底面も広く平坦である。覆土は、地山の青灰色ブロックを含む黒褐色土を主体とし、鉄分の沈殿が多い。

出土遺物は、埋土から古墳時代前期の土師器片少量と須恵器甕の破片を出土しているが、溝跡に伴うものではない。

第100号溝跡（第375・376・386図）

調査区の北西から北東にわたるL－58・59、M－60、N－60・61、O－62グリッドに位置する。第264・265・297号住居跡、第24・25号墳と重複する。

走行方向はN－47°－Wを指す。規模は全長26.48m、幅0.56～1.28m、深さ26.8～43.8cmを測る。西端と東端の比高さわずかであるが、東側に傾斜している。断面形態は平坦な底面をもたないU字状である。

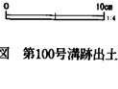
時期は不明である。埋土から古墳時代前期の土師器、円筒埴輪がまとまって出土しているが、重複遺構からの混入であろう。この他に奈良・平安時代の須恵器片が検出された。

第101号溝跡（第375・376図）

調査区の北側の東寄りO－62グリッドに位置する。北側に第100号溝跡、南側に第85号溝跡が並行するように走る。

走行方向はN－65°－Wを指す。規模は全長4.64m、幅1.20m、深さ23.0cmを測る。断面形態は、南側に緩やかなテラスをもつ二段掘りである。東側は調査区域外、西側はトレンチによって不明となる。

遺物は検出されなかった。



第386図　第100号溝跡出土遺物

第164表　第100号溝跡出土遺物観察表（第386図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	ミニチュア	(6.0)	5.5	－	CJ	30	普通	灰黄褐		

5．土壙

集落の形成された台地上に、第65～76号土壙を検出した。ただし、第68号土壙は欠番としたため、11基の土壙を確認した。

第65号土壙（第387図）

X－59グリッドに位置する。第145号住居跡内にある。軸方向はN－11°－Eで、形態は楕円形である。断面形態は二段掘りである。規模は長軸0.87m、短軸0.57m、深さ16.0cmである。

時期は不詳である。埋土から古墳時代前期の壺・甕類の胴部破片が少量出土したが、土壙に伴うものではない。

第66号土壙（第387図）

W－60グリッドに位置する。第163号住居跡炉跡と重複する。軸方向はN－62°－Wで、形態は円形である。断面形態は浅い皿型である。規模は長軸1.32m、短軸1.15m、深さ12.0cmである。

遺物は検出されなかった。

第67号土壙（第387・388図）

V－57グリッドに位置する。第190住居跡を切って造られていた。軸方向はN－80°－Wで、形態は長方形である。浅い箱型である。規模は長軸2.15m、短軸1.15m、深さ19.0cmである。

遺物は1～6を図示した。いずれも土師器で古墳時代中期の遺物である。1は内斜口縁坏である。丸底の底部から体部が外側に内湾して立ち上がる。口縁部は端部が屈曲し、内側に面をもつ。口縁部ヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面に放射状暗文が施されている。色調は赤褐色である。2は坏身模倣坏である。3・4は坏蓋模倣坏である。5は胴部下半に最大径をもつ甕である。6は高坏である。

第68号土壙　欠番

第69号土壙（第387・388図）

V・W－58グリッドに位置する。第191号住居跡と重複する。軸方向はN－12°－W、形態は楕円形である。断面形態は浅い逆台形である。規模は長軸1.40m、短軸1.19m、深さ21.0cmである。

遺物は9を図示した。口端部が屈曲外反する複合口縁の壺である。口縁内面に平坦面を形成する。口端部は工具による押捺が廻る。弥生時代後期と考えられる。

第70号土壙（第387・388図）

U－59グリッドに位置する。第183・224号住居跡、第19号墳と重複する。軸方向はN－64°－Eで、形態は不整形である。断面形態は浅い掘り込みの皿型で、底面は中央部分がやや窪む。規模は残存する部分で、長軸2.21m、短軸1.43m、深さ28.0cmである。

時期は不詳である。埋土から古墳時代前期の土器片が少量出土したが、土壙に伴うものではない。

遺物は7・8を図示した。7は鉢型の甑底部破片である。8は壺の頸部である。櫛描波状文を2段施文している。

第71号土壙（第387図）

P・Q－62グリッドに位置する。軸方向はN－0°で、形態は円形である。断面形態はやや掘り込みの深い逆台形である。規模は長軸0.75m、短軸0.70m、深さ53.0cmである。

遺物は検出されなかった。

第72号土壙（第387図）

V－61グリッドに位置する。第174・208号住居跡と重複する。軸方向はN－87°－Wで、形態は楕円形である。断面形態は浅い掘り込みの皿型である。規模は長軸1.15m、短軸0.57m、深さ16.0cmである。

遺物は検出されなっかた。

第73号土壙（第387図）

V－61・62グリッドに位置する。第176号住居跡内で検出された。軸方向はN－40°－Eで、形態は不整楕円形である。断面形態は船底型である。規模は長軸2.72m、短軸1.16m、深さ35.0cmである。

遺物は検出されなかった。